別冊宝島スペシャル

燃える欧州戦線の勝敗を一変させる！究極の奇想兵器！

第二次世界大戦秘録 世界・秘密兵器大全

定価500円

最先端の史実研究で
奇想兵器を
完全図解！

回転殺戮兵器「パンジャンドラム」 空飛ぶ謎の円盤「ハウニブ」
超重戦車「マウス」 超絶射程砲「ムカデ砲」

ジェット戦闘機「Me262」、亜宇宙爆撃機「ゼンガー」、リモコン戦車「ゴリアテ」、
無敵巨大列車砲「ドーラ」、世界の巨大戦艦建造計画……and more

別冊宝島スペシャル

燃える欧州戦線の勝敗を一変させる！究極の奇想兵器！

第二次世界大戦秘録 世界・秘密兵器大全

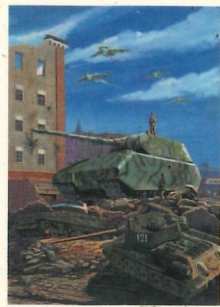
定価500円

最先端の史実研究で奇想兵器を完全図解！

回転殺戮兵器「パンジャンドラム」 空飛ぶ謎の円盤「ハウニブ」

超重戦車「マウス」 超絶射程砲「ムカデ砲」

ジェット戦闘機「Me262」、亜宇宙爆撃機「ゼンガー」、リモコン戦車「ゴリアテ」、無敵巨大列車砲「ドーラ」、世界の巨大戦艦建造計画……and more

別冊宝島スペシャル 第二次世界大戦秘録 世界・秘密兵器大全 定価500円 宝島社

空想する秘密兵器
もし、あの秘密兵器が活躍していたなら!?

もし、H44級戦艦が実戦投入されていたなら!? 横山信義

もし、円盤機ハウニブが米軍に攻撃を加えていたなら!? 吉田親司

もし、超重戦車マウスがベルリン攻防戦に投入されていたなら!? 鈴木ドイツ

もし、ミソサザイが我が国に渡っていたなら!? 川又千秋

もし、日本海軍の手にMe262が渡っていたなら!? 内田弘樹

もし、ドイツの原子力潜水艦が完成していたなら!? 林譲治

もし、ヒトラーユーゲントがナッターを運用していたなら!? 青山智樹

もし、亜宇宙爆撃機ゼンガーが実際に飛んでいたなら!? 陰山琢磨

もし、水中高速潜水艦が実戦を行なっていたなら!? 伊吹秀明

もし、グラーフツェッペリンが有効に運用されていたなら!? 佐原晃

ゴリアテは電動ダビデの夢をみるか!? 吉岡平

雑誌66084-40
定価500円 本体476円
ISBN978-4-7966-6368-7
C9431 ¥476E

別冊宝島スペシャル

燃える欧州戦線の勝敗を一変させる！究極の奇想兵器！

第二次世界大戦秘録
世界・秘密兵器大全

目次　第二次世界大戦秘録　世界・秘密兵器大全

第一章　空前の秘密兵器計画～夢想する秘密兵器～

第二章　闇にあった兵器たち～活躍する秘密兵器～

第三章 本格参戦に至らず〜登場する秘密兵器〜

再録コミック初出
『コンバットコミック1999年冬号』（日本出版社）

表紙・大扉デザイン／Malpu Design（清水良洋）
表紙・大扉絵／吉原幹也
本文デザイン／塚越勇（遊デザイン室）
本文DTP／有限会社エムアンドケイ

はじめに

人の作りし世界は、驚異に満ちている。
いまも昔もそれは変わらず、人類の叡智は無限の可能性に溢れているのだ。
戦争は悲劇であるが、その反面で数多くの「発明」をもたらしてきた。
事実、現在の我々の生活を支える技術は、その多くが戦時中に実用化されたものだ。
先人たちは知性を競いあい、高めあった。
戦争の是非はさておき、その努力と情熱は瞠目に値しよう。
本書には、それらの精髄が凝縮されている。
ようこそ！　奇想と驚異の世界へ!!

別冊宝島編集部

昭和13年
東京帝国大学において
造船工学の権威
平賀譲造船中将は
その特別講義のなかで——
「戦艦は
航空機によって絶対に
撃沈されることはない」
と断じた

樋端ッ!!

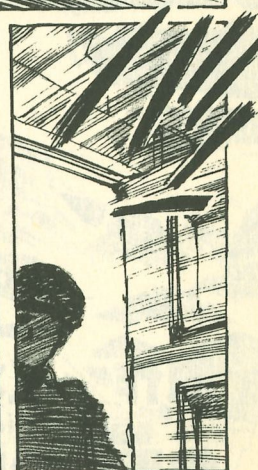
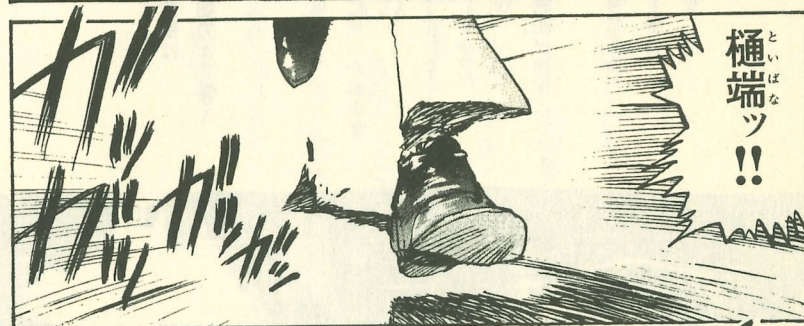
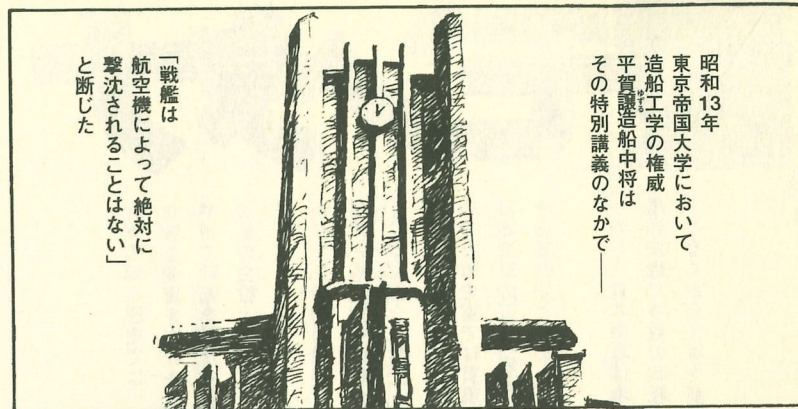
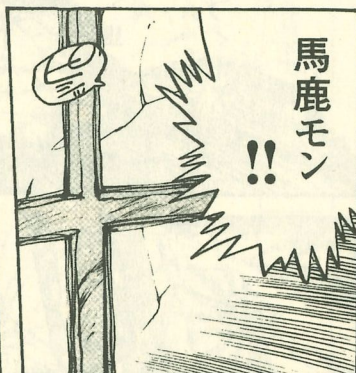
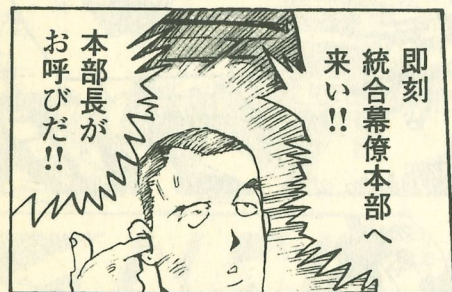
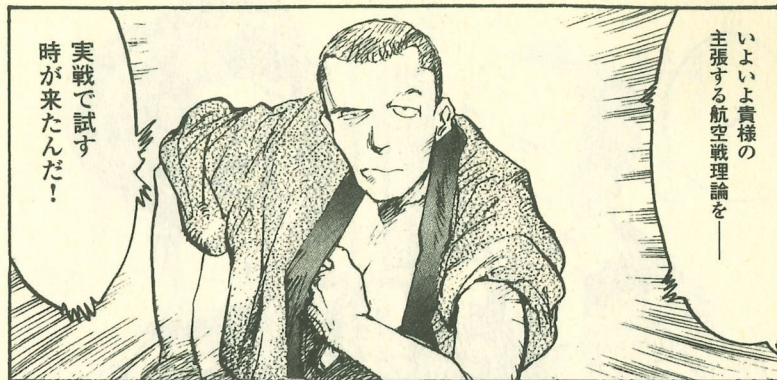
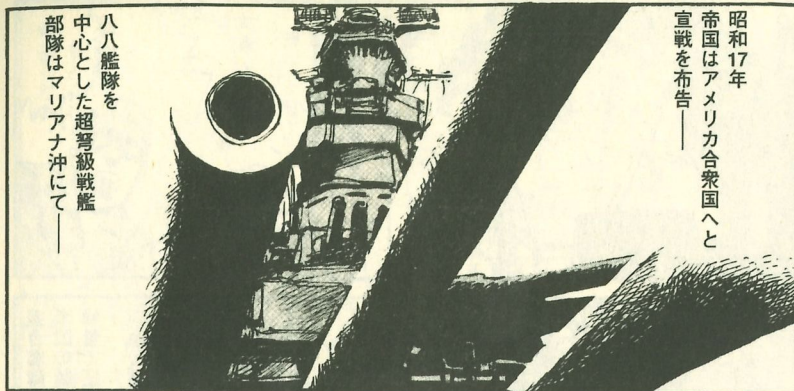
樋端ッ

ん

馬鹿モン!!

即刻
統合幕僚本部へ
来い!!
本部長が
お呼びだ!!

この非常時に
なにを
フザケとるか!!

いよいよだぞ
樋端!!

いよいよ貴様の
主張する航空戦理論を――
実戦で試す
時が来たんだ!

昭和17年
帝国はアメリカ合衆国へと
宣戦を布告――
八八艦隊を
中心とした超弩級戦艦
部隊はマリアナ沖にて――

キンメルの合衆国艦隊に対し
一大水上決戦を敢行――
米太平洋艦隊を海底に
葬り去るのだった……
ハズバンド・E・キンメル大将

砲雷撃戦
準備!!

※ 樋端久利雄中佐=昭和18年4月、連合艦隊航空参謀として山本五十六司令長官とともに前線に赴く途中、搭乗していた一式陸攻が撃墜されて戦死した。

たしかに
今まで航空隊は本土防空や艦隊直上の制空権確保やあるいは偵察といった——
補助的な任務しか与えられてきませんでした

だがそれはそのような使い方しかされなかっただけのこと……

バカな
航空攻撃によって戦艦は撃沈できん
それに——

VT信管と電探管制の完備された米戦艦に対しては……
そう
航空機の攻撃など竹ヤリ突撃と変わらんぞ!

まあ
待て

海軍の主力戦艦部隊は——
すでに海の藻屑と消えたのだ……

樋端君
君が必要とするすべての措置をとるための権限を——
君に与えよう

米国戦艦部隊を
撃滅するのだ!!

はッ

BB67モンタナ

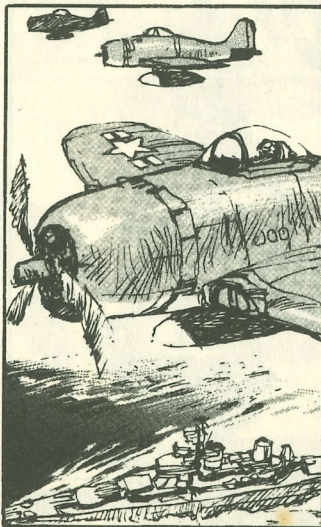
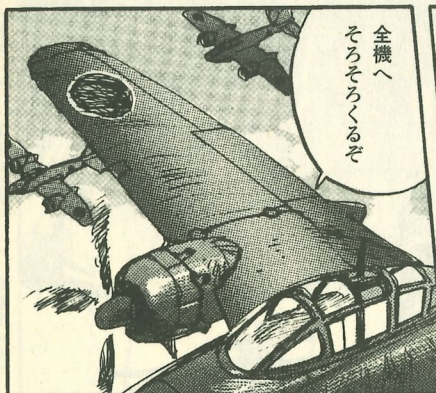
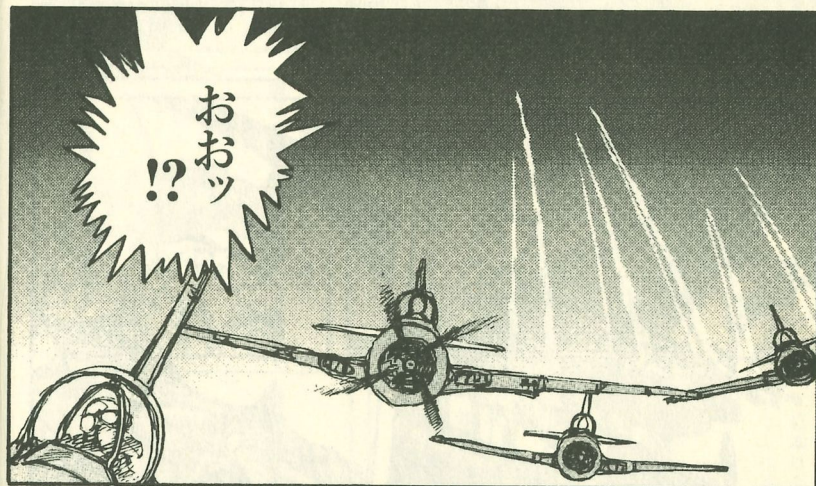
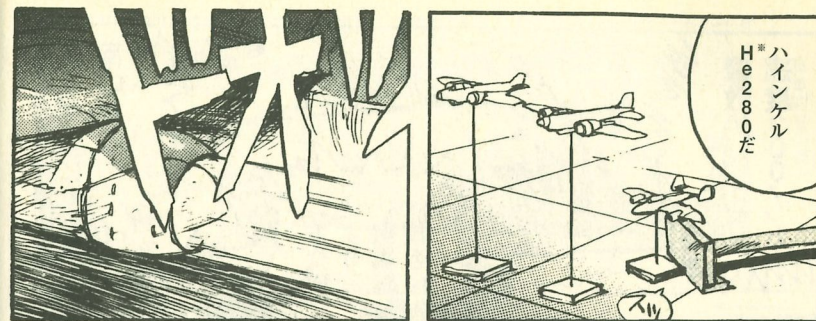
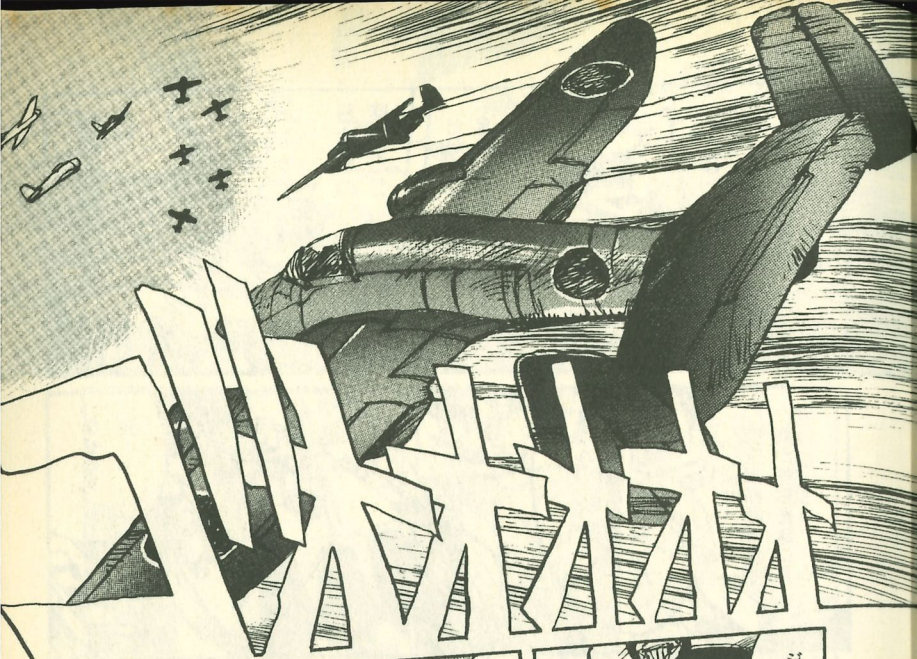
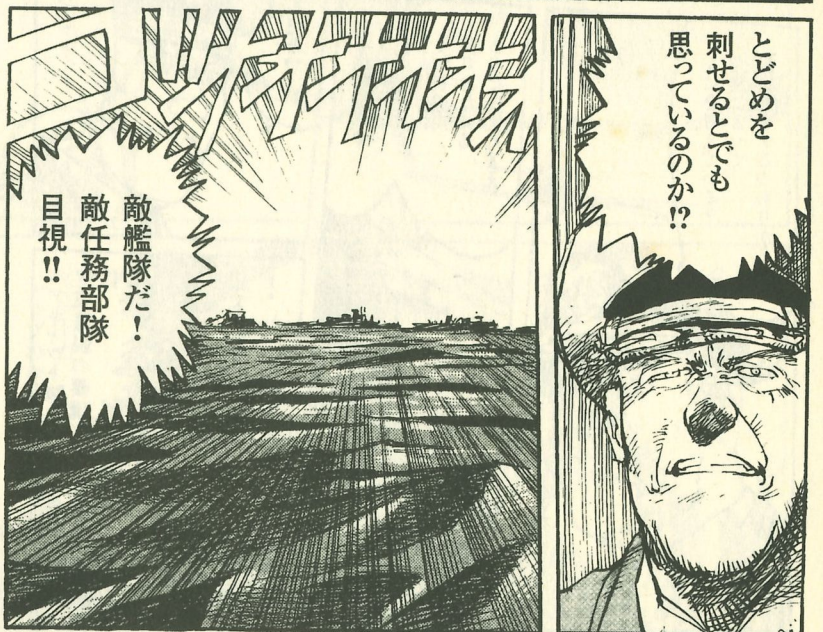
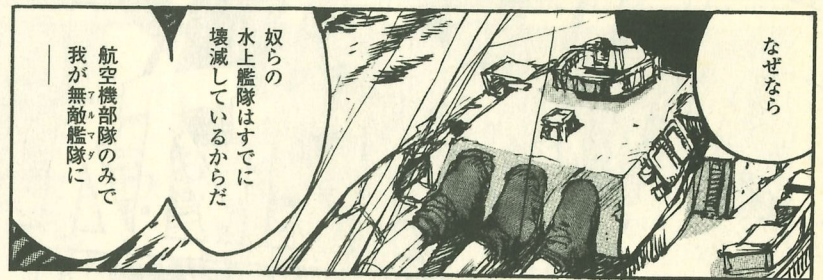
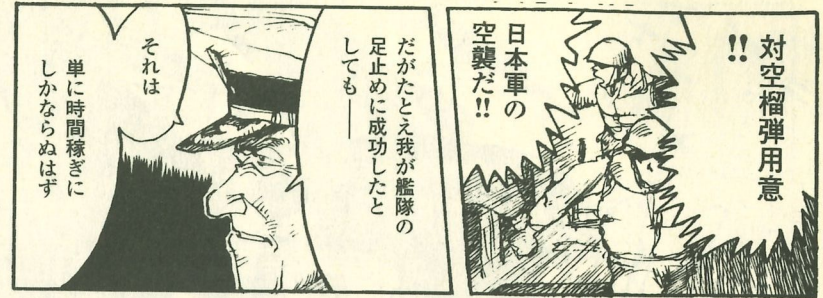
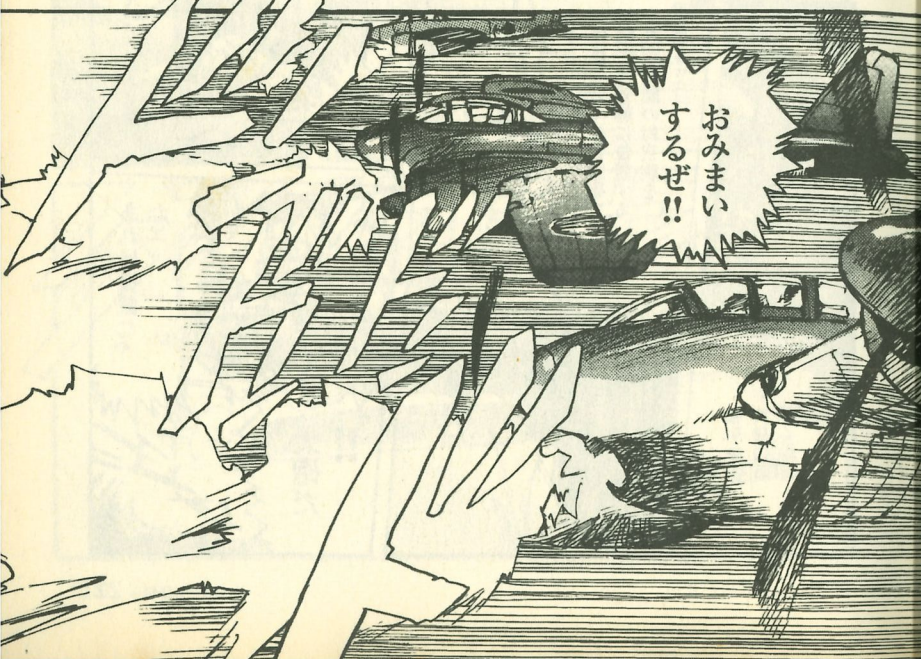
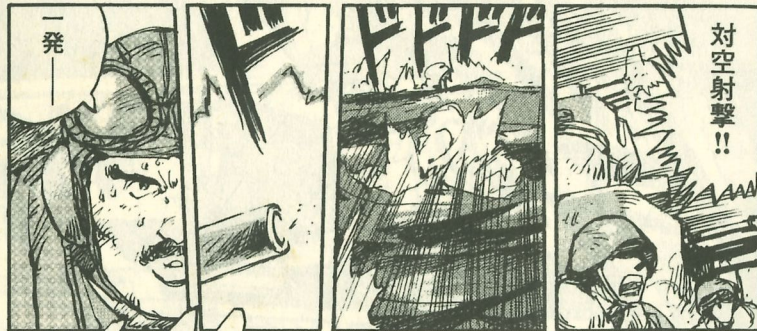
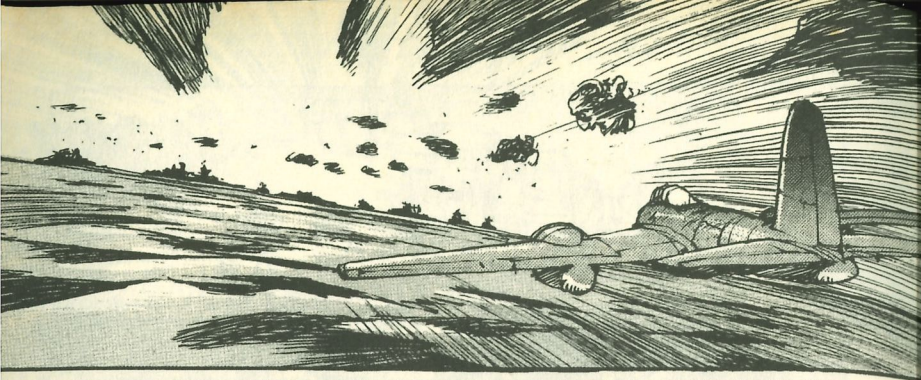
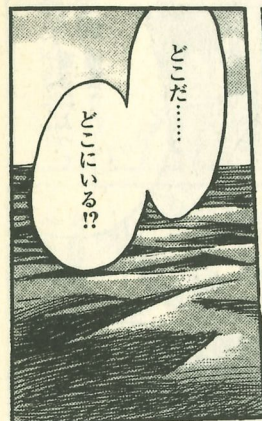
上空はベアキャットばかりか

八八艦隊をはじめとする敵戦艦部隊は海の藻屑だ

このままトーキョー湾で観艦式としゃれこみたいものですね

日本はまだ降伏してはおらんぞ

奴らが戦う意志を放棄するまで手をゆるめてはならんのだ

米太平洋艦隊司令長官
チェスター・W・ニミッツ大将

※キ九三は戦車を破壊すべく開発された機体である。胴体下部に57ミリ機関砲を装備し、時速は600キロを超える予定だったが、史実では昭和20年5月に試作一号機がテスト飛行したのみであった。

※He280は世界初のジェット戦闘機として、ドイツのハインケル社が開発、1941年4月2日に初飛行した。同年7月には最高時速700キロを記録したが、ハインケル博士がナチスに否定的だったため不採用となり、最初の実用ジェット戦闘機の座をメッサーシュミットMe262に譲った。

ゴオオオオオ

ジェット……
だと!?

応援隊を出す
それまで
持ちこたえる
ように伝えたまえ

ベアキャット隊より
空域離脱の要請が
!!

却下しろ
!

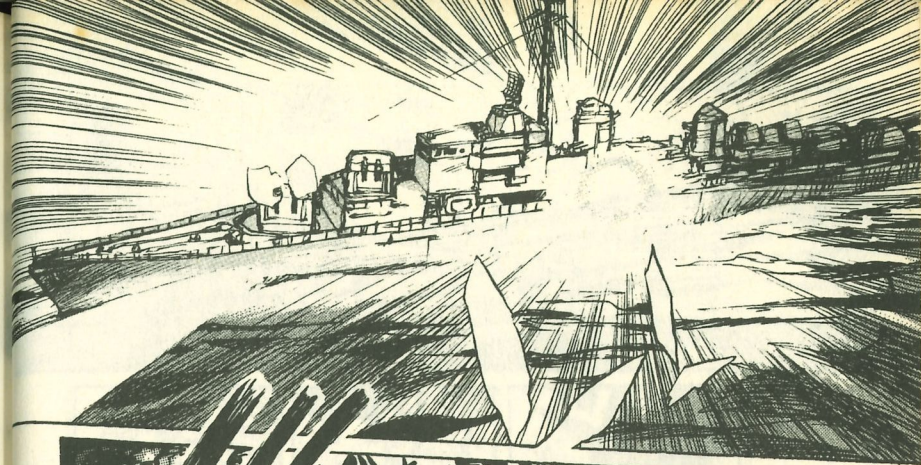
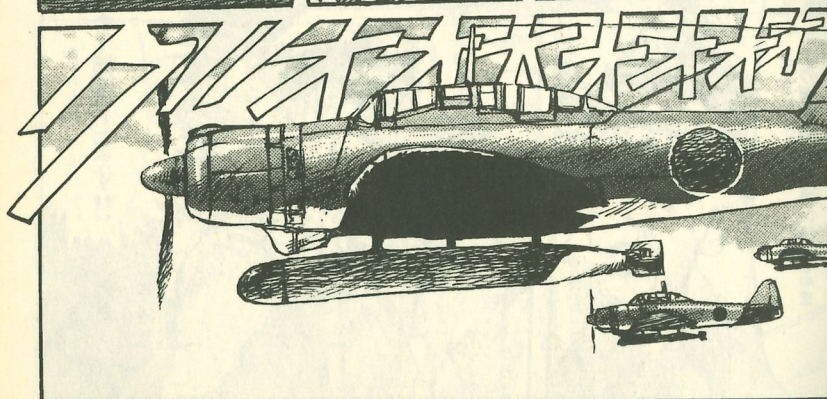
なにを考えている?
空襲によって
足止めをするつもりか?

とどめを刺せるとでも思っているのか!?

敵艦隊だ! 敵任務部隊目視!!

対空射撃!!

一発――

おみまいするぜ!!

キ九三
搭載の57ミリ機関砲で
輪形陣外縁に位置する
敵駆逐艦の対空砲を
潰す……

輪形陣に
突破口を
開くのだ

そ……んな
バカな!!

あれは機銃じゃ
ねエッ

大砲だ!!

そう
戦艦にとどめを刺すには
魚雷による攻撃が
必須だ
だが
速度の遅い
雷撃機は
接敵するはるか
以前に――

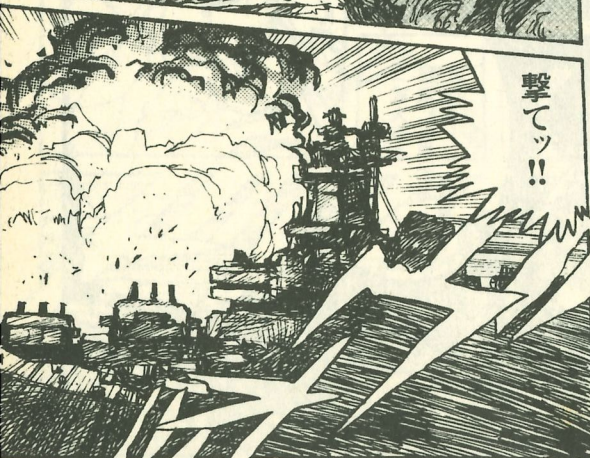
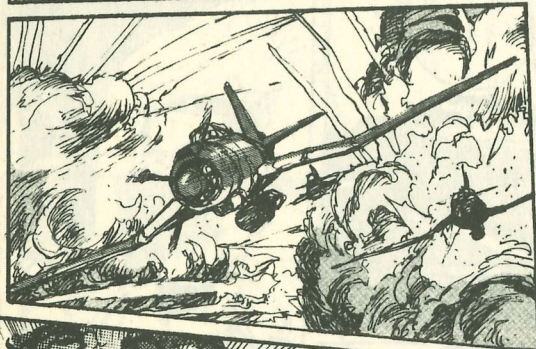
電探によって
捕捉され――
攻撃を受ける
ことになる……
新たな敵編隊!!

北東より接近します!!

きたな!
ジャップの雷撃機隊に違いはあるまい

グオオオオ
ようし
狙いはモンタナ級
だ……
全機!
突っ込むぞ!!
流星改部隊は……
全員!
死んでもらう

なッ……
なにィ!?

貴様らの全滅を
前提としなければ――
今次作戦は
成功を期しがたい

樋端よォ
お前のいうとおりに死んでたら――命がいくつあっても足りるもんかい！

ホホオオ
必ず生きて還るから
そう思え!!

対空榴弾撃てッ!!

うおおおおおお
撃てッ!!

ギャアアア

まさか

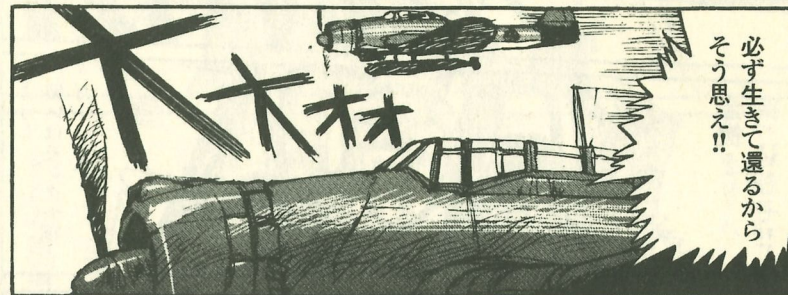
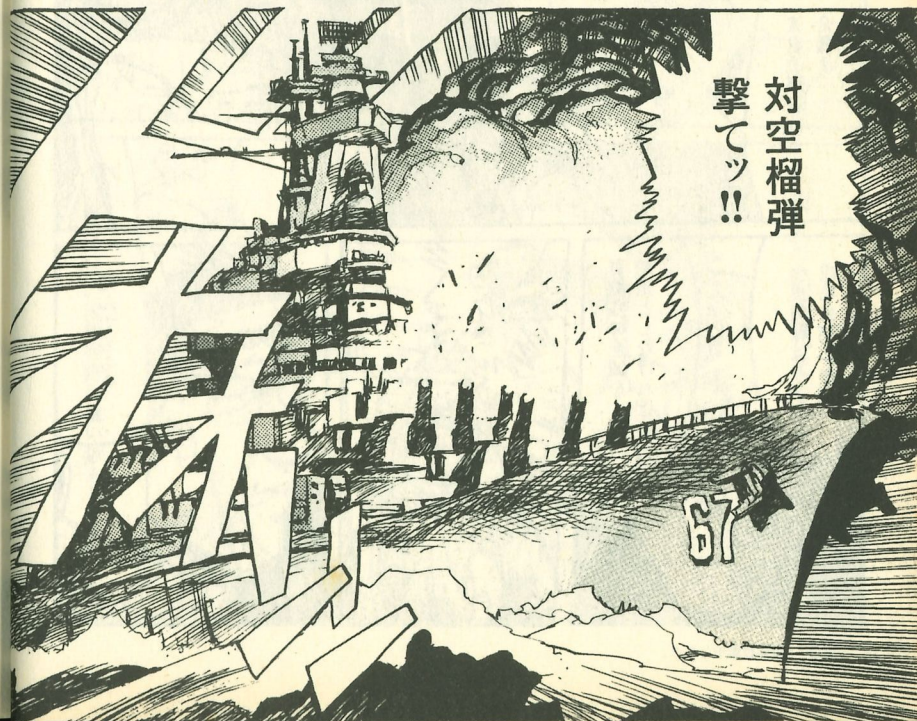
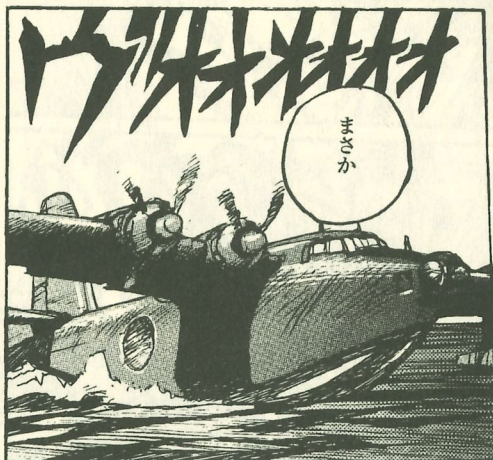
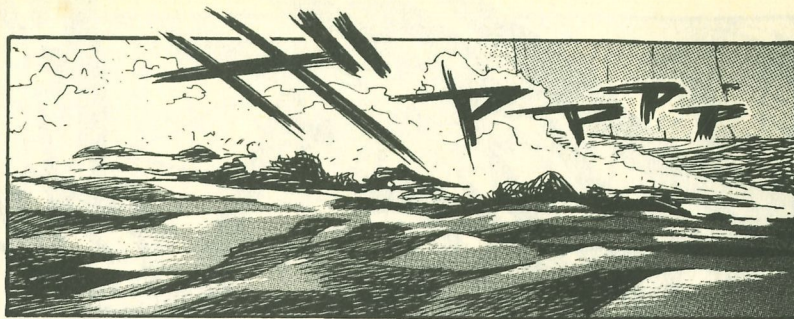
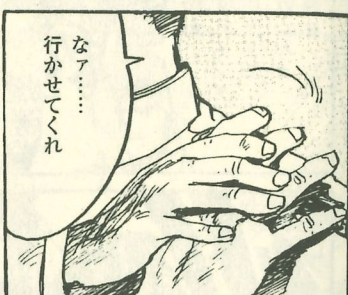
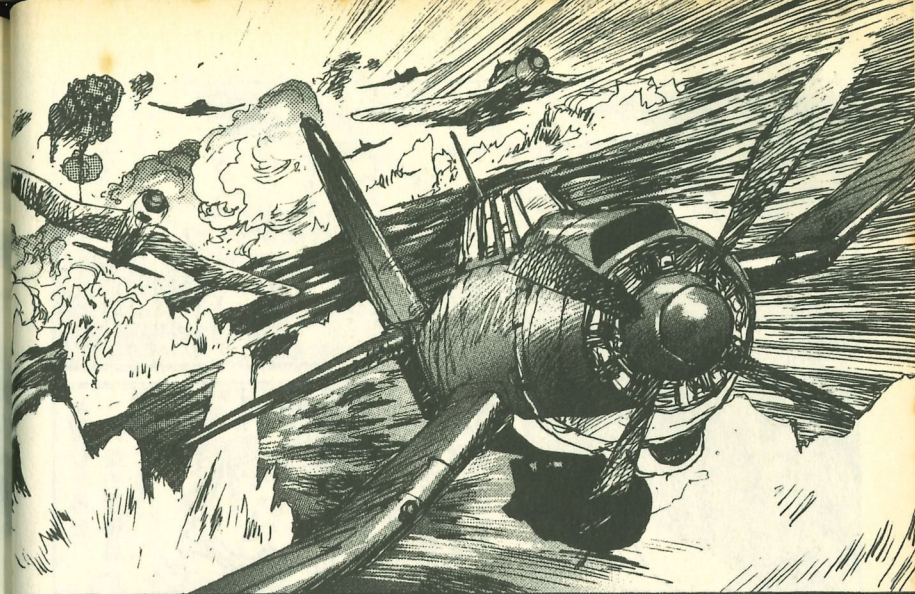
二式大艇を雷撃に転用するとは……
敵サンも思わないだろうサ

バカなこというな!!
作戦指揮官が自ら攻撃に!?

もしもの場合この後の指揮はどうする!?

元来 航空艦隊構想は……源田中佐の案だ オレのオリジナルじゃない
やり方はお前も知ってるはずだ

なァ……行かせてくれ
見たいんだよ自分の目で……

戦艦の沈むところをサ……

この弾雨のなかを突っ込んで来るとは……
なかなかファイティング・スピリットにあふれたバカどもだ!!

だがそれが——

蛮勇にすぎないことを思い知らせてやるッ!!

ガ

敵艦隊目視確認

雷撃用意!!

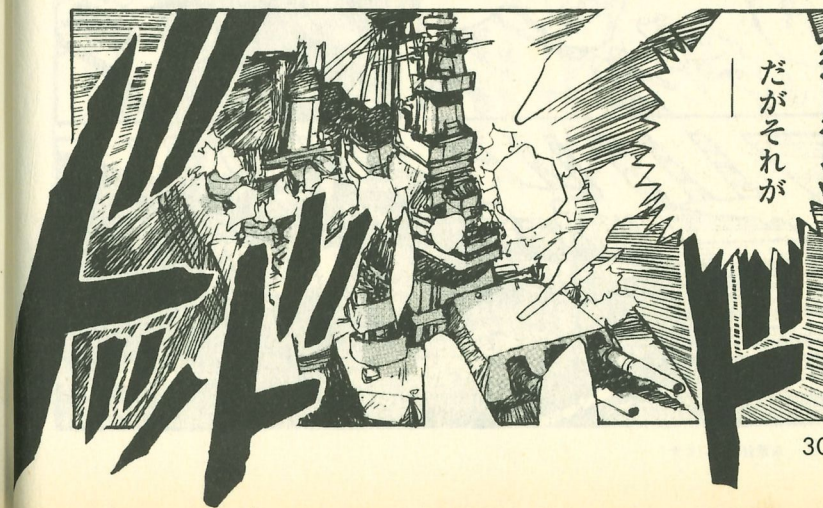
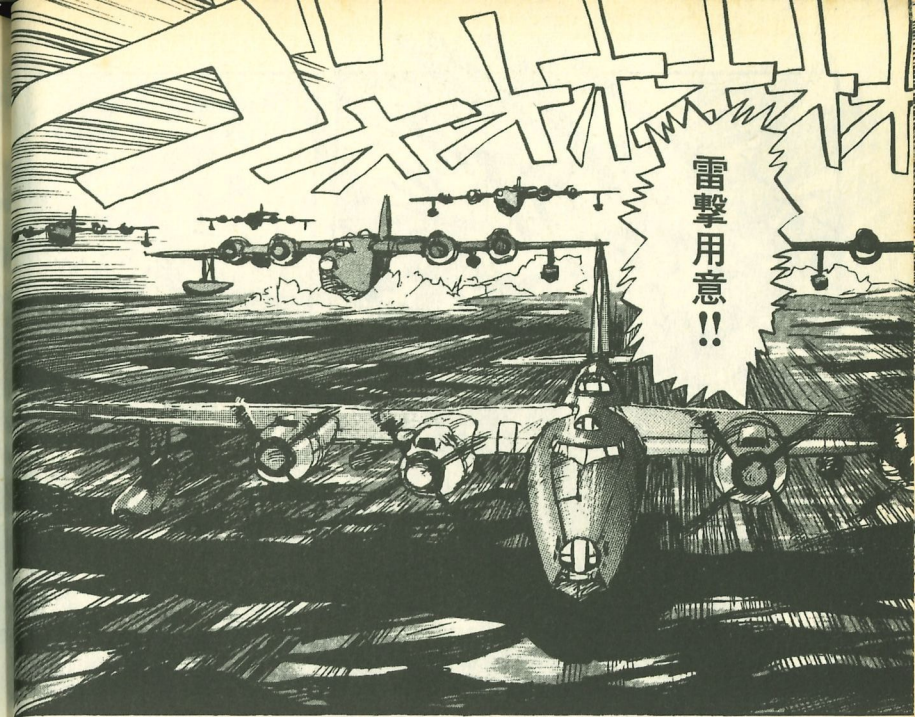
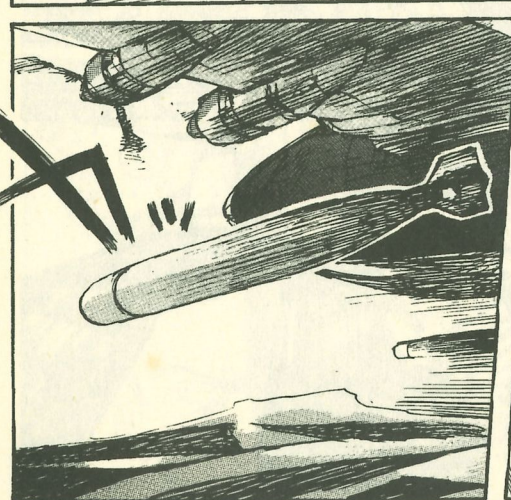
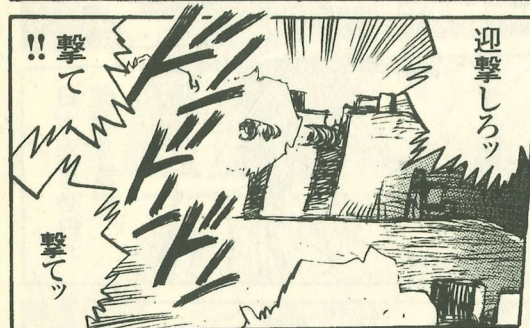
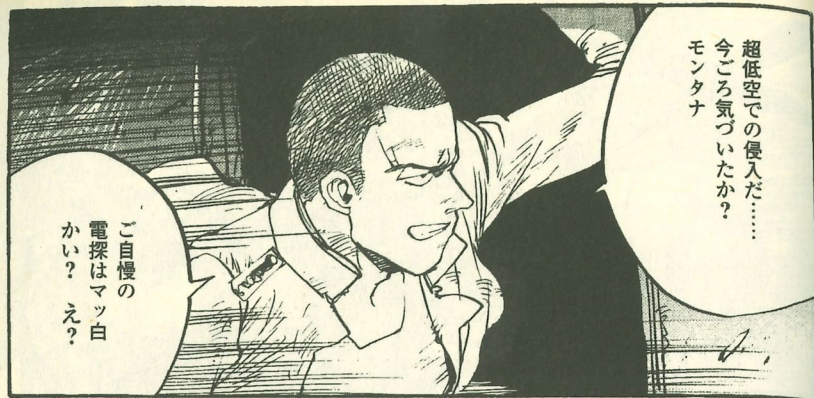
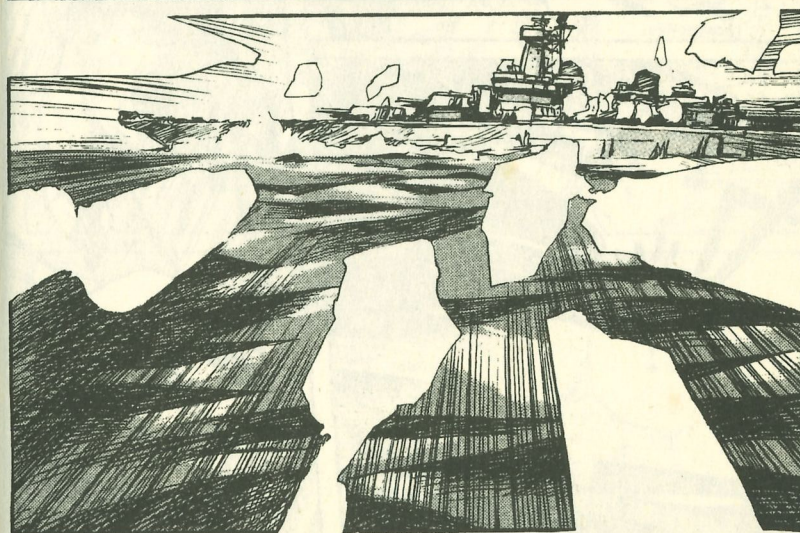
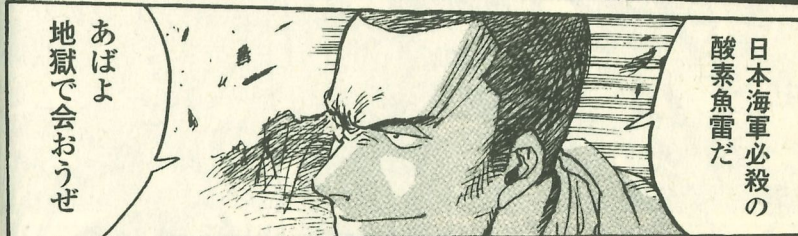
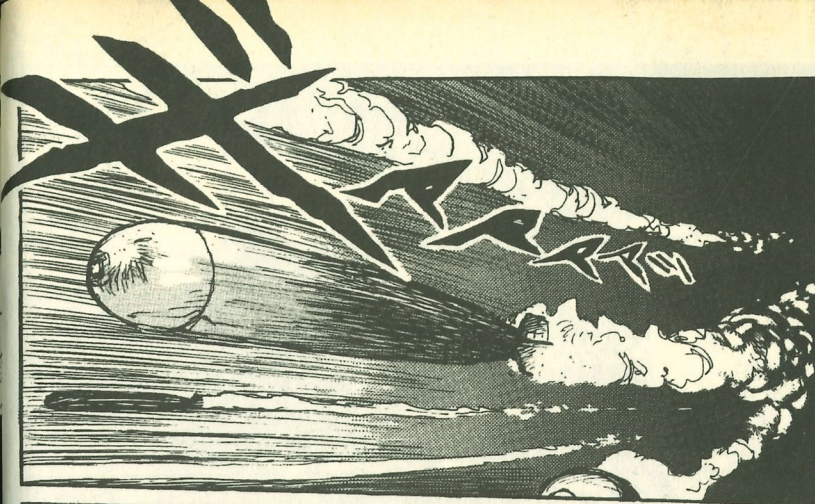
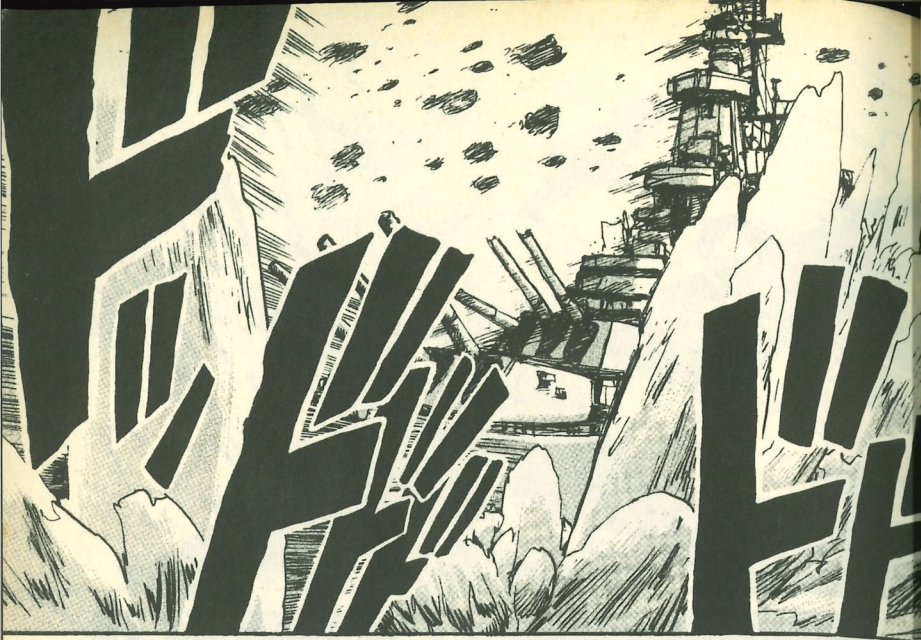
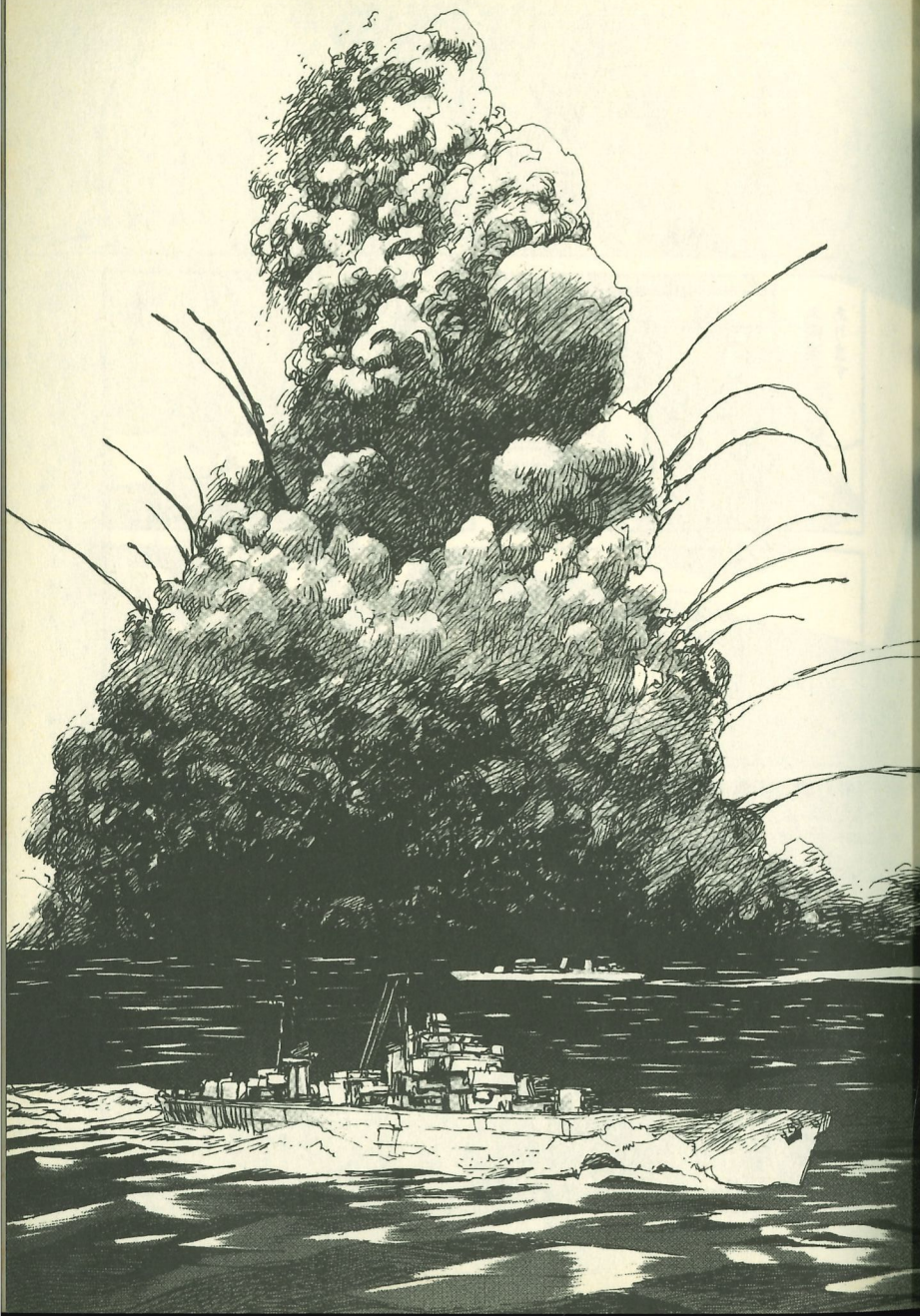
左舷!!
ひ……
飛行艇!!
多数!!

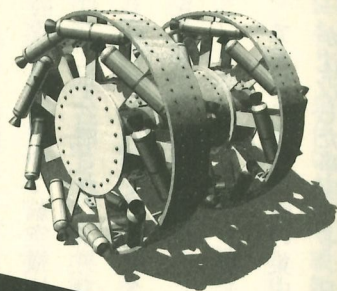
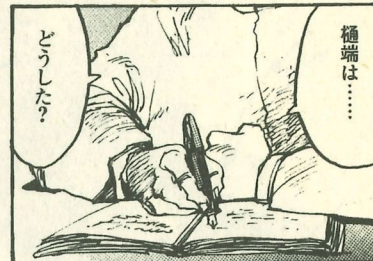
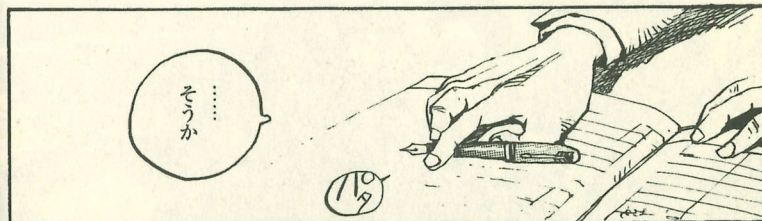
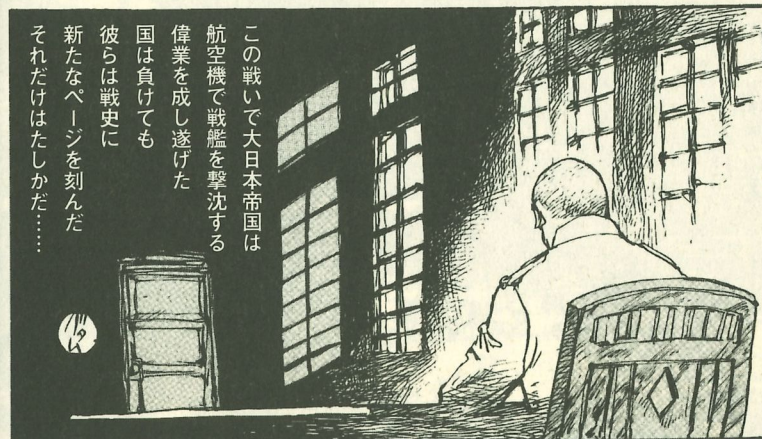
!!!

超低空での侵入だ……
今ごろ気づいたか?
モンタナ
ご自慢の
電探はマッ白
かい? え?

ガッデム!!

迎撃しろッ
撃て!!
撃てッ
ドドドド

日本海軍必殺の酸素魚雷だ
あばよ地獄で会おうぜ

やったぞ……
モンタナが……

第一章
空前の秘密兵器計画
～夢想する秘密兵器～

列強の超巨大戦艦計画

「超大和」型戦艦vs.各国巨大戦艦

リヴァイアサンの黄昏

日本海軍最大にして最後の戦艦たる「大和」が、大戦末期の沖縄特攻作戦において航空機により撃沈されたことは、近年公開された『男たちの大和／YAMATO』のおかげで、ミリタリーファンでなくともかなりの数の人が知ることになった。

坊の岬沖において、アメリカ機動部隊の集中攻撃を受けて「大和」が沈没した事実こそ、日本海軍の終焉を示すと同時に、戦前に各国が信じていた大艦巨砲主義——戦艦こそが海軍の主力であり、戦争は戦艦同士の砲撃戦の勝敗で決せられるという思想の、終焉をも示すこととなった。

なにしろ、史上最大の巨大戦艦ですら、航空機には歯が立たないことが証明されてしまったのだ。となれば、建造に手間も金もかかる戦艦などいらないという結論になるのは自明の理だ。

この原則は戦後、そしてもちろん冷戦期においても貫かれることになり、現代において戦艦は完全な絶滅種となっている。1991年の湾岸戦争に参加したアメリカの「アイオワ」級戦艦が、実戦に参加した最後の艦である。

だが、第二次世界大戦直前、世界の海軍の多くはそう考えてはいなかった。太平洋で正面切った空母戦を、幾度も展開することになった日米ですらも例外ではない。

彼らは戦艦こそが海の女王と考え、建造に邁進した。その努力は第二次世界大戦が勃発し、各国最後の戦艦が出揃ったのちも継続される。実際にはほとんどが机上プランだけに終わっているが、どの計画も大艦巨砲主義の掉尾を飾るにふさわしい巨大戦艦ばかりだった。戦艦の建造は国家規模のプロジェクトであるから、ある意味で未完成戦艦こそ超兵器のなかの超兵器といえるだろう。

ここでは、そんな各国が最後に計画した未完の巨大戦艦たちを紹介したい。

「超大和」型(日本)

完成した暁には、おそらくは世界最強であったはずの巨大戦艦、それが日本海軍の計画した「超大和」型戦艦だ。その名のとおり、これは当時でも世界最強だった「大和」をさらに凌駕する戦艦として設計されていた。

「超大和」型は、昭和17年度艦船建造補充計画、通称「㊄計画」で2隻の建造が計画された。日本海軍はこの「㊄計画」以前の計画において、「大和」「武蔵」に続く戦艦として「改大和」型2隻の建造も決定していた。

海軍はアメリカが「大和」と同じ46センチ砲

搭載艦を建造するのではないかという懸念から、さらに強力な51センチ砲搭載艦として「超大和」型の建造を計画していた。なお、㊄計画には、このほかに「改大和」型3番艦の建造も含まれていた。

「超大和」型は当初、軍令部案として51センチ主砲8～9門、速力30ノットという性能が提示された。しかし、この要求を満たすような戦艦の排水量は9万トンを上回るという試算結果が出て、建造はもとよりそれを建造する造船所を整備するにはさらに莫大な費用と歳月がかかることから、これはボツ案となった。かわりに浮上したのが艦政本部が作成した「A-150」案と呼ばれるもので、この計画では、51センチ主砲を6門という比較的少数に抑え、かわりに船体の規模を「大和」型と同程度のものとしていた。ただし、これもまた設計案のひとつでしかなく、もしも計画がこのまま続いていたならば、また別の「超大和」型の姿が検討されたかもしれない。

むろん、現実はそうはならなかった。「超大和」型2隻の建造は、1隻が呉海軍工廠で、もう1隻は新たに大分県大神（速見郡日出町）に建造予定だった大神工廠（仮称O工廠）で建造される予定だったが、太平洋戦争の開戦とミッドウェー海戦の敗北のあおりを食らって、「㊄計画」の内容が変更された結果、建造は中止された。

もしも、太平洋戦争が起こらず、日本が平穏に1950年代を迎えた場合、日本海軍は2隻の「大和」型と3隻の「改大和」型、そして2隻の「超大和」型という、重厚な戦艦戦力を揃

えていたのかもしれない。

もっとも、1940年代当時の日本海軍にもすでに、戦艦よりも空母を主力にすえようとする風潮がみられるため、これもまた未知数の部分が多い。

「モンタナ」級(アメリカ)

東の横綱が「超大和」型戦艦ならば、西の横綱はアメリカ海軍の未完成艦、「モンタナ」級戦艦である。

「モンタナ」級はアメリカ海軍が戦前、「アイオワ」級の次に建造しようとしていた戦艦であった。計画された理由はただひとつ、日本海軍の「大和」型に対抗するためだった。

太平洋戦争直前、アメリカは日本海軍が新鋭戦艦を建造中であることを察知していた。ただもちろん、「大和」は徹底的な機密保持のもとで建造されていたため、その全貌を知ることは、さすがのアメリカ海軍にもできなかった。

「モンタナ」級は排水量6万トンの船体に40センチ3連装砲塔4基、合計12門の主砲を乗せ、速力28ノットという基本スペックを持つ。これは、「大和」の影響で決定されたスペックだといわれる。アメリカ海軍は、「大和」を40センチ砲戦艦だと思っていたのだ。

一般に「モンタナ」級は、アメリカ最後の戦艦である「アイオワ」級の後継だと思われていることが多いが、実情は若干異なる。

実際に「アイオワ」級は、日本海軍の高速戦艦「金剛」型に対抗するために生み出されており、「高速（巡洋）戦艦」という性格が強い。

むしろ「モンタナ」級は、条約型戦艦として戦

前に完成した「ノースカロライナ」級、そしてその発展型として登場した「サウスダコタ」級などに連なる、純粋に敵戦艦との砲撃戦のために建造された「戦艦」の流れを汲んでいた。つまり、「モンタナ」級は正真正銘の、アメリカ最強の「戦艦」となるはずだったのだ。

「モンタナ」級の最大の特徴は、アメリカ戦艦がこれまで抱えていた「パナマ運河を通過できない艦幅の戦艦は作れない」という問題を初めて無視した戦艦であることだ。もっとも、パナマ運河拡張計画も実際には同時期に進んでいたから、これには「当時としては」というただし書きがつく。

「モンタナ」級はそのスペックを見てもわかるとおり、「大和」型、「超大和」型のライバルにふさわしい戦艦だった。火力は40センチ砲12門と強力で、さらに一発一発の破壊力も、「スーパーヘビーシェル」と呼ばれるアメリカ独自の大重量徹甲弾の使用で他国の同サイズの砲よりも強力だ。防御力も「大和」型に匹敵するほど高いといわれ、もしかすると、総合的な性能ならば、ダメージコントロール能力に優れる「モンタナ」級のほうが優越したかもしれない。

１９４０年度計画で、「モンタナ」級は5隻の建造が計画された。しかし、太平洋戦争で生まれた戦訓の影響で、１９４３年7月に建造中止となった。

なお、アメリカ海軍は「モンタナ」級を超える戦艦の研究も行なっていたが、こちらもペーパープランのみで消えている。

「ライオン」級（イギリス）

欧州の海軍大国イギリスでも、大戦中に新鋭戦艦の建造計画が進められ、「ライオン」級という名を与えられていた。

「ライオン」級は、主敵をドイツ海軍の「ビスマルク」級戦艦に定める。基本的な設計は、第二次世界大戦前後にあいついで完成した「キング・ジョージＶ世」級（以下「ＫＧＶ」級）の拡大版であり、火力も「ＫＧＶ」級の36センチ砲8門から、40センチ砲9門に強化される予定であった。

これはある意味イギリス海軍にとってのリベンジ計画だった。「ＫＧＶ」級は当初、36センチ砲10門か、もしくはそれ以上の大口径砲を積むことを予定していたのだが、ロンドン軍縮条約の結果、これは実現できずに終わる。しかし、この条約は日本が批准しなかったことから空文化し、イギリスの仮想敵のドイツ海軍も条約を無視して「ビスマルク」級を建造。イギリスにとって「ライオン」級こそ、「ＫＧＶ」級という「戦艦のようなもの（イギリス首相チャーチルの弁）」で我慢せざるをえなかったイギリス海軍が望んだ、理想の戦艦だった。

結局、第二次世界大戦の勃発により、「ライオン」級の建造は中止された。しかし、イギリス海軍は「ライオン」級の設計経験を活かし、戦後に世界最後の戦艦「ヴァンガード」を完成させた。この戦艦については51ページのコラムを参照してほしい。

「H」級（ドイツ）

「ライオン」級が「ビスマルク」級を主敵とした艦ならば、ドイツ海軍の「H」級戦艦は、

「KGV」級を主敵とした未完成艦だった。

「H」級は、ベルサイユ条約廃棄後にドイツ海軍が作った建艦計画、「Z計画」にルーツがある。「Z計画」はドイツ海軍がイギリス海軍に対抗できる兵力を揃えるために立案された計画であり、このなかでドイツ海軍は「ビスマルク」級に続き、6隻の「H」級の建造を計画する。

このうち、コードネーム「H」「J」の名を持つ2隻は、大戦直前に実際に起工され、「フリードリヒ・ディア・グロッセ」「グロス・ドイッチェラント」と名づけられる予定だった。

だが、「H」級も、大戦の勃発と同時に建造中止となり、未完成艦に名を連ねることとなる。しかし、ドイツ海軍は、この後も新鋭戦艦の設計を研究として続けており、そのなかでも最大クラスのものは「H44」級と呼ばれる、51センチ砲8門を装備した12万トンの怪物として設計された。ただし、この設計案はラフスケッチレベルのもので、大戦中のドイツ海軍にそんな戦艦を建造する余裕はまったくなかったといえよう。また、「H」級シリーズに共通する問題点として、装甲配置思想が第一次大戦レベルで、中距離以遠での砲撃戦を不得意としたであろうことがあげられる。

「ソヴィエツキー・ソユーズ」級(ソ連)

第二次世界大戦当時、欧州列強に比べて著しく劣る海軍しか持っていなかったソビエト連邦でも、新鋭戦艦の建造が進められていた。その名も「ソ連」そのものの名を関した「ソヴィエツキー・ソユーズ」級である。

「ソヴィエツキー・ソユーズ」級は、1937年に建造が開始された。その主敵は「ビスマルク」級だったといわれている。たしかに「ソヴィエツキー・ソユーズ」は、6万トン近い排水量に40センチ砲9門を搭載するという、「ビスマルク」級を相手どるには充分な攻防性能を備えた戦艦として設計されている。また、防御構造はアメリカ式を採用、前述した「ライオン」級や「H」級よりも、実際は優れた装甲配置を取り入れていた。

しかし、さすがの「ソヴィエツキー・ソユーズ」も、スターリンの粛清による熟練工の不足と、第二次世界大戦の影響には打ち勝てなかった。「ソヴィエツキー・ソユーズ」は4隻が起工されたが、いずれも独ソ戦の開始とともに建造は中止され、建造用資材はすべて陸戦に転用された。

なお、ソ連は第二次世界大戦後も大型艦建造をあきらめず、巡洋戦艦「スターリングラード」級や、「ソヴィエツキー・ソユーズ」級などの復活案を計画、一部は起工している。そのなかでも「24号」艦級とよばれる戦艦は、40センチ砲9門搭載、排水量7万9900トンと「大和」型を超える巨艦であった。

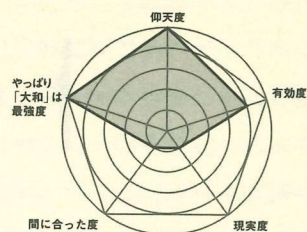
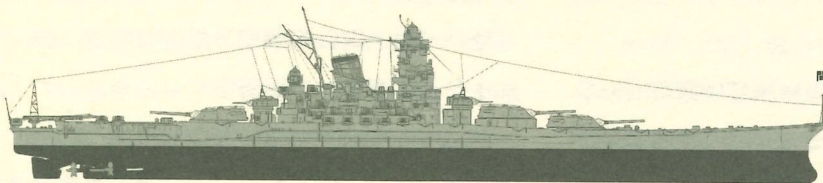
さらに同時期に研究されていた大型戦艦案は46センチ砲9門搭載、排水量12万トンの文字どおりの怪物であり、史上最後の戦艦にふさわしい未完成艦といえよう。

「超大和」型（日本）

砲撃力では世界随一の「超大和」型。船体サイズは「大和」型と同じだが、その打撃力は計り知れない。

●「超大和」型追加

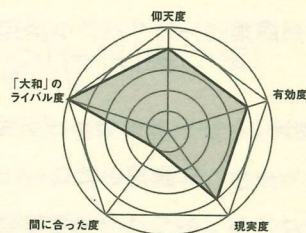
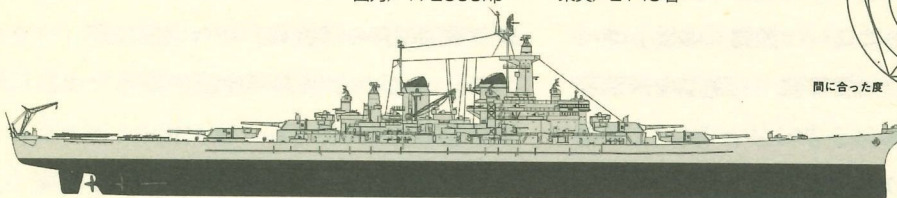
基準排水量／64000t
全長／262m
全幅／38.9m
速力／27kt
出力／15000hp
航続力／7200浬（16kt）
武装／51cm連装砲×3、10cm高角砲×12、25mm3連装機銃多数
乗員／不明

仰天度
有効度
現実度
間に合った度
やっぱり「大和」は最強度

「モンタナ」級（アメリカ）

「大和」の真のライバルといえるのは、この「モンタナ」級戦艦であろう。攻走守のバランスが卓越している。

●「モンタナ」級要目

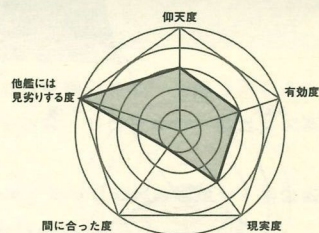
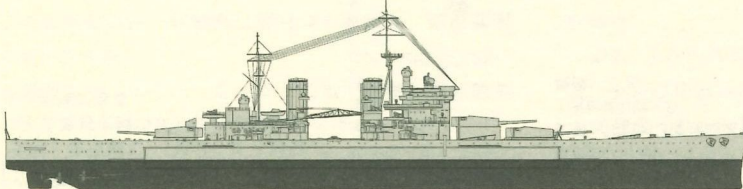
基準排水量／60500t
全長／281.94m
全幅／36.88m
速力／28kt
出力／172000hp
航続力／14000浬（15kt）
武装／40cm3連装砲×4、12.7cm高角砲×10、40mm4連装機銃×10
乗員／2149名

仰天度
有効度
現実度
間に合った度
「大和」のライバル度

「ライオン」級（イギリス）

イギリス海軍にとって「ライオン」級の保有は悲願ともいえたが、ついにかなうことはなかった。

●「ライオン」級要目

基準排水量／40550t
全長／239.26m
全幅／31.7m
速力／30kt
出力／130000hp
航続力／不明
武装／40cm3連装砲×3、13.3cm連装砲×8、40mm8連装ポムポム砲×6
乗員／1680名

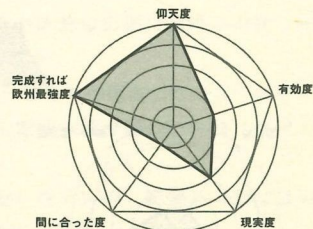
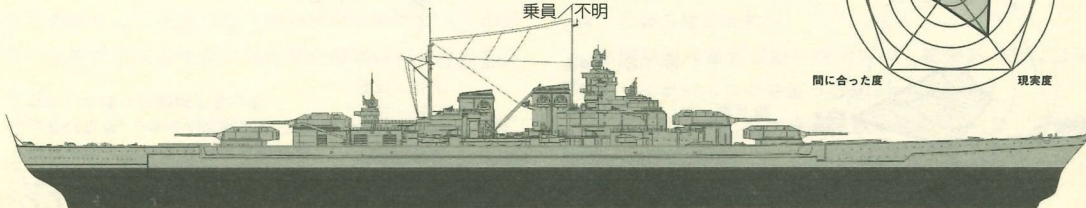
仰天度
有効度
現実度
間に合った度
他艦には見劣りする度

「H44」級（ドイツ）

ドイツも巨大戦艦建造を企図した。とりわけ「H44」は世界に比しても巨大であった。

●「H44」級要目

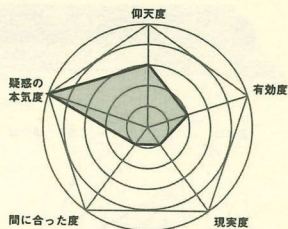
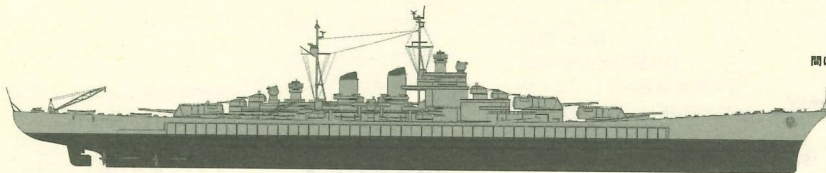
基準排水量／122047t
全長／345m
全幅／51.5m
速力／30.1kt
出力／280000hp
航続力／20000浬（19kt）
武装／51cm連装砲×4、15cm連装砲×6、10cm連装高角砲×8、37mm機銃連装×8、53cm魚雷発射管×6
乗員／不明

仰天度
有効度
現実度
間に合った度
完成すれば欧州最強度

イラスト＝神奈備祐哉

「ソヴィエツキー・ソユーズ」級(ソ連)

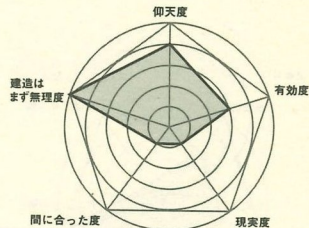
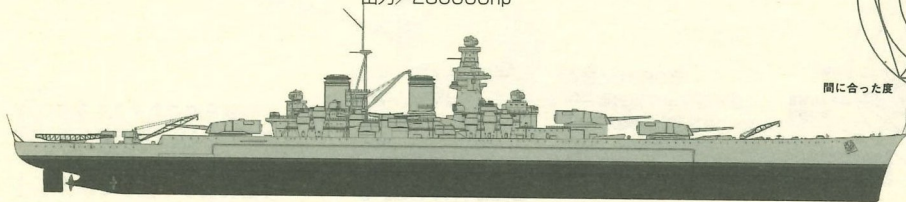
ソ連の戦艦はそれなりの基本設計を持っていたが、「きちんと完成するかどうか」のほうが問題であった。

●「ソヴィエツキー・ソユーズ」級要目

基準排水量／59150t
全長／261m
全幅／38.9m
速力／29kt
出力／201000hp
航続力／5580浬（14kt）
武装／40cm3連装砲×3、15cm連装砲×6、10cm高角砲×8、37mm4連装機銃×4
乗員／1292名

「24号艦」級(ソ連)

「大和」を圧倒し、「H44」にも対抗できる要目を持つが、これも完成すればの話である。

●「24号艦」級要目

基準排水量／79900t
全長／282m
全幅／40.4m
速力／30kt
出力／280000hp
航続力／不明
武装／40cm3連装砲×3、13cm両用砲×6
乗員／不名

最後の英国戦艦「ヴァンガード」

横山信義

第二次世界大戦において、戦艦は海軍の主力の座から滑り落ちた。

にもかかわらず、大戦後に竣工した戦艦が、英仏両国に1隻ずつある。

仏国戦艦は「ジャン・バール」だが、本稿では英国戦艦「ヴァンガード」について紹介してみたい。

英国では大戦前、40センチ主砲9門を搭載する「ライオン」級戦艦の建造を計画していたが、大戦の勃発によって中止となり、かわりに「ドイツのビスマルク級戦艦に対抗可能で、かつ短期間・低コストでの建造が可能な戦艦」の建造がスタートした。

短期間で完成させるため、主機関は「ライオン」級のものが使用され、主砲には「ロイアル・サブリン」級戦艦等で使用実績がある38センチ砲を改良したものが用いられた。

英国では、1944年末までの完成を予定していたが、戦時とあって建造が遅れ、竣工は、大戦が終わって8カ月が経過した1946年4月であった。

基準排水量4万4500トン、最高速力30ノットと、英海軍の戦艦中最大かつ最速であり、主砲は38センチ砲連装4基8門と、ドイツの「ビスマルク」級に充分対抗できる。

だが、「ヴァンガード」がその性能を発揮すべき好敵手は、すでに存在しなかった。

米国の「アイオワ」級戦艦は、大戦終了後も、朝鮮戦争、ベトナム戦争、湾岸戦争で、巨砲の威力を発揮したが、「ヴァンガード」にそのような機会はなく、練習艦や英国王室の御召艦という平時の任務に従事した末、1960年に売却、解体される。

その最期に、「大和」のような悲劇性はない。100年にわたる英国戦艦史の棹尾を飾る艦としては、なんともあっけない終わり方だ。

英国海軍の最新鋭艦であっても、用途がなければお払い箱にされるという冷厳な現実がそこにある。

「ヴァンガード」の地味な最期もまた、「大和」の悲劇的な最期と同じように、戦艦の時代の終焉を象徴しているのかもしれない。

もし、H44級戦艦が実戦投入されていたなら!?

文・横山信義
イラスト・松田大秀

ドイツの海軍は、必ずしも恵まれた海軍ではない。ヒトラーの海軍嫌いもことさらにいわれるが、やはりその最大の原因は、日本のような大海軍が、その立地において不要だったことにある。そのうえで、ドイツの誇る巨艦、H44級が完成していたら、活躍の場はあったろうか。完成時期から考えても、戦局に重大な影響を与えられる局面は少なくなっているかもしれない。だが、それでも、なかなかに魅力的な状況を設定できるのではないか。

「撃て!」

戦艦「フリードリッヒ・デア・グロッセ」(以下、「FDG」と略す)の戦闘艦橋に、艦長の命令が響いた。

前甲板と後甲板にめくるめく閃光が走り、甲板上に降り積もった雪が瞬時に吹き飛び、主砲8門の一斉射撃に伴う衝撃が全艦を刺し貫いた。

口径50・8センチ。盟邦日本が建造した戦艦「大和」のそれを上回る主砲から、音速の2倍の初

速で叩き出された重量2トンの巨弾8発が、乗船の順番を待つ避難民や、ソ連軍の進撃を食い止めるべく戦っている第16軍の頭上を、雷鳴のような轟音を引きずりながら飛び越えた。

3発は外れ弾となったが、5発がソ連軍戦車部隊のただなかに落下した。

弾着の瞬間、天に届かんばかりの巨大な火柱がそそり立ち、そこにあった10両以上のT34中戦車やスターリン重戦車、数十名の歩兵が、瞬時に消し飛んだ。直撃を受けずとも、至近距離から爆風を浴びて横転する戦車や、衝撃波に叩きのめされて血反吐を吐く歩兵が続出した。

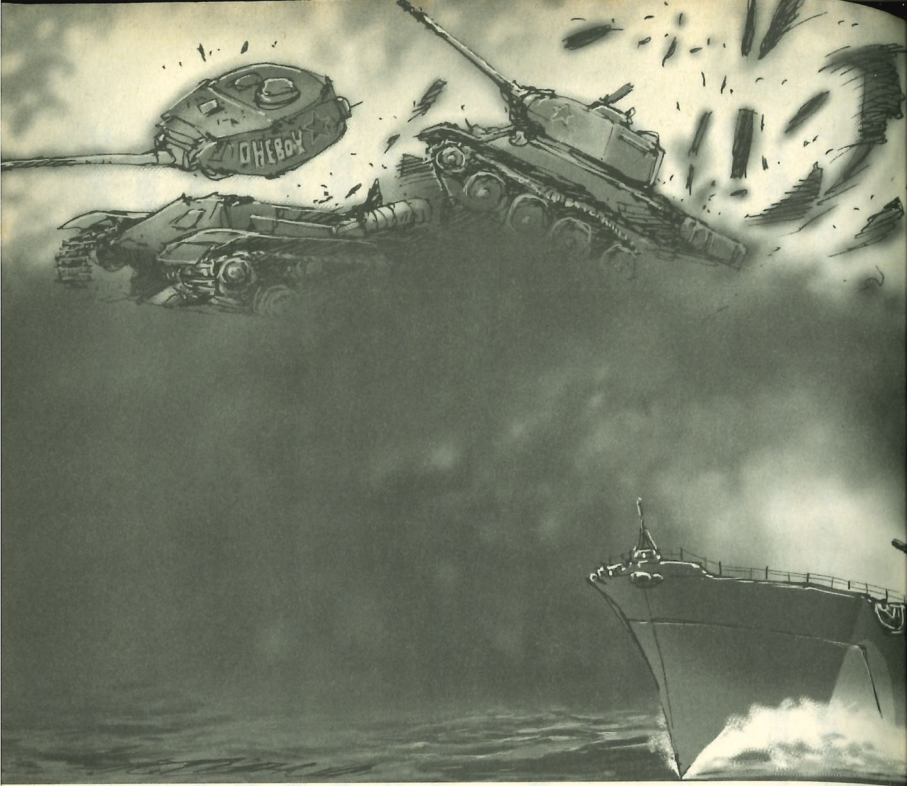
「FDG」は、砲撃を反復する。

避弾経始に優れた傾斜装甲を持つT34も、パンターの75ミリ砲弾を弾き返せるほど分厚い装甲鈑を持つスターリンも、SUシリーズの対戦車自走砲も、はるかな遠方から撃ちこまれる巨弾の前には無力だ。弾着のたび、戦車や自走砲が10両単位で吹き飛び、歩兵が粉微塵の肉片と化してゆく。

ソ連軍が後退しても、「FDG」は砲撃を止めない。敵味方の間に、鉄と火薬の楔を撃ち込み続けている。

その間、避難民は、次々と輸送船に乗り込んでゆく。

「FDG」も砲撃終了後は、避難民の輸送船に早変わりだ。居住区のみならず、艦内の通路や砲弾を撃ち尽くして空になった弾火薬庫、はては吹きさらしの甲板にまで、避難民が乗せられる。

「こんな任務に使われるとはな」

苦笑しつつ、艦長は呟いた。

遅すぎた巨艦誕生

「ＦＤＧ」は、Ｈ級の建造仮称を冠せられ、40・６センチ主砲８門を装備した、常備排水量６万９００トンの戦艦として竣工するはずだった。

ところが、ドイツ海軍情報部は、盟邦日本が建造中の46センチ砲戦艦に関する情報を掴み、総統ヒトラーに注進した。

日本にライバル心を燃やしたヒトラーは、「Ｈ級は、日本の新鋭戦艦を凌駕する超戦艦として完成させよ」と厳命した。

その結果、Ｈ級は、50・８センチ主砲連装４基８門を装備する、満載排水量14万１５００トンの巨大戦艦として再設計された。

戦時という状況下ながら、キールの工廠技術者は奮闘し、この巨艦を１９４５年１月に竣工させた。

だが、戦局を考えれば、「ＦＤＧ」の誕生は手遅れだったと認めるほかはない。東からはソ連軍が首都ベルリンに迫り、西では米英を中心とした連合軍がライン川を渡ろうとしている状況下では、「ＦＤＧ」の存在は、何ほどの意味も持たない。

ドイツ海軍総司令官カール・デーニッツ提督が、完成して間もない「ＦＤＧ」に与えた任務は、東部ドイツにお

ける友軍と民間人の救助。
ソ連軍の猛攻を受け、敵地に取り残されようとしている友軍の将兵や、戦火に追われる避難民を、バルト海の海上輸送ルートを使い、ひとりでも多く西部ドイツに脱出させることだったのだ。
世界最大最強の戦艦には、いささかふさわしからざる任務といえる。
だが艦長も、乗組員も、誇りを持ってこの任務に邁進した。
民間人を守ることこそが、陸海空を問わず、軍人の果たすべき使命だと、彼らは信じていたからだ。
だが連合軍も、黙って「ＦＤＧ」の動きを眺めていたわけではなかった。
１９４５年4月7日、キール軍港に、空襲警報の不吉なサイレンが鳴り響いた。
錨を上げ、外海に向かって動き出したばかりの「ＦＤＧ」に、「対空戦闘！」が下令された。「ＦＤＧ」とともに、東部ドイツに向かおうとしていたポケット戦艦「リュッツォウ」や重巡洋艦「プリンツ・オイゲン」の艦上にも同じ命令が響き、10・5センチ連装高角砲や20ミリ四連装高射機関砲が射撃準備を整えた。
やがてアブロ・ランカスター——帝都ベルリンをはじめとする幾多の都市に夜間爆撃を加えたイギリス空軍の四発重爆撃機が、上空に姿を現わした。
各艦が、対空戦闘を開始する。「ＦＤＧ」の艦上に10・5センチ連装高角砲の発射炎が閃き、「リュッツォウ」や「プリンツ・オイゲン」も、負けじとばかりに撃ち始める。

だが対空砲火は、敵機を阻止するにはほど遠かった。
ランカスターの下腹から切り離された黒い巨大な塊が、「ＦＤＧ」の周囲の海面に、摩天楼ほどもある巨大な水柱を次々と噴き上げた。
大型爆弾「トール・ボーイ」——昨年11月、ノルウェーのフィヨルドに身を隠していた戦艦「ティルピッツ」を葬り去った重量5・5トンの爆弾が、「ＦＤＧ」にも襲いかかってきたのだ。
「行かせてくれ！　国民を……民間人を……友軍を……救わなければならんのだ！」
「ＦＤＧ」の艦長は血を吐く思いで、空に向かって叫んだが、すべては空しい試みでしかなかった。
「ＦＤＧ」を直撃したトール・ボーイは12発。至近弾となったもの20発。「大和」の倍の重量を持つ巨艦もこの打撃には耐え切れず、軍港内に着底、そのままの状態で終戦を迎えた。
艦体は前のめりに沈み込んだが、50・8センチ主砲はなお天を睨み、東部ドイツに待つ同胞の救出を最後まで諦めないと訴えているかのような、壮烈な姿を見せつけていた。
この日は奇しくも、ヒトラーに「ＦＤＧ」の建造を決意させた日本海軍の戦艦「大和」が東シナ海に沈んだ日でもあった。
後年、ある戦史研究家が記している。
「東西の巨艦2隻が同じ日に沈んだのは、単なる偶然だったのだろうか。この日を戦艦の時代の終焉として、永遠に記録させるべく、運命的な力が働いたのではないだろうか」——と。

ナチス・ドイツ円盤機

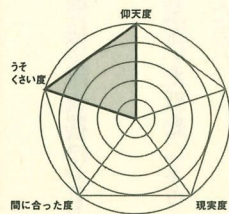
「フリューゲラート」「ハウニブ」

ナチス・ドイツが戦前から航空戦力の有効性を認め、大戦中に数々の名機を実戦へ投入したのは周知のとおりである。

それらのなかでも「円盤機」は、戦前からジェットやロケット兵器の開発と並行して進められていた形跡がある。

実用化された？ 円盤機

とくにAS6円盤翼機は、実機が連合軍に接収されているのだが、これは単に翼が円盤型で

●「ハウニブⅡ」
推定要目
直径：26m
全高：11m
武装：戦車砲塔
乗員：20名

●「フリューゲラート」
Ⅲ型推定要目
直径／24m
重量／40t
武装／不明
乗員／不明

イラストは「ハウニブⅡ」想像図だが、このような脚を装備していたか否か、明確な資料は公表されていない。

変わった形をした飛行機、という程度の代物にすぎない。

しかし、複数計画され、玉石混合の円盤機のなかでも異彩を放つのが「フリューゲラート」と称する全翼回転式円盤型機だろう。

この機体は小型のⅠ型から大型のⅢ型まで、各種バリエーションを含めると7種が確認されている。動力としてはすでに初期の実用に至っていたジェットエンジンのう

ち、ＢＭＷ００３Ａターボジェットの推力を大幅に上げた改良型を採用していたという。そして機体の大きさにあわせ、エンジン1～2基を機体下部へ搭載し、強力なジェット排気を上方に取りつけられた回転翼に向けて噴射、翼を回転させ揚力および推進力を得て、飛行する機構であったようだ。

　この機体はオートジャイロ機の拡大版という見方もできるが、推定速力は音速に匹敵し、余裕のある機体容積と機体全体が揚力を生むため、離床推力も大きいと推測される。そのため、厚い装甲を施した状態でも、大型爆弾や火砲を搭載することが可能だろう。

　またＶＴＯＬ機であるため、補給修理さえできれば必ずしも滑走路を必要としないというメリットもあった。

はたして実在したのか

　そして究極の円盤機として「ハウニブ」が存在する。これは「Ｖ7計画」で開発された機体で、「トゥーレ・モーター」と呼ばれる重力・慣性制御と超高効率エネルギー変換の複合動力機関を装備していたとされている。しかも、動力源には化石燃料や核燃料などとはまったく異なる物質を用いているらしく、この機関の実用に至る正確な理論は、現在も公には解明されておらず、「ハウニブ」の信憑性に大きな疑問を投げかける要因となっている。

　また、重装甲・大火力の機体でありながら、音速を超えての飛行が可能だったといわれているが、これも真偽のほどは判然としない。

　「ハウニブ」にも多くの試作機やバリエーションが存在し、ヴリル、ヴリル・アイン、ハウニブⅠ、ハウニブⅡ、ハウニブⅢ、ポルシェ・ハウニブ、ヤクト・ハウニブ、ヴリルオーディンと呼ばれる各種機体が製造され（たという説もある）、共通武装として戦車の砲塔を円盤下部へ逆さに1基～4基装備していたという。

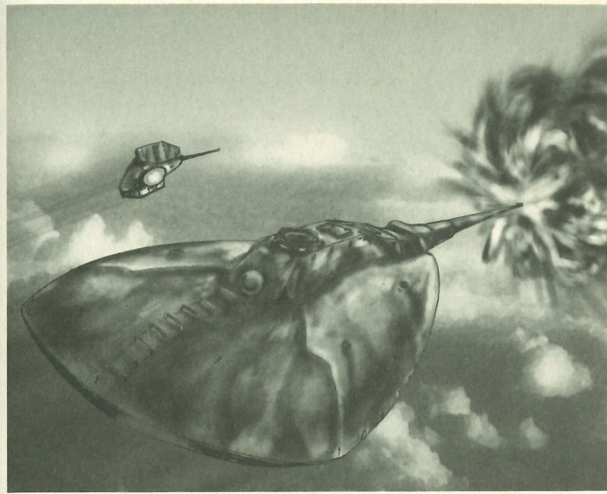
　そして、１９４４年末から連合軍であいついだ「フー・ファイター」遭遇事件が、このハウニブの目撃例である可能性は高い。

解かれぬ謎

　ドイツがこれらの超技術をどのように開発したのかは、終戦期と戦後の米ソによる機密略奪の混乱のおかげで、今も謎のままである。おそらくは、今後も謎が解明されることはないのだろう。

ドイツ円盤機の、悪夢のごとき編隊飛行。左上がハウニブⅡ、その下がハウニブⅠ、右がハウニブⅢ。

イラスト＝長谷川正治

しかしいかなる超技術兵器といえども、少数が完成した程度では、押し寄せる連合軍を前には結局、潰（つい）え去るしかない運命だったのだろう。

「ハウニブ」バリエーションに共通した特徴として、戦車の砲塔の装備があげられる。イラストはヤクト・ハウニブの想像図。

円盤機をめぐる黒い霧

霜方光造

ナチスが円盤機開発にこだわった理由は不明だが、いくつかの推測が可能である。

代表的な説が、爆撃機を過信したヒトラーが、大量の爆弾搭載が可能な面に着目し開発推進を指示した説。ゲーリング国家元帥が、ロケット兵器の管轄を陸軍に奪われたため、より高性能の円盤機を開発して空軍の発言力を取り戻そうとした説。

あるいは当時、最先端のロケット兵器開発機関の指揮官だったドルンベルガー少将が、それまでの航空機概念を超える機体を開発し、陸海空の新兵器開発をも一手に収めようとした説。

はたまた、ヒムラー親衛隊長官がゲーリングの権力を削ぐことができるうえ、自分自身の政治権力強化が可能な円盤機開発を支配し、さらに武装親衛隊に空軍戦力を加えようとした説。等々……。

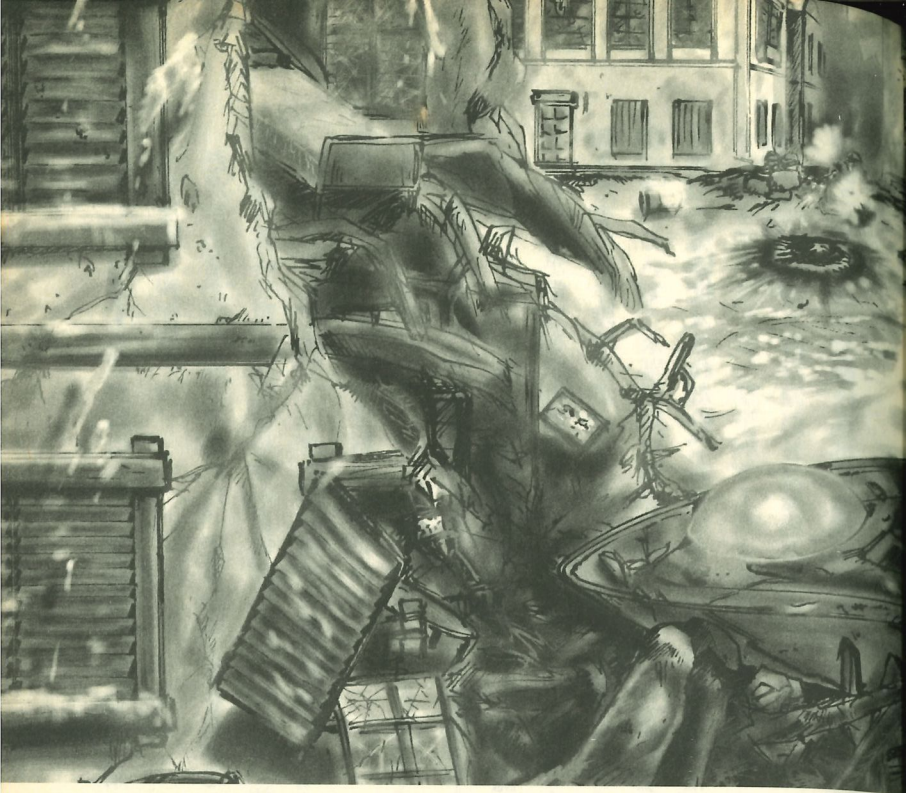
結局、軍事面よりも政治が絡んで開発は進んだが、権力闘争がなければ円盤機はもっと早く、効果的な形で戦場に登場したかもしれない。

もし、円盤機を実戦投入していたなら!?

文・吉田親司
イラスト・霜方光造

世界の秘密兵器計画のなかでも、いかがわしさと謎の多さでは群を抜くドイツ円盤機。実用化などとうてい考えられない。いや、存在そのものも疑わしいのだ。だが、妄想せざるをえない。彼らが出現した場合の連合軍兵士の恐慌たるや想像するだけで痛快ではないか。たとえば時期を第二次世界大戦最大の激戦、ドイツでは「ラインの守り」、連合軍は「バルジの戦い」と称した戦い、場所はその舞台ベルギーの要衝・バストーニュとしてみよう——。

クリスマスまでに終わると噂された戦争は、まず絶対にクリスマスまでには終わらない。このジンクスは１９４４年でも生きていた。晩秋。ヨーロッパの空には異変が起こっていた。突如として恐るべき新鋭機がドイツにデビューしたのだ。Ｍｅ２６２？　コメート？　いや、違う。そうしたチャチな代物では断じてない。もっと恐ろしいなにかが片鱗を示し始めたのだった。

音速を楽々と超え、物理学者を発狂させるような鋭角ターンを見せる正体不明の飛行物体が解答だ。連合軍パイロットはそれらを「火焔の球（ファイヤー・ボール）」もしくは「幽霊戦闘機（フー・ファイター）」と呼び、恐怖の対象として

いたのである。軍上層部は完璧な箝口令を敷いていたが、やがてそれが白日のもとに曝される時がやってきた。場所はベルギーの要衝バストーニュ。日付は１９４４年12月25日。クリスマスが到来しても戦争は終わる気配を見せなかった。

この年は、ＵＦＯの冬だった……。

未確認飛行物体現わる

夜明け前。星々が朝焼けに殺害されていくなか、そいつは姿を見せた。

まずは不気味なノイズから始まった。空から聞こえた音声信号を無理やり文字に置き換えればこうなるだろう。

《……プーティウィッ……プーティウィッ……》

間髪を入れずカラフルな飛行物体がアメリカ第１０１空挺師団第３２６連隊の上空に出現した。明らかに人工の飛行物体だ。色は七色。輪郭はぼやけて見える。

底面にはパンター戦車のそれを流用したと思われる砲塔がついており、乱射に近い勢いで陣地に榴弾を叩き込んできた。どうやって装填しているかはさっぱり不明だ。きっと全自動システムが完備されているのだろう。

戦闘経験の少ない兵士がパニックに襲われた。上空に出現した悪魔のクリスマスツリーに恐れおののき、持ち場

を放棄して後退する者が続出した。降伏勧告に対し「阿呆（ナッツ）！」の一言で返した師団長代理マコーリフ准将を恨む声が響いた。

だがひとりだけ冷静な者がいた。従軍牧師補佐を務めるカート・ピルグリム伍長である。神の信徒を志す彼は、現われた怪兵器の正体をこう断じていた。使徒を模倣する不埒（ふらち）者であると。

彼は兵士が投げ捨てていった携帯ロケット発射機M1「バズーカ」を構え、天に制止したままの敵機へ向かい、その鏃（やじり）を発射したのだった——。

この機体こそ「ハウニブI」であった。ナチスが開発したマンメイドUFOだ。

全長26・3メートル。最高時速6000キロ。飛行可能時間55時間。エンジン、素材、飛行原理——すべてが常識を超えた未知のマシンだった。

まだまだ試作段階であったが、行き詰まりをみせたルントシュテット攻勢、俗にいう「バルジの戦い」において、米軍が防衛拠点としたバストーニュを攻め落とすべく、ハウニブIは最後の切り札として実戦投入されたのである——。

驚くべき真相

60ミリのロケット弾は見事にハウニブIの側面に命中。円盤はそのまま重力との戦いに敗れ、仰向けに墜落した。だがまだ砲塔は旋回しようとしている！

その時だ。第4機甲師団R戦闘団所属のM18駆逐戦車「ヘルキャット」が戦線へ到着するや、76ミリ砲を撃ち放った。徹甲弾が7発も食い込み、ようやく相手は沈黙したのである。

機体の底には大穴が開いていた。そこから必死に這い出る影をピルグリム伍長は目撃し、そして絶句した。人間とは思えなかった。髪のない巨大な頭。瞳孔のない暗黒の目玉。肩幅は狭く、手は細くそして長く、全般的に子供のような姿をしている。まるで外宇宙からの訪問者だ……。

いや、違う。彼は人間だった。ドイツ人だった。そして子供であった。

巨大なヘルメットをかぶり、丸い遮光器をかけ、膝をついて歩いてくるのは、年端もいかぬ少年であった。おそらくはヒトラーユーゲントの一員であろう。

すぐ力尽きて斃（たお）れた少年に対し、ピルグリム伍長は十字を切り、神の加護を祈ったのである——。

回収されたハウニブIはアメリカ本土へ輸送され、ライトパターソン基地にて調査研究されたという話もあるが、真相は明らかにされてはいない。

そういうものだ（ソー・イット・ゴーズ）。

世界最大の重戦車

超重戦車「マウス」

現在にいたるも、世界最大の超重戦車マウス。現代の各国のＭＢＴが重量40～50トンクラスだから、１８８トンというその巨大さ、途方もなさがよくわかる。なお、完成したドイツ戦闘車両でマウスに次ぐのは重量75トンのヤークトティーガーで、マウスはさらにその倍以上だ。

ヒトラーからの直接の指示で、フェルディナント・ポルシェ博士がマウスの設計をはじめたのが、１９４２年3月。その後コンペティションでポルシェ社案が採用されると、名称も、ポルシェ社内部での愛称であった「マウス」が正式につけられた。

秘めたる実力は

これほどの大型戦車の武装だけに、当初は１５０ミリ砲に加えて副砲として１０５ミリ砲を装備するものとされた。ロングレンジの大口径砲だけでなく、防御用として発射速度の優れた中口径砲の搭載が求められたのだろう。結局、この計画はさらに現実的に修正され、主砲が１２８ミリ砲、副砲が75ミリ砲とされた。副砲からして当時の主力戦車の主砲なみで、マウスは砲塔だけでも55トンと、重戦車ティーガーIと同等、最大装甲厚は２４０ミリである。

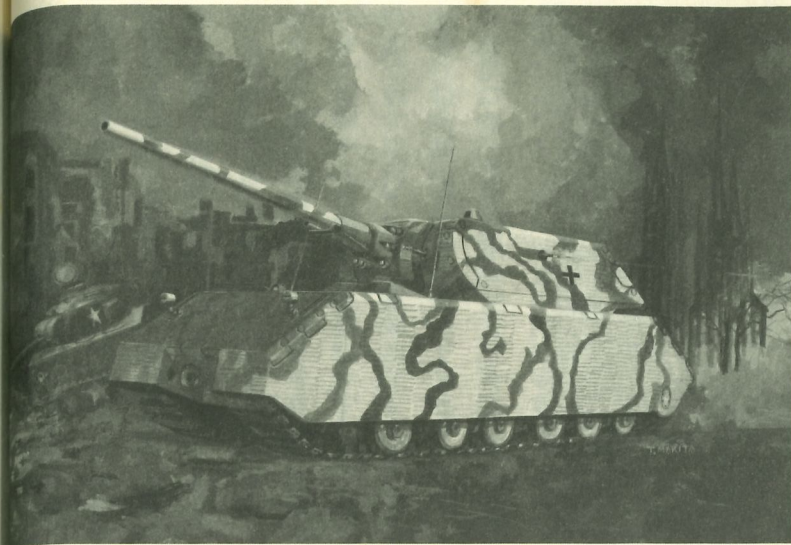
機関には、航空機用のＭＢ６０３Ａを改造したダイムラー・ベンツ社のＭＢ５０９エンジン１０８０hpを搭載。このエンジンで発電機を回し、2基の電気モーターで車体を動かすハイブリッド方式が採用されていた。これだけの重量と大馬力エンジンに耐えられる変速機がなく、また開発が困難であったためだ。

これは、フェルディナント（のちにエレファントと改名）駆逐戦車の主機関として、ポルシェ博士が生涯を通じて研究を続けたハイブリッド機関への執念が実ったものともいえる。

こうして開発が続けられてきたマウスだが、１９４３年11月、その完成をみる前に突如生産がキャンセルされてしまう。ドイツ軍は東部戦線で守勢いっぽうであり、将来生産される少数の超重戦車よりも、1両でも多いパンターやティーガーの生産が求められたためだ。

けっきょくマウスは、１９４３年12月、試作車両として2両が完成。その後の走行試験では、見かけによらない高い機動性などを見せて、軍需相シュペーアを驚かせたともいう。なんとマウスは超信地旋回も可能だったのだ。

●超重戦車「マウス」要目
全長：10.09m
全幅：3.67m
全高：3.68m
重量：188t
最高速度：20km/h（整地）、13km/h（不整地）
装甲：２４０mm（砲塔前面）、200mm（車体前面）
武装：12.8cm戦車砲
乗員：6名

仰天度
有効度
現実度
間に合った度
完成すれば強い度

マウスの最期

その後、ドイツ第三帝国が最期を迎え、押し寄せるソ連戦車師団に対し、クンメルスドルフ試験場に残されたマウスは、ほかの戦車と急造の戦闘団を編成して戦った、とも伝えられる。

しかしこれは、これほどの超戦車がもし戦っていれば、との期待がこめられたフィクションではないだろうか。戦闘の経緯、戦果などは遺されていない。現実には、ドイツ兵の手で爆破された、というのが本当だろう。

破壊されたマウスはソ連が持ち去り、1、2号車の部品が組み合わされて現在、ソ連国内のクビンカ戦車博物館に収蔵されている。

イラスト＝牧田哲朗

ポルシェ博士のハイブリッドへの異常な愛情

鈴木ドイツ

今日、高級スポーツカーメーカーの代名詞ともいえるポルシェ社。その始祖、フェルディナント・ポルシェ博士（1875-1951）は、もともと電気技師として電気自動車の開発に携わっていた。

まだまだ内燃機関の有効性が確立されていない時代で、電気モーターは自動車の駆動方式として有力な選択肢のひとつだったのだ。

当時の電気自動車のバッテリーは重く、容量が少ないために航続距離が短く、充電には長時間を要する。そこで、ポルシェ博士は、エンジンを動かして発電機を回し、その電力でモーターを駆動するという、ハイブリッド方式を考案。これを実用化して、ハイブリッド電気自動車（ミクステ自動車）を製作した。

その後ポルシェ博士はダイムラー社を経て独立。1934年、ヒトラーに招かれ、国民自動車を作るという計画に大抜擢される。KdF（Kraft durch Freude＝「喜びを通じて力を」の頭文字を取った略称であり、同名の国民運動組織を指す。「歓喜力行団」と訳される）-Wagenと名づけられたこのクルマは、戦後、フォルクスワーゲンビートルとして世界的セールスを記録することになる。

戦争が勃発すると、ポルシェ博士は戦車の設計に没頭することになる。しかも戦車の設計においても、得意のハイブリッドシステムを採用した。

最初に開発したVK3001（P）と呼ばれる30トンクラスの試作車は、試験段階では良好な機動性を示した。次に45トンクラスのVK4501（P）を造り、ティーガーIのコンペティションに参加する。だが結果は不採用だった。しかしヒトラーの好感触をつかんだポルシェ博士はVK4501（P）の車体を早々に90両も生産してしまっていた。しかたがないので余ったVK4501（P）の車体を使い、重駆逐戦車フェルディナントが作られる。フェルディナントは重装甲重武装こそ有効だったものの、過大な重量、過酷なロシアの戦場で不具合を頻発させることとなった。この車両はのちに、前方機銃や車長用キューポラの設置、履帯の変更などの改造を経てエレファントと改名される。

その後、マウスにまでハイブリッド方式を採用したポルシェ博士。生涯こだわり続けたハイブリッド方式は、現在、自動車（トヨタプリウスなど）で完成され、世界中を走っている。

もし、超重戦車「マウス」がベルリン攻防戦に投入されていたなら!?

文・鈴木ドイツ

ベルリン陥落戦は、ヒトラーユーゲント、国民突撃隊など、通常では非戦闘員とみなされるべき人々を戦闘員として駆り出した総力戦であった。ヒトラーが待ち望んだシュタイナー軍集団を含め、もはや、首都を守るべき軍はほとんど存在せず、数々の悲劇を生んだ。戦争末期には交戦記録もあるといわれるマウスだが、もしここに投入されていたなら、なにか別のドラマが生まれていたのではないか? せめて空想してみようではないか。

下腹を揺さぶるような準備砲撃の音が止んだ。ハント・ブルナー少尉はペリスコープに眼窩を押し当てた。それまでがうそのような無音の世界。土煙が治まってきた視界には、無残に半壊した国会議事堂が見える。

ツォッセンでの戦闘のあと、搭乗していたエレファントを失ったハントがベルリンで受け取ったのがこのマウスだった。

「なんでこんなヤツがここにいやがるんだ……」

マウスを見たハントの最初の感想だった。エレファントも巨大だったがマウスは倍以上だ。

「来るぞ! 警戒を怠るな!」

砲塔内には彼を含めて4人。ハント以外は全員が年端もいかない少年兵だ。2人もいる装填手は15歳。ペリスコープをせわしなく動かした。こうなるとさっきまで響いていたスターリンのオルガンの、腸がちぎれるような音が懐かしい。

ハントがシュプレー川のほうへペリスコープを向けたときだった。

「くそっ、こっちだ! 砲塔6時、いそげ!」

自ら砲塔旋回ペダルを踏み込む。エンジン音が高まり、砲塔駆動モーターが55トンの砲塔を回す。その遅さをハントが歯噛みして待ち、ようやく砲塔が車体後部を向いた。廃墟となったビルの間に、JS-2が2輌。

「距離約８００!」

すでに徹甲弾が装填されている。

「撃て!」

砲手が発射レバーを引き、瞬間、砲塔内が轟音と振動に満たされた。50口径１２８ミリ砲の砲尾が拳を突き出すように後座し、黒煙とともに薬嚢を吐き出す。砲弾は敵戦車の砲塔正面右に命中した。

「しまった!」

砲耳に近い正面はＪＳ-２のもっとも装甲の厚い部分だ。砲の中心側か、車体前面中央のバイザーを狙わなくては。
だがハントの焦燥は杞憂だった。１２８ミリ砲弾はやすやすとＪＳ-２の装甲を破り、砲塔内へ飛び込んで破裂した。砲塔が爆発とともに飛び上がり、多くの破片を撒き散らす。
（そうだ。これは88ですらない。１２８だ。これなら……！）
「続けて徹甲弾！　後ろのヤツだ！」
装填手が巨大な砲弾を挿入する。１２８ミリ砲は分離装薬式だ。さらにもうひとりが薬嚢を押し込む。鎖栓器を閉じる。
「フォイア！」
再び轟音と振動。こんどは砲身の間近、防盾付近に命中した。貫通。爆発！
が、ここでハントは車体をかすめる砲弾の音を聞いた。
「正面だ。砲塔零時！　旋回！」
最初予定していた正面の通りからT-34の群れがやってきたのだ。ハントはまたも遅すぎる砲塔の動きにじっと耐えなくてはならない。が、動きの遅いぶんは、その頑強な装甲が守ってくれた。
一発、おそらくは５００メートル以下からの至近弾が砲塔側面に命中するも、被害なし。
「４輌、いや、５……６輌以上いる。ハインリーチ、左からやれ！」

「ヤー！　ヘルコマンダール！」
照準鏡に片目を押し付けた19歳の砲手が返答する。発射。命中。排莢。再び装填。発射。
「命中だ。次！」
が、その間にも1発、2発と防盾、正面装甲に被弾した。分離装薬式の主砲は装填に時間がかかる。
「ハインリーチ！　副砲でやれ。横腹を見せているヤツだ」
「ヤー！」
同軸の75ミリ副砲を発射。主砲にくらべショックは少ない。が、５００メートル以下ならT-34の側面も貫通できる。
またたくまに6輌のT-34を撃破されて、ソ連軍は一時的に後退した。ハントは前進を命じる。
ハッチから身を出し、双眼鏡で周囲を確認した。
朽ちかけたブランデンブルク門の向こう、ウンター・デン・リンデン大通りを横切ろうとするT-34の大群を見つけた。
「続けて射撃！　主砲のみだ！　こいつなら３０００でも食えるぞ！」
砲塔内に潜り込み、ハッチを閉める。発砲。次々と10輌をほふったところでT-34が後退した。
「ん、おかしいな……ちっ！」
ペリスコープを回して、ハントは舌打ちした。

「3時方向！　モンスターだ！」
そこにはJSU－152が2輌いた。巨大な152ミリ砲を持ったアニマルハンター。しかも、近い！　200メートル、あるか。
またも遅すぎる砲塔がもどかしい。
（まだ、まだか……！）
敵重自走砲が先に撃った。これまでにない衝撃が車体に走る。ハントは略帽をかぶった頭を思い切り壁面にブチ当てた。やられたか。いや、まだ生きている。
砲手が発砲した。主砲弾がJSU－152に突き刺さる。が、背後のが来る。そっちはじつはJSU－122だった。
「装填、急げ！」
間に合わない。無意識に目を閉じようとする衝動とハントが戦っている最中、JSUの装甲版に、ふらふらと飛んできたなにかが当たった。
閃光。そして爆発音。パンツァーファウストだ。まだ味方の歩兵がいるのか。
「ライマース、後退できるか⁉」
車内電話に怒鳴った。このマウスはでかい図体のわりに、なかはエンジンや発電機がびっしりだ。車体の前部にいる操縦手や無線手の席は隔絶されていて往き来もできない。

「どうした、ライマース！　返事をしろ！　ヘンケル！」
幼い装填手が不安げに見上げてくる。ハントはハッチを開けて車体前部を見た。ちょうど運転手席のある部分の側面が被弾して貫通していた。2人はおそらく、大口径弾で粉々になったのだ。
「くそ！」
もうこの戦車は動かない。が、エンジンはまだ生きている。主砲も副砲も。
「全員、降りろ！」
「しかし、戦車長殿は」
ハントのいわんとするところを感じ取った少年兵が問う。
「かまわん。おまえたちは脱出しろ。どこへでも行け。おまえたちの義務は終わった。任務から開放する」
ハントはいうが、誰ひとり動かない。彼らの気持ちはわかっている。が、それを認めるわけにはいかない。ハントは狭い車内で拳銃を抜いた。
「出ろ！　早く！　まだ歩いてなら脱出できる。おまえたち子供がいたら、足手まといだ。邪魔だ！」
拳銃を向けて再び怒鳴る。3人の少年たちはハッチを開けて外へ出て行った。
「これでいい……」

戦車を捨てても、生き残れる確率が高くなるわけではない。むしろ犬のようにソ連兵に撃ち倒されるかもしれない。が、それでもハントは彼らをこのマウスで道連れにするわけにはいかなかった。
「ここからは俺の戦争だ。どう死のうと勝手な、俺の戦争をやらせてもらう」
「そいつに、乗せてもらおうか」
砲手席に移ったハントが驚いて振り返ると、ハッチから覗き込んでいる男がいる。初めて見る顔。汚れた髭が白いのは埃や泥のせいだけではあるまい。
「誰だ。入るのを許したおぼえはないぞ」
「ご挨拶だな。さっき助けてやった恩を忘れたか」
「じゃあ、あんたが……」
ＪＳＵを葬ったのはこの男らしい。根っからの歩兵下士官の顔つきだ。
「ああ。エルンスト曹長だ。部下はひとりもいないがね。国民突撃隊とやらを率いていたんだが、さっき全員を開放した」
髭面の男が笑った。そしてマウスの巨大な主砲の砲尾を指差す。
「弾込めするヤツくらい、要るんだろ。つきあうぜ」
「ふっ。出て行けっていっても、無駄なんだろうな」
そうしてハントは、エルンストに装填の仕方を手短に教えることになる。

「残弾は」
「主砲は20発ほどだ。あとひと戦闘、もつかどうか」
ハントがいうと、エルンストは砲弾をなでた。
「いいね。俺はずっと外で戦ってた。最後にこんな上等の棺桶に乗れるとは思わなかったよ」
「国家が作った最高で最低の、棺桶さ」
そこまでいってハントは、前方から進んでくるＪＳ−２の車列を発見した。
「やるぞ。装填」
落ち着いている。もう焦りはない。
（撃ちつくして……そのあとは……）
不思議と静かだった。もうほかの場所の戦闘は終わってしまったのか。残っているのは彼らと彼らのマウスだけなのか。
「あんた、名前は」
エルンストがいった。
「ハント・ブルナーだ。曹長、パンツァーフォー！（戦闘開始！）」
ときに１９４５年４月30日の午後……。

大地を震わす陸の王者

幻の世界の超重戦車

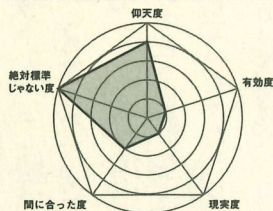
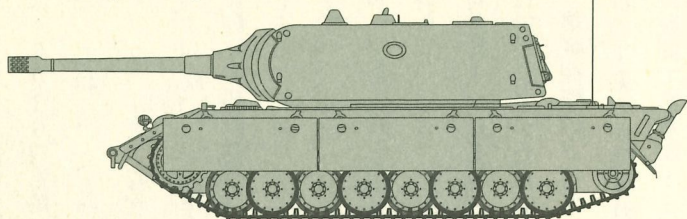
幻の超重戦車とは!?

読んで字のごとく、重戦車をも超越した戦車、それが超重戦車だ。そしてもうひとつ、本稿で取りあげる超重戦車の定義に加えたいことがある。それは「幻の存在」であることだ。つまり、「実戦に参加していない」ことでもある。そうなった理由はさまざまだが、それが開発途上で終戦となったせいであれ、実用に耐えないとして放棄されたのであれ、ともかく存在が幻で、一度も戦ったことがなく、なおかつ重戦車をも圧倒する装甲と火力をもった戦車――それを幻の超重戦車と呼ぶことにしたい。

標準型? E100

戦車といえばドイツ。ドイツといえば戦車。そのドイツが産み損なった超重戦車がマウスとE100だ。Eシリーズの開発は1943年に開始されており、E100はこのシリーズ中の重戦車の個称である。ちなみに、Eシリーズの

E100

E100は、ラーテなどに比べれば実用化の可能性が残されていた。しかし、パンターなりティーガーなり、「まともな」戦車を作ったほうがはるかにメリットが大きかったといえよう。

●「E100」要目
全長：10.27m
全幅：4.48m
重量：140t
装甲：240㎜（前面）
武装：15㎝砲×1、7.5㎝砲×1、7.92㎜機銃×1

Eとはドイツ語で「標準型」を意味する。

しかし、1944年に超重戦車の計画が破棄されたため、E100の開発もまた中止されてしまった。だが、アドラー社の技師3名によってその後も細々と開発は継続され、のちに進攻してきた米軍によってその試作車が接収されることとなった。

スペック的にはその名称が示すように100トンを超える自重を持ち（推定戦闘重量140トン）、最大装甲厚は240ミリ、主砲は最終的に150ミリ砲に落ちついた（マウスと同じ128ミリや170ミリという案もあった）。また、副砲として75ミリ砲を主砲と並列に搭載している。砲塔そのものはマウスと同型のものが使用され、共通化が図られている。

なお、わざわざ主砲なみの副砲が搭載されて

ティーガーと比べると、その巨体が実感できるラーテ。しかし作ったところで、残念ながら戦局に寄与することはまずなかったにちがいない。

●「ラーテ」要目
全長：35m
全幅：11m
重量：1000t
装甲：600㎜（上部）、300㎜（側面）
武装：28㎝砲×2

仰天度
有効度
現実度
間に合った度
大は小を兼ねる度

いるのは、搭載弾数の問題が大きいと思われる。計画では１５０ミリ砲搭載時の搭載弾数は20発程度となっており、これではいかにも少ない。このため、シャーマンなどの中戦車に対しては副砲を使用することを想定していたのだろう。ちなみに副砲の搭載弾数は２００発程度だった。

またＥシリーズはすべてエンジンを後部に搭載する予定で、完成していればこの車体重量にもかかわらず最大時速40キロの走行が可能であったという。

実現可能性という意味では、Ｅ１００はかなり完成に近づいていた車両といえるだろう。もっとも、終戦間際のドイツにこの戦車を量産させるだけの工業力が残されていたかどうかは、はなはだ疑問であるが……。

また、相当のガソリン食いであることも間違いのないところで、そちらの面からも運用に困る代物になっていた可能性は高い。そう考えると、ヒトラーの「開発中止」命令はきわめて理性的な判断だった。

移動要塞「ラーテ」

さて、ドイツといえばもうひとつ、「ラーテ」の存在も忘れてはならないだろう。これはもう、戦車というよりは地上戦艦もしくは移動要塞とでも呼ぶべきもので、こんなものを本気で考えていたというだけでも恐ろしく（楽しく）なってしまう。もちろん実用化されたわけではなく、あくまでも計画があったにすぎないが、予想重量１０００トン、主砲には戦艦の28センチ砲を流用するというトンデモ兵器であった。

もっとも仮に作られたとしても、その重量の

イラスト＝浅田隆

おかげでまず動くことなど不可能だっただろう。また、仮に動けたとしても履帯損傷の時などいったいどうするつもりだったのか、など疑問は尽きない。さらにいえば、これだけの重量では機動性などなきに等しく、航空攻撃に対してはほとんど無力であったと思われる。似たような兵器に列車砲があるが、これらにはいざという時はトンネルのなかに逃げるという手段があった。あれこれ考えると、やはりラーテは「妄想」兵器の域を出ないようだ。

そのほかの超重戦車

もちろん、超重戦車はドイツだけの専売特許ではない。そのほか、各国の超重戦車についても簡単に触れておこう。

まず、アメリカが開発したのがT28で、これはノルマンディ上陸作戦をはじめ、堅固な要塞線を突破する目的で開発が進められたものだ。そのため、主砲には105ミリ砲を搭載し、正面装甲厚は300ミリに達している。しかし、試作車両の完成が第二次世界大戦後の1945年12月であり、もはや無用の長物と化した同車は1947年に開発が中止された。

同じく連合軍の重戦車として開発されたのがイギリス軍のトータス重戦車で、こちらは対戦車戦闘を主目的に開発されている。じつはT28もトータスも全周旋回砲塔をもたないために、厳密にいえば「戦車」ではなく、突撃砲や戦車駆逐車と呼称するほうがより正確である。

それはさておき、このトータスであるが、こちらはT28よりワンランク下まわったような設計で、主砲は32ポンド（94ミリ）砲、正面装甲厚は225ミリとなっている。しかし、これでも性能的には充分で、キングタイガーと正面から撃ち合ってもまったく負けていない。

最後に、我が日本の誇る100トン戦車について書いておこう。これは主砲に100ミリ砲、副砲に47ミリ砲、最大装甲厚は200ミリというバケモノのような戦車で、しかも開発に着手したのは1940年頃というから驚く。もっとも、開発は早々に打ち切られてはいるが……。

ともあれ、競争の果てに各国はモンスタータンクの開発に手を染めたわけだが、結局モノになった車両は少ない。「質より量」を求められた消耗戦において、それは必然かもしれない。

それでも、超重戦車に萌えてしまうのは、きっと僕たちが男の子だからなのだろう！

ソ連に重戦車なし？

堀場亙

戦車王国であるソ連には意外にも「超重戦車」と呼べるような戦車は存在しない。あえて当てはめるとすれば多砲塔戦車のT35やKV2あたりだろうか。しかし、どちらの戦車も実戦参加しているうえに、そこそこは使える兵器だったようだ。少なくとも使い方さえ間違えなければ、敵に対して充分以上の威圧と損害を与えることができた。

WWⅡ初期においては、これらの戦車は明らかにオーバースペックのバケモノ戦車――超重戦車以外のなにものでもなかった。が、実際に運用してみると、メリットよりもデメリットのほうが多いことがわかってきた。たとえば多砲塔戦車などは一見すると「強そう」ではあるのだが、戦場において多くの砲塔をばらばらに運用することなどまず不可能で、そのうえ口径の違う砲弾をそれぞれ搭載しなければならないという無駄もある。

結局、ソ連軍は早々に「超重戦車」の無駄に気がついて、その開発に見切りをつけた。ある意味で、それが戦車王国として君臨しえたゆえんなのかもしれない。

ドイツ・ビックリドッキリ奇想砲

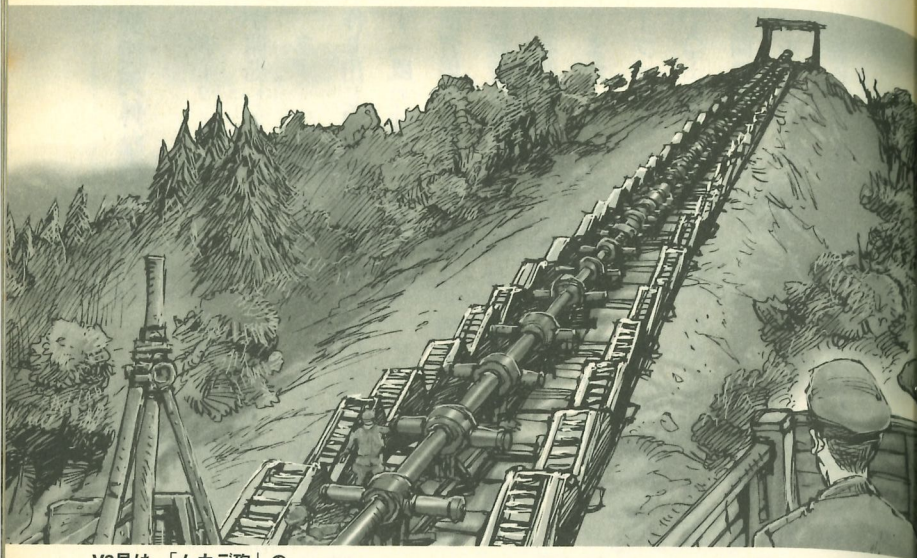
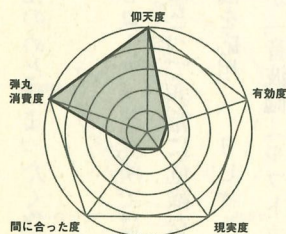
「ムカデ砲」「風力砲」「渦巻き砲」「音波砲」

その名はムカデ砲

ナチスドイツの秘密兵器といえばとにかくV兵器（フェルゲルトゥンクス・ヴァッフェン：報復兵器）が有名だが、ドラマや映画にも度々登場するV1号や2号の陰に隠れて、すっかり忘れ去られたV兵器もあった。それが、通称「ムカデ砲」と呼ばれたV3号で、もっとも影が薄くかつもっとも資源を浪費し、さらにもっとも効果のなかったV兵器だった。このV3号は砲身側面に複数の装薬燃焼室を持つ多薬室砲で、あたかも魚の骨かムカデのような格好をしていた。中央の主砲身へ枝状に接続されたパイプはすべて薬室で、それぞれ発射火薬が装填されていた。専門的な解説は割愛するが、砲弾が発射されると両側の発射薬が次々に発火し、砲弾を徐々に加速していく仕組みだった。

少し考えただけでもすぐにわかることとして、砲弾が薬室を通過した直後に発火しないと、まったく加速しないどころか砲身が破裂する危

V3号は、「ムカデ砲」のほかか「やすで」、「高圧ポンプ」など愛称が多い。

険性もあり、発火タイミングの制御はきわめて困難だった。しかし、既存の技術の応用で射程300キロに達する火砲が手に入るのは魅力的で、北フランスからロンドンを砲撃することを目標として開発が進められた。だが、2万発もの砲弾を無駄にしてもなお実用にはほど遠く、最終的には連合軍の空爆で実験基地を破壊されたり、占領されたりしたため、なんら戦果をあげることはできなかった。

●V3号「ムカデ砲」要目
全長：150m
口径：150㎜
初速：1463m/sec
射程：88500m

奇想天外な砲たち

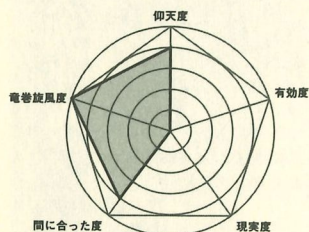
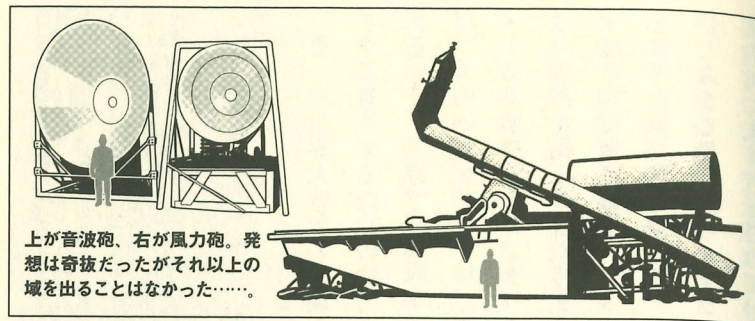
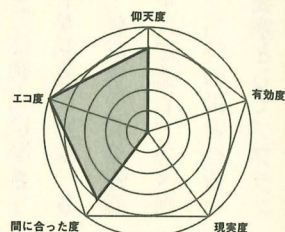
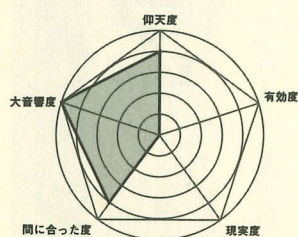
ドイツは、そのほかにも奇妙な兵器をいくつか開発していた。

まず、酸素と水素を混合して高圧の空気流を作り出し、空気の塊を飛行機に当てて撃ち落とす「風力砲」が開発された。ヒラースレーベン演習場で実験が行なわれ、約180メートル先に設置された、厚さ2センチ半の木板を破壊できることが証明された。

また、オーストリアアルプスの山中にあるローファ研究所では、これと別個に圧搾空気で「人工竜巻」を発生させ、敵機を撃墜する兵器も開発されていた。この兵器は「渦巻き砲（ヴィルベルゲシュッツ）」と呼ばれ、途中から石炭粉を巻き上げて爆発させる方式に変わったものの、実用化のめどはまったく立たないまま敗戦を迎えた。

また、同じローファ研究所では、高波長域の音波が生物にとって非常に危険な効果をもたらすという理論を応用し、リヒャルト・ヴァラーチェク博士が「音波砲（ルフトカノーネ）」を開発していた。これは、メタンと酸素の混合物を爆発させ、その音を巨大なラッパ状の放射器より放射し、強度の衝撃波を浴びせて敵を殺傷するというふれこみだった。だが、敵を殺害するには50メートルまで接近して、40秒間も音を浴びせ続けなければならず、一時的に行動不能とするためだけでも、200メートルにまで接近しなければならなかった。

これらの兵器は、どれも通常ならば開発に着手するどころか、書類選考の段階で却下されるような代物であった。しかし、親方日の丸ならぬ、親方ヒトラーの社会主義的な政治体制下では、今日でいうと、無駄な公共事業の見本としか思えないような兵器開発も、堂々とまかりとおっていたのである。ナチスの正式名称は国家社会主義ドイツ労働者党であるが、社会主義の名前は伊達ではなかったといえよう。

上が音波砲、右が風力砲。発想は奇抜だったがそれ以上の域を出ることはなかった……。

●「渦巻き砲」要目
威力／数百mの範囲にわたり渦巻きの発生に成功
そのほか不明

●「風力砲」要目
筒の長さ／約15m
威力／200m先の2.5㎝の角材を破壊
そのほか不明

●「音波砲」要目
反射鏡直径／3.2m
威力／50m先の兵士に40秒発射し続けると死亡。200mではしばらく活動が不能
そのほか不明

大威力長射程の巨大列車砲

巨大列車砲「ドーラ」

第一次世界大戦での経験から、フランスはドイツに対抗するための強力な要塞防御ラインである「マジノ線」の建設を急ピッチで進めていた。この「マジノ線」は、主要防御点に厚さ３メートル半以上のコンクリートを流し込み、多数の重砲を据えつけたうえ、発電室や武器弾薬庫はすべて地下数十メートルに建造し、各区画を装甲鉄扉で区分するなど、当時の最新技術を惜しみなく投じたハイテク要塞として、フランス内外に広く宣伝されていた。

必要とされた強力無比な巨砲

そのため、ドイツではマジノ線突破兵器の開発が熱心に進められることとなる。大手兵器メーカーのクルップ社においても、社内で独自に研究プロジェクトが立ち上がる。それは、いかなる重防御拠点でも一撃で粉砕する、人類史上最大かつ最強の巨砲であった。

第一次世界大戦時、クルップ社は大ベルタ砲と呼ばれた42センチ榴弾砲をドイツ軍へ供給し、要塞攻略に大きな威力を発揮していた。その戦訓から同社は、さらに威力を増した巨砲を開発して、強力なマジノ線に対抗しようと考えたのだ。

当初は口径１００センチ、85センチ、80センチ、78センチの4案が検討されたものの、承認が下りたのは80センチ案のみだった。この80センチ砲は、砲重量だけでも４００トンあり、戦闘重量にいたっては１３５０トンに達していた。そのため、鉄道線路に乗せる方式を採用したが、それでも重量を支えきれず、レールを4本敷設して複線状態とすることで、ようやく運用が可能となったほどである。

史上例を見ない巨砲だけに、さすがのクルップも開発には手間取り、試作砲が完成したのは１９４１年のことである。すでにフランスは降伏していたが、ソビエトのセバストポリ要塞攻略戦において、地下30メートルにある弾薬庫を一撃で粉砕するなど、その能力を遺憾なく発揮している。

●巨大列車砲「ドーラ」要目
重量：1350t
砲口径：80cm
全長：28.95m
俯仰角：0〜60
初速：榴弾820m/秒、徹甲弾700m/秒
弾量：榴弾4800kg、徹甲弾7100kg

実戦投入はわずかだが、すさまじい破壊力を発揮したドーラ。「ドイツの秘密兵器」の、数少ない成功例といえるだろう。写真は第1号のグスタフ。（Photo/PD）

絵＝吉原幹也

要塞攻略用大口径臼砲
巨大自走臼砲「カール」

口径60センチという類を見ない巨大臼砲カールの設計と生産はラインメタル・ボルジク社へ発注され、当時の陸軍兵器局砲兵課長であったカール・ベッカー砲兵大将の名にちなんで、試作砲はカールと呼ばれている。正式名称はGerat040/041（兵器040あるいは041）という味も素っ気もない代物だったため、いつしか「カール」が兵器全体の愛称となっていった。

ただ、既存の巨大火砲はいずれも輸送時には分解しなければならず、移動状態から砲撃可能状態となるまで、あるいは反対に砲撃状態から移動可能状態となるまでに、十数時間から数日を必要としていた。

これは列車砲についても同様で、大半の列車砲は移動用の線路から分岐した引込み線を敷設し、さらに車体をジャッキなどで固定、射撃していたため、移動状態から砲撃状態への転換には、やはり十数時間から数日を必要としていた。

●巨大自走臼砲「カール」要目
重量：124t
砲口径：600㎜、540㎜
全長：11,37m
全幅：3,16m
全高：4.78m
速度：10㎞/h

仰天度
有効度
現実度
間に合った度
そこそこの活躍度

カールは6両作られ、それぞれ「アダム」「エヴァ」「ロキ」「ツィウ」「トール」「オーディン」の名が与えられた。

巨大自走臼砲の完成

そのため、カールはキャタピラ式の自走砲台に搭載することとなり、1939年に完成した試作砲は、車台の完成を待って1940年に試験を行なっている。威力は絶大だが射程が短すぎるとの指摘を受け、翌41年には、射程を延ばした54センチ砲も装備可能となった（砲身が交換可能）。

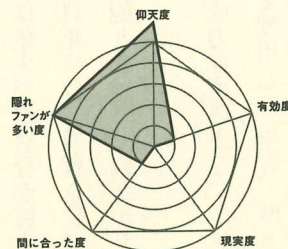
カールの60センチ砲の威力はすさまじく、対コンクリート用徹甲弾を使用した場合、厚さ2・5メートルのコンクリート、あるいは40センチの鋼板を撃ち抜いたという。

カールは全部で6両完成し、セバストポリ要塞攻略戦やワルシャワ市街戦において、その威力を存分に発揮している。

上陸用回転殺戮兵器
「パンジャンドラム」

1943年、来るべき連合軍の欧州反攻作戦に備えてイギリスでは、多種多様な特殊兵器の開発実験が行なわれていた。欧州反攻には、まずフランス北部海岸への上陸作戦が必要となるが、ドイツは上陸作戦に備えて、沿岸に強固な防衛陣地を構築していた。多数の砲、機銃を備えた分厚いコンクリート製のトーチカや防壁は、「大西洋の壁（Atlantic Wall）」と呼ばれ、上陸に際しては通過困難な障害として立ち塞がることが予想された。

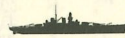
●パンジャンドラム要目
直径：3m
車輪幅：30㎝
推進ロケット：18～70基
最大時速：160㎞/h
爆薬搭載量：1.83ｔ

仰天度
有効度
現実度
間に合った度
隠れファンが多い度

このフランス海岸の段丘上に築かれた「大西洋の壁」の、高さ3メートル、厚さ2メートルのコンクリート防壁をいかに破壊するか、という課題に、海軍兵器局諸兵器開発部（DMWD）のネビル・S・ノーウェイは、約1トンの爆薬を衝突させれば破壊可能である、と見積もった。それを可能とする特殊兵器として開発に着手したのが、「パンジャンドラム」である。

パンジャンドラムは、直径1・8メートルの車軸部に1トンの爆薬を収め、直径3メートル、幅30センチの金属製の車輪を両脇に装着した形状となっていて、車輪の円周部を囲むように18基の火薬ロケットが取りつけられていた。火薬ロケットの推進力で車輪を回転させてネズミ花火のように前進する、いわば、自走ロケット車輪爆弾である。

実用化されれば、上陸用舟艇から発進して時速100キロ近い速度で疾走、上陸阻止のため海岸に埋設された地雷や障害物を破壊しながらコンクリート防壁に衝突。そこで1トンの爆薬が炸裂して防壁を爆破、上陸部隊の経路を切り

軍事的には資源の無駄となったパンジャンドラムだが、マニア好みの兵器として根強いファンが多い。

開くことが期待された。
しかし最初の実験で、パンジャンドラムは数百メートル進んだだけで、火薬ロケットが車輪から外れて、停止してしまう。その後も、ロケットの火薬量を増やしたり、ロケットの装備数を増やしたりして、何度も実験が繰り返されたが、失敗が続くばかりだった。
火薬ロケットの推進力を活かしてそのまま前進するのではなく、その推進力で車輪を回転させて前進する、というパンジャンドラムは、構造上どうしても直進性に難があり、進路は常に定まらなかった。そこで、ワイヤーによる進路の制御を試みたりもしたが、これも失敗に終わっている。結局のところ、自走ロケット車輪が上陸作戦の先頭を切って疾走するという場面は、ついに実現しなかったのである。
なお、実験の模様は、映画フィルムに撮影され、ロケットの噴射炎をあげながら暴走する巨大な車輪の映像は、いまでもロンドンの帝国戦争博物館で閲覧できる。ちなみに撮影中には、パンジャンドラムがカメラに向かって暴走したため、身の危険を感じたカメラマンが慌てて逃げ出す、という一幕もあった。
計画責任者のネビル・シュート・ノーウェーは、戦後オーストラリアに移住し、何冊もの本を著した。名作『渚にて』などで有名な作家、ネビル・シュートその人である。

LSTという発明

伊藤龍太郎

第二次世界大戦で、イギリスが考案して戦局に大きな影響を与えた新兵器のひとつが、上陸用舟艇である。
とくにLSTと呼ばれた揚陸艦は、多数の戦車を積んで海岸に乗り上げ、艦首の扉を開き艦内の戦車を直接発進、即時に戦闘に参加させることを可能にして、上陸作戦の様相を一変させた。
軍事的には、画期的な「秘密兵器」といえたが、既存のタンカーの改装から始まり、箱型の単純な形状の船体、そして、船首に開閉式の扉と戦車が自走して降りるための導板をつけただけで、技術的に高度かつ特殊な点はいっさいない。
発想にしても、まったく独自かつ斬新なものではない。じつはすでに日本軍が、直接海岸に乗り上げ、船首の導板を下げて搭乗した兵士が上陸する舟艇「大発」（大発動機艇）を日中戦争時、実戦で使用していた。
イギリスは、LSTを「発明」したものの、これを大量生産する余力がなく、同盟国のアメリカにも仕様を提示して量産を依頼。アメリカは、LSTを1000隻近く建造し、そのうち100隻をイギリスに引き渡している。また、LSTより小型で高速のLSMや、歩兵揚陸用のLCIなど、多様な上陸用舟艇も多数建造した。これら上陸用舟艇が北アフリカ上陸作戦に登場すると、その情報がドイツを通じて日本にもたらされ、日本海軍はLSTと同種の揚陸艦である二等輸送艦を建造した。
イギリスの奇妙な秘密兵器として有名なものに、パンジャンドラムがある（96ページ参照）。このパンジャンドラムの試験映像に、上陸用舟艇から発進し、そして失敗する場面が収められている。
どちらも、上陸作戦の際に使用される兵器として開発されながら、一方は、堅実な発想や構造で多大な成功を収め、一方は珍奇な発想と構造で失敗し、単なる笑い話となってしまった。
成功を収めた兵器は、対抗上すぐに模倣・追随したものが現われる。また、堅実な発想や構造で作られていれば実用化もたやすく、すぐに秘密ではなくなる。開発に失敗した兵器は、戦場に登場することなく秘密のままで終わる。秘密兵器というものの正体の一面を、端的に表わした一例だろう。

もし、「パンジャンドラム」を実用化していたなら!?

文・吉田親司
イラスト・松田大秀

あまりに破天荒な形状と計画性能、そして費用対効果の悪すぎる使用目的のため、かえってディープなミリタリーファンに愛されているパンジャンドラム。だが、もしかしたら……もしかしたら本稿のような使い道が、かなり歴史の歯車が狂えば、そして運の要素も加われば、実現した……かもしれない。本邦初、パンジャンドラムの空想戦記をお送りしよう。

『……ベルギー国境から60キロ。コブレンツとボンの中間にあるドイツの片田舎。そこは巨大鉄橋で有名な街であった。正式名称はルーデンドルフ橋。一般的には「レマゲン鉄橋」と呼ばれていた。

あの日、私はそこにいたのだ。

鉄橋の東岸には鉄道トンネルが存在した。ドイツはある目的のため1945年1月から拡張工事を実施し、3月頭の時点で幅を15メートルにまで広げていた。

英国情報部はこの工事を訝(いぶか)しんだ。トンネルをUボート用魚雷の貯蔵庫にしているという噂だったが、真実は別にあると予想された。畏怖すべきなのは秘密兵器の管理もしくは製造が行なわれている可能性だった。鉄道に直結している以上、物資の搬入は容易だ。もしもナチスがレマゲンで原子爆弾の開発に成功していたとすれば、事態は最悪となろう。

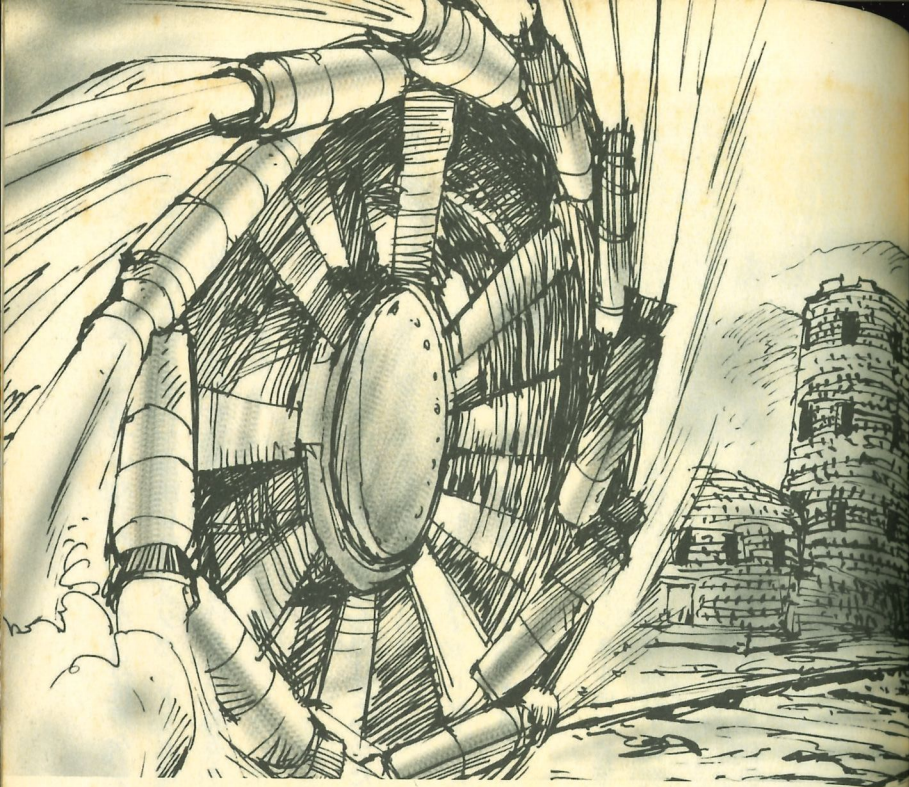
占領せねばならぬ。そしてトンネル内部の物資を確保せねばならぬ。

その考えに取り憑かれたアメリカ第1軍・第9師団に属する部隊が攻撃を強行したものの、彼らはあっさり撃退されてしまった。トンネル出口には大型砲が据えられており、精密な射撃を繰り出してきたのだ。相手が相手だけに空爆もできない。事態は膠着状態に陥った。そこでアイゼンハワー将軍は、我がイギリス海軍諸兵器開発部(DMWD)に泣きついてきたわけであった。

そして3月10日。私は夜陰に紛れ、自慢の息子と一緒にレマゲン鉄橋の西岸に立っていた。「渚にて(オン・ザ・ビーチ)」運用されるはずだった特殊兵器が、まさか川沿いで実戦投入されようとは、小説家の想像力を持ってしても思い至らなかった。私の名はネビル・シュート。数冊の著書がある作家だが、当時は技術者として英国海軍に籍を置いていたのである——。

大回転地獄車

「こんな糸巻き車の怪物が役に立つのか? 転倒して終わりではないのか?」

アメリカ兵たちの罵声と冷ややかな視線が突き刺さってくるのを感じながら、私たちは出撃態勢

構築に勤しんだ。そして深夜2時。回転準備は完了した。

私は開発者のひとりとして、感慨に耽りながら、こう叫んだのだった。

「パンジャンドラム、リフト・オフ！　ローリング・スタート！　目標ドイツ大型砲！　大地を揺るがす遠心力の切れ味を存分に味わうがよい！」

その名前は大先輩の作家サミュエル・フートの戯曲から頂戴した。パンジャンドラムとは火薬付きの靴で飛び回る妖精だ。ロケット自走式車輪爆雷のコードネームとしては、完璧なものであろう。

我が息子ながら容貌は怪異そのもの。直径3メートル、車輪幅は40センチ。中央筒に押し込められた爆薬は1・83トン。これを両輪の脇に設置された70基ものコルダイト火薬式ロケットでブン回し、敵陣に突撃させる必殺兵器である。

もともとノルマンディ上陸作戦において障害となるであろう「大西洋の壁」を爆破せんと計画された自爆兵器であるが、さすがに凹凸の多い浜辺で用いるのは無理があった。だが線路ならば運用可能だ。まっすぐ走ることに関していえば、パンジャンドラムを凌駕する兵器はない。

回転開始後、数秒でスピードは最高値に達した。時速はなんと160キロ！　ドイツ軍も火花を撒き散らしな

がら突入してくる怪物に気づいたであろうが、対抗策など存在しなかった。
大回転地獄車という渾名（あだな）を頂戴したパンジャンドラムは、勢いを失わず、一気にトンネル内部に突っ込み、敵砲台もろとも壮絶な最期を遂げたのである——。

戦のあと

残骸の狭間から発見されたのは単なる砲台ではなかった。自重1000トンにおよぶ超々巨大戦車の屍だった。
陸上戦艦ラーテ。全長35メートル、幅14メートルという肥満体に巡洋戦艦「シャルンホルスト」型の28センチ主砲を2門搭載した怪物マシンだ。まさしくヒトラー最後の玩具である。
のちに米英合同調査が実施されたが、トンネル内に特筆に値する秘密兵器など、ラーテのほかには存在しなかった。どうにか捕虜にした子供同様の国民突撃隊も、こんな田舎町に新型爆弾などあるわけがないと証言した。
原爆という宝物をえるため、障害物（ラーテ）を除去するのが作戦の骨子であったが、わかったのは障害物そのものが宝物（ラーテ）だったというつまらない現実であった……』

氷山製史上最大の巨大空母

氷山空母「ハボクック」

世界最大の軍艦を作ろうとした男

1912年、多くの人命を失った豪華客船「タイタニック」号の遭難を契機に設置されたのが、インターナショナル・アイス・パトロールだ。これは、船舶の航海に危険をおよぼすような危険な氷山の情報を、いまでも日々、発信しつづけている国際機関である。
この機関が、危険な氷山を爆破処理しようとして失敗したというニュースを聞いた男が、イギリスにいた。彼の名はジェフリー・N・パイク。ユダヤ人の家系というだけで、陰惨な迫害を受けたことを跳ね返すように勉学に励み、科学者として人生を歩みはじめた人物だった。
第一次世界大戦に従軍したパイクはドイツ軍

●氷山空母「ハボクック」要目
排水量：200万t
全長：600m
全幅：90m
最大速度：7kt

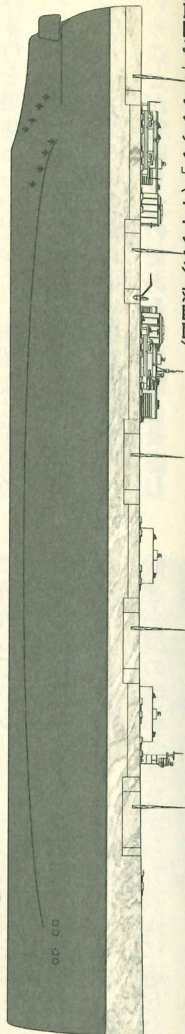
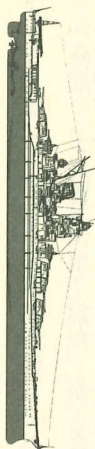
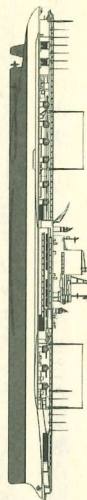
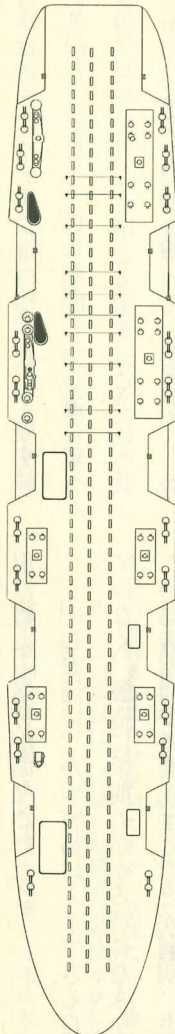
の捕虜となるも、収容所から脱走・生還し、戦後の特需景気に便乗し、株投機で巨額の財を成したが、同じく株で破産。そんな波乱万丈な人生を送る彼に目をつけたのが、英国王立海軍の官民から人材を集めたシンクタンク組織だった。

ときに第二次世界大戦のさなか。大西洋を航行する輸送船団が、独海軍のUボートによって甚大な被害を被っていた。潜水艦の襲撃に対しては、航空機による反撃が有効である。だが、英海軍の空母だけでは数が足りないうえに、同盟国の米海軍も大西洋艦隊の空母を手強い日本海軍の空母機動部隊に対抗すべく、太平洋に回航していた。Uボートが、まさに「やりたい放題」に暴れて猛威を振るっていた時期である。

そこにニュースで氷山の頑丈さを聞いたパイクが、氷山そのものを航空母艦とするアイデアを提案する。そのプランとは、植物繊維を混入した溶けにくく強靭な氷（彼の名をとってパイクリートと呼ばれた）を素材にして人工的に氷山を作り出し、航空機300機を搭載して北大西洋に進出させ、航空援護が難しい海域での作戦に利用するというものであった。

その長さ600メートル、幅90メートルにして、排水量は200万トン。艦内には多数の冷却機を装備して氷の船体を維持する。外装式の推進器を取り付けて外洋航行を可能にし、爆弾も魚雷も無効にする（なんと破損部分は冷却水で凍らせて復元する!）。その大きさは、航空母艦というよりは巨大な滑走路を持つ洋上要塞といったほうが適切であろう。

巧妙なUボートの襲撃により欧州向けの輸送船団（これで運ばれる武器弾薬が戦線を支えて

氷山空母「ハボクック」（イギリス／横面図）

戦艦「大和」（日本）

航空母艦「ミッドウェー」（アメリカ）

氷山空母「ハボクック」（イギリス／上面図）

不沈戦艦「大和」、巨大空母「ミッドウェー」と比べても、氷山空母「ハボクック」の突出した大きさは際立っている。完成したとしても、どう運用するつもりだったのだろうか……。

いたといっても過言ではない）が、耐えられないほどの被害を受け、各地で苦境に陥っていた連合軍はこのアイデアに飛びついた。苦戦を続ける英国だけでなく、自ら参戦しつつ連合軍への武器供与を続けた米国とカナダ（この国も兵器生産では重要な役割を担っていた）がくわわった3カ国共同の国際プロジェクトそして、氷山空母「ハボクック計画」は承認され実験が開始されたのだ。

　実物を忠実に縮小した実験船が建造され、カナダ内陸部にある湖に係留された。が、その結果は期待を裏切るものだった。強靭なはずのパイクリートは予定された強度を発揮せず、なおかつ涼しいカナダの気候においても溶けやすいということが判明したのである。事態を憂慮した各国の政府は、この計画に科学者を追加招集して研究を続けた結果、溶けにくい成分を含む材料開発などの対応策を編み出し、ようやく実用に耐える素材が開発された。

　しかし安価に、かつ容易に入手できる自然氷ではなく、製造に手間のかかる特殊な氷を使うため建造期間が長期化することが判明。さらに設備の整った場所でしか建造できないこともあり、これらの要因によって費用が高騰することが確実となる。

　一方、長時間の滞空が可能な飛行船での洋上哨戒や、飛行艇によるパトロールが強化。さらに潜航しているUボートの潜望鏡を探知できるほどの高性能レーダーが開発されたこと、巨大な工業力を発揮して「週間空母」と呼ばれる、低速小型の商船改造ながらも護衛に適した航空母艦が大量生産されて、実戦配備され始めたことによって、「ハボクック」の必要性は低下。氷の空母「ハボクック計画」は文字どおり凍結され、二度と日の目を見ることはなくなってしまった。

　その後もジェフリー・N・パイクは、さまざまな作戦提案を出し続けたが採用されることはなく、1945年に戦いは終わる。

　彼は失意のうちにその3年後、自らの人生に終止符を打ってしまった。パイクに対する後世の評価はさまざまだが、陸のない大洋に人類の足場を構築するという思想は、いまの巨大浮遊構造体（メガフロート）の基礎となったのかもしれない。

　早すぎたであろう先人の知恵。カフェで供されるドリンクに浮く氷を見て、60年前のこの話を思い出してみてはいかがだろうか？

トン数のマジック

山本義秀

7万トンの豪華客船、クイーンエリザベス2世号。たしかに巨大である。しかし「6万トン強の戦艦『大和』よりも大きいよな」と思ったとしたら、間違いではないけれどダウト。

　軍艦と一般の船舶は、大きさを表わす排水量の計算方法が違う。難しい法律と計算式はあるが、ごく簡単に説明すると一般の船舶の大きさを表わす「総トン数」は、どれだけの貨物や旅客が搭載できるかという数値である。たとえば、1万総トンの貨物船は、1万トンの荷物を積める容積があり、かつ、沈没しないで自力航行して運べるだけの大きさがあるということ。

　一方、軍艦の排水量は軍艦の重さそのもの。こちらも基準が複数あるので詳細は略すが、単純にトン数の数字で比較すると軍艦は、一般の船舶よりもはるかに小さくなってしまう。

　一般の船舶の考えかたで空母「信濃」を考えたら、さて総トン数はどれだけになるのだろうか？

第二章
闇にあった兵器たち
～活躍する秘密兵器～

ナチスとヒトラーそして、オカルト

青山智樹

ヒトラーの奇癖はさまざま伝えられているが、もっとも有名なのが菜食志向と、薬好きであろう。ヒトラーはいっさい肉を口にせず、極端な嫌煙家で酒もコーヒーも一滴も飲まなかったという。薬についてもヒトラー専属の医師、テオドア・モレル博士が明白に危険な処方を施しており、そこにはベラドンナ剤や向精神薬がたっぷり含まれていた。モレルについては毀誉褒貶さまざまであるが、ヒトラー自身が薬品の効能を知っていた節もある。ちなみに、これらの薬は中世の魔女が、トランス状態にはいるために使用したとされる薬品と酷似している。

また、ヒトラーの個人的な副官であったハインツ・リンゲは、ヒトラーは覚え書きのために、赤青緑という三種類の色鉛筆を常に用意しており、これらを敵について書く際には赤、緑は友人について、注意を必要とする場合は青と使い分けていた、と供述している。特定の食品を遠ざけたり、色鉛筆を使うのはオカルトなり魔術の基本的な方法である。

ナチスの執った大々的な政策のひとつに占師狩りがあげられる。市井の占師たちを一堂に集めたのである。実際になにが行なわれたのかはわからないが、その後、一般市民は占いに接するのを禁じられ、集められた占師たちは一部をのぞいて強制収容所に送りこまれた。

ヒトラーの戦争指導がもっとも成功した時期は、初期のポーランド侵攻からフランス占領までであるが、これらはどれをとっても成功要因が見あたらない。戦争準備、経済、あらゆる状況がドイツに不利を示していた。だが、ヒトラーはこれをやすやすと成功させてしまう。

じつは、戦況が上向きであった時期は、占師狩りの時期とほぼ重なる。うがった見方であるが、占星術によって天佑をえたのかもしれない。占師に戦況を予測させ、失敗したものが排除されたとする見方もできる。

ちなみにナチスのなかでもっともオカルト志向が強いのは親衛隊隊長のハインリヒ・ヒムラーであろう。親衛隊（Schutz-Staffel）は頭文字そのままにSSとよばれ、稲妻を2つ並べたようなマークが有名であるが、これはSを表わすルーン文字である。

ナチスはオカルト的なパワーを利用していたのだろうか？　ただ、これらはいずれも事実の断片と推測にすぎず、ナチスとオカルトの関係を全肯定するものではない。

対戦車高射砲

88ミリ高射砲「アハトアハト」

万能兵器「アハトアハト」

88ミリ高射砲。マニアの間では「アハトアハト」と呼ばれるこの万能兵器のルーツは、ドイツ軍の高射砲のルーツ、プロイセン軍が1890年代末に製作した57ミリ対気球砲にまでさかのぼる。

そして気球砲が、対航空機用のものに発展、やがて地上戦闘や野戦防空にも使える自走式の長砲身77ミリ、88ミリ砲が開発される。

これらのドイツ軍の高射砲は、全般的に優秀な火砲として活躍したが、それは逆に戦後、ドイツが高射砲などの火砲の開発を、ベルサイユ条約で大きく制限されてしまう要因となった。

だが、ドイツの牙は決して抜かれず、厳しい

●88ミリ高射砲「アハトアハト」要目
重量：6861kg
砲身長：4.93m
口径：88㎜
発射速度：不明
最大射程：2㎞

仰天度
有効度
現実度
間に合った度
大活躍度

砲列を敷く「アハトアハト」。常識はずれの威力と運用法に対し、イギリス軍捕虜とドイツ軍の間で「高射砲で戦車を撃つのは卑怯だ」「高射砲でしか撃破できない戦車を持ってくるほうが卑怯だ」という会話がなされたとか……。（写真提供＝潮書房）

条約規制のなかでも火砲の試作を継続、1931年にふたたび新型の88ミリ高射砲の開発を開始した。新型であるのに、口径が以前のものと同じなのは、88ミリ砲弾の重量である15キロ程度が、手動作による迅速な装填の限度だと判断されたがゆえだった。この高射砲は再軍備宣言の後、Ｆｌａｋ18として制式採用され、量産が開始された。

真打登場！Falk36＆37

スペイン内戦の後、ドイツ軍は対戦車／トーチカ用の39型被帽付徹甲弾を供給すると同時に、砲身を分割式としたＦｌａｋ38、砲身命数（砲の寿命）を向上させたＦｌａｋ37の量産を開始した。

以上の88ミリ高射砲シリーズは、開戦と同時

に各所で大活躍することとなった。基本的に前述のボフォース75ミリ高射砲の拡大型であるこの砲は、基本性能のうえで優秀であるだけでなく、地上兵器としての性能も与えられており、敵戦車やトーチカにも有効だったからだ。

また、当時のドイツ軍戦車部隊の主力は、訓練用トラクターから発達したI号やII号戦車であり、連合軍の投入した重装甲の敵戦車に対しては著しく劣っていた。だが、そんな敵戦車でも、88ミリならば確実に撃破できた。

第二次大戦の緒戦における、こうした戦例でもっとも有名なのが、1940年のフランス侵攻作戦におけるアラスの戦いだろう。この戦いでは、ロンメル将軍率いる第7装甲師団は、イギリス軍のマチルダ歩兵戦車の反撃で危機に陥った。マチルダ戦車は、「歩兵を支援するため」の戦車であるため、当時ドイツ軍がもっていた対戦車砲では撃破できない装甲を備えていたのだ。だが、ここでロンメルは師団長として自ら陣頭にたち、88ミリ高射砲でマチルダをアウトレンジして撃退した。

ドイツ軍はこうした戦訓をもとに、その後に繰り広げられた幾多の戦いで88ミリ高射砲を対地攻撃に投入、友軍の危機を幾度となく救った。北イタリアでは有名なハルファヤ峠の戦いでふたたびロンメルが88ミリ高射砲を用いてイギリス戦車部隊を撃破したし、独ソ戦の初期では、イギリスのマチルダ戦車よりもさらに強力なT34中戦車や「モンスツルム（怪物）」の異名を持つＫＶ1重戦車に、88ミリ高射砲の鉄槌が振るわれた。こうした88ミリの対戦車兵器としての使用は、ドイツ軍が防衛戦に転じた大戦後半

以降も続けられた。

また、ドイツ軍は前述の3種類にくわえて、さらに強力な性能を持つＦｌａｋ41、純粋な対戦車砲の88ミリＰａｋ43Ｌ／71、戦車搭載型の88ミリＫｗＫ36Ｌおよび88ミリＫｗＫ43Ｌ／71、を開発した。このなかで特に有名なのが最後の2種類、88ミリＫｗＫ36Ｌおよび88ミリＫｗＫ43Ｌ／7だ。この2つはそれぞれドイツ軍最強の戦闘車両ティーガーI重戦車、ティーガーII重戦車の主砲として搭載されたからだ。

かくのごとく、88ミリ高射砲は、地上、対空を問わず大活躍した傑作兵器だった。しかしそれは、砲の性能だけでなく、ドイツ軍がもっていた柔軟な作戦能力がなければ、実現しえなかったともいえるのである。

ハルファヤ峠の死闘

内田弘樹

88ミリ砲がもっとも「超兵器」らしく活躍した戦闘は1941年6月、北アフリカ戦線の一戦、ハルファヤ峠の戦いである。イギリス軍は、この戦いに重武装のマチルダII歩兵戦車を投入した。それに対し、ドイツ軍はハルファヤ峠に第194歩兵連隊第一大隊を配備していた。

大隊の指揮官は、マンハイム福音協会で牧師を務めていたウィルヘルム・バッハ少佐。彼はいくつかの火砲とともに、たった5門の88ミリを陣地に隠し、イギリス軍を待ち構えた。

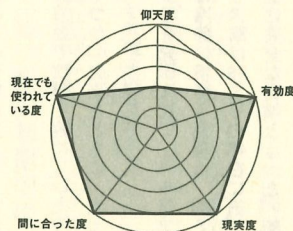
6月15日、イギリス軍はマチルダIIを先頭に立て、ハルファヤ峠へと攻勢を開始した。バッハは冷静に情勢を見極め、88ミリで敵戦車を狙う。この時、イギリス軍は88ミリの存在に気づいていなかったため、バッハの攻撃は完全な奇襲となった。88ミリの高威力によって、マチルダIIはなすすべもなく討ちとられていく。陣地に突入した12両のうち、11両のマチルダIIが撃破され、イギリス軍の攻勢は完全に頓挫してしまった。

この時の戦いで大損害を負ったイギリス軍は、峠を「ヘルファヤヘル・ファイヤ（煉獄）の峠」と呼び、バッハ少佐も「劫火の牧師」とあだ名されるようになるのである。

歩兵携行用ロケット砲

「バズーカ」

バズーカは、アメリカ軍が開発した「究極」の対戦車兵器である。バズーカはドイツ軍の対戦車兵器パンツァーファウストと同様に成型炸薬弾で相手を攻撃する兵器であるが、米軍のバズーカを参考にドイツ軍は自家製バズーカ、パンツァーシュレックを開発している。

バズーカの開発は、1918年にまでさかのぼる。この年、アメリカのニューヨーク州ロズウェルで奇妙な兵器が奇妙な科学者によって発明された。彼の名はロバート・ゴダート。ゴダートは当時まだ数少ないロケット研究の第一人者であり、その奇妙な兵器とは、簡単なロケット発射器だった。これはバズーカではないが、その始祖というべき兵器だった。しかしゴダートの発明はアメリカ・イギリスの双方に無視され（第一次世界大戦が終った直後であったため）、この段階においては彼の発明は芽吹かなかった。だがその後、ドイツのフォン・ブラウンはこのゴダートの理論をもとに、V2ミサイルを完成させる。

アメリカ陸軍においては1940年にレズリー・リスナー大佐が再び同様の兵器を提案、これが受け入れられ、バズーカの開発が再開される。彼は長さ2メートル、直径5・99センチのパイプをもとに簡単な発射器を作り、迫撃砲にフィンをつけた砲弾を飛ばしてみせた。この発明はアメリカ陸軍の興味を引き、成型炸薬弾をロケットで飛ばす兵器、すなわち「バズーカ」の名で量産が開始されることとなった。

ちなみにバズーカという名前の由来は、その形状が当時アメリカで有名だった音楽コメディアン「バブ・ボーンズ」の舞台で使用された「バズーカ」と呼ばれる独特の姿のラッパに似ていたことからだった。

こうして陸軍に受け入れられたバズーカは、1942年6月に公試が行なわれ、同年11月の北アフリカ上陸作戦ではじめて実戦に投入され

●M1「バズーカ」要目
口径：60㎜
射程距離：550m

仰天度
有効度
現実度
間に合った度
現在でも使われている度

肩撃ちのメリットは大きく、パンツァーファウストより命中精度も高かった。（写真提供＝潮書房）

た。このバズーカはM９バズーカの名称で活躍、ドイツ軍に多大なショックを与えることとなった。以後、バズーカは大戦終結まで活躍、ドイツ軍の戦車やトーチカを破壊する際に猛威を振るった。

　バズーカがドイツ軍のパンツァーファウストよりも優れていた点は、肩撃ちが可能だったことだ。このおかげで、兵士は安全な場所に隠れて、安定した姿勢で発射することができた。ドイツ軍がパンツァーシュレックを開発したのにはそうした理由もある。

　パンツァーシュレックも、アメリカ軍のバズーカと同様に、簡易な対戦車兵器として活用された。参考となったのは、チェニジアで鹵獲したアメリカ軍のバズーカだったという。ただし、パンツァーファウストのように取り扱いは簡単でなく、戦車猟兵のみが運用した。形状がストーブの煙突に似ていることから「オーフェンローア」と呼ばれたという。

　また、ドイツではパンツァーシュレックとは別に、さらに威力を増した携帯型の１０５ミリ対戦車兵器「パンツァーハンマー」も開発されたが、終戦には間に合わなかった。大戦末期にはパンツァーシュレックを装備した即席の自走砲も登場している。

　朝鮮戦争においてもM９バズーカは実戦投入された。ただし、戦後５年が経過していたため装薬が湿っており、T34中戦車には効果がなかったという。このためアメリカ軍はすぐさま新型のM20バズーカを開発し、投入。現地部隊の危機を救っている。

無敵!? 音響誘導魚雷

G7e電池魚雷「ミソサザイ」

高価なハイテク兵器・魚雷

　拳銃から「大和」の46センチ砲まで、銃・砲関係の弾丸は一度発射されたら、ただひたすら自由に飛び、なにかに命中したら（あるいは時間などの一定条件で）爆発、貫通する。

　ところが魚雷は、発射前に速度、深度、方位などのデータを計算した上で入力し、発射されたら、いわゆるセンサーで深度と方位を調べてそれを舵で調整維持しながら、内蔵された燃料をエンジンで消費しつつ抵抗の多い水中を前進し、なにかに命中し爆発する。

　これだけの説明でも魚雷は銃・砲弾と比べて、かなり複雑かつ精密な構造を必要とすることがわかるだろう。

●G7e電池魚雷「ミソサザイ」要目
外径：53.3㎝
全長：7.21m
雷速：30kt
射程：5000m

仰天度
有効度
現実度
間に合った度
一時は猛威を振るった度

余談だが、ここまで制御しても数キロメートルの射程しかない魚雷の命中率は意外にも低い（平均して数パーセントしか命中しないのが普通）。しかし超高性能な酸素魚雷を持っていた日本海軍は、30キロメートル離れた場所から時速40キロメートルで進む目標に、時速70キロメートルの魚雷を命中させるように訓練していたというから驚く。

実際の話、大戦中の魚雷1本は、個人の住宅1軒分に匹敵するほどの高価な兵器であり、いかに実戦といえども、そして命中した艦艇に対して、致命的なダメージを与えることが可能であっても、安易に乱射しまくるには高価すぎる武器だったのだ。洋上で潜水艦が単独商船を襲撃する場合、条件が整えば自艦が無防備となることも覚悟で、浮上して砲撃で撃沈させようとしたのも、このためである。

「ミソサザイ」の明と暗

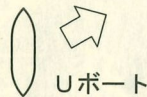
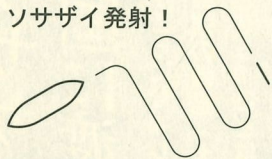
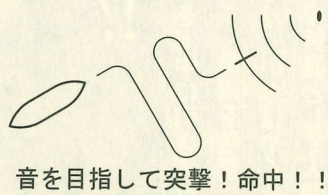
「ミソサザイ」はホーミング魚雷とも呼ばれるが、同種の魚雷は戦前から各国が開発に着手していた。その大部分は魚雷の左右に取りつけられたマイクが、目標が発する音を拾って針路を変えるものだったが、水中の雑音や搭載する魚雷本体の騒音を拾うこともあったうえ、装置の小型化も難しく実用化には至らなかった。

しかし、ドイツ海軍はマイクを魚雷の先端部に仕込むことに成功し、騒音の少ない電池魚雷と組み合わせて「ミソサザイ」を完成させた。その効果は抜群で、Uボートを制圧したつもりになっていた連合軍の護衛艦艇と輸送船団は、回避不可能な魚雷攻撃に遭遇してパニック状態となった。

こうして、ふたたびUボートが戦闘の主導権を握るかに見えたのだが、その優位は長続きしなかった。「ミソサザイは艦船の音に反応する」という原理を見破られ、すぐにその対抗策が準備されたのだ。

それは誰もが呆れるほど簡単なシステムで、水密ケースに入ったスピーカーを船尾から曳航して「自艦よりも大きな騒音を撒き散らす」というものだった。

これで船団の被害は激減。仮に、スピーカー（デコイと称された）が破壊されても、予備を投入するだけですむ。まさに当時の高価なハイテク兵器が、一瞬でローテク装備に封殺された瞬間だった。結局これをきっかけに、Uボート部隊の活躍は散発的なものになってしまう。

魚雷物語（ミソサザイの巻）

もし、「ミソサザイ」が我が国に渡っていたなら!?

文・川又千秋

19世紀なかごろに登場して以来、魚雷は世界各国の艦船を海中に引きずりこみ、世界最強の戦艦「大和」にとどめを刺すまでに至る。「魚雷を敵艦に確実に命中させる」ことは、海戦を制することと同義であり、いちはやくその解決策を示したのが日本とドイツであった。それは、誘導装置として人間を使う無粋な兵器「回天」とそして、ドイツのミソサザイである。同じ目的のために、かくも違う解法を導いたことを、日本人は恥じるべきだろう。

【以下の物語は拙著『翼に日の丸』（角川文庫）に登場する架空兵器〈回天〉にまつわるエピソードを再話したものである。ちなみに、同作品において、太平洋戦争は一九四八年十二月まで継続する】

＊＊＊

西暦一九四五年五月十一日金曜、ジョン・カーター少将指揮する第八三護衛空母部隊は、マーシャル諸島東方、オーシャン島の南およそ百海里付近を十五ノットの速力で南西に航進中であった。艦隊は五隻の護衛空母を中心に、巡洋艦二、駆逐艦九が周囲を固める陣容。その任務は、濠州ダ

ーウィンへの増援機輸送で、空母五隻中四隻の飛行甲板は各種陸上機で埋め尽くされ、防空および対潜哨戒に当たる艦上機を運用していたのは、一万一千トンの空母〈シェナンゴ〉一隻であった。

その日、正午頃、艦隊は小型水偵の触接を受けた。が、以後は何事もなく、日没が迫る。その時！　突如、艦隊を先導していた六千トン級の防空軽巡〈オークランド〉の右舷中央に大水柱が奔騰。艦は瞬時に横倒しとなって沈没をはじめた。さらに数分後、今度は輪型陣の中央部に位置していた七千八百トンの護衛空母〈オマニー・ベイ〉が大爆発を起こし、艦隊は大混乱に陥った。

潜水艦の魚雷攻撃にしては、爆発の規模があまりに大きすぎる。そこで、浮遊機雷の設置海面に突入してしまったものと判断した指揮官カーターは、ただちに、全艦に対して反転命令を発した。

そんなさなか――駆逐艦〈デジャー・ソリス〉乗組の艦橋見張り員クリーヴ・ニューナム三等兵曹は、恐るべきものを海中に発見した。〈D・ソリス〉は、艦隊旗艦の一万トン級軽巡〈ナッシュヴィル〉に続いて急激な回頭を開始したところだったが、そこで、ニューナムは、乗艦の左舷後方から「鯨のようなもの」が「猛スピードで艦を追いかけてくる」のに気づいた。それは、艦の転舵に合わせ、海中で急カーブを描きながら肉迫してくる。「それは、サイズとシルエットからいって、鯨か、あるいは鯱のような大型の海棲獣に似ていた」と、のちに、彼は証言している。「それは、海中で、胴体の左右に張り出した大きな〝胸鰭〟を動かしていた。そして、信じられないスピードで我々の艦めがけて襲いかかってきた」と。

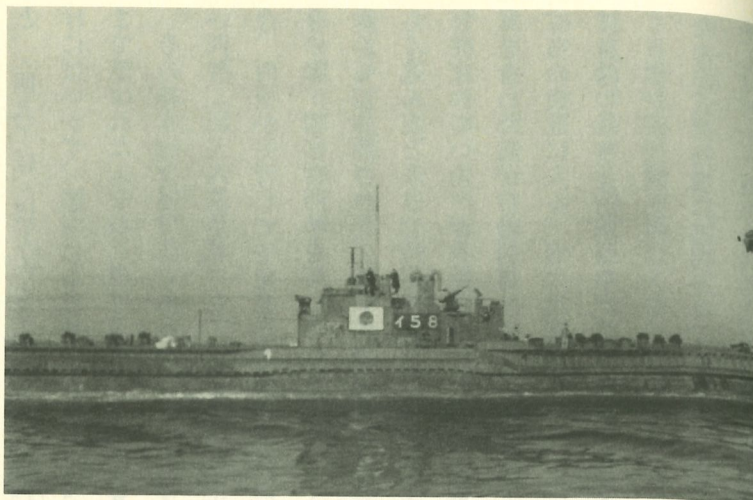
ニューナムは、即座に、迫り来る危険を張り裂けんばかりの大声で報告した。が、間に合わなかった。その〝怪物〟は、〈D・ソリス〉に頭から激突し、直後、大爆発が起こって、艦は真っ二つに引き裂かれた。その後方では、空母〈シェナンゴ〉が同様の大爆発に見舞われていた。

必殺兵器〈回天〉の初戦果

どちらも轟沈であった。〈D・ソリス〉の乗組員は大部分が艦と運命をともにした。ただ、ニューナムは、爆発の衝撃で奇跡的に艦橋から放り出され、およそ二時間の漂流を経て救助された。

当初、この〝事件〟は、艦隊が濃密に敷設された大型機雷原に突っ込んだための不運な出来事とみなされた。しかし、以後、繰り広げられた周辺海域の徹底的な掃海作業にもかかわらず、肝心の機雷は一個も発見されず、逆に、出動した高速掃海艦〈エリクソン〉が、機雷以外の原因によると思える大爆発を起こして沈没するというおまけまでついて、米側の混乱は、なおさらに深まった。

そこで、俄然、生き残り見張り員ニューナムの証言が注目を浴びたものの、精神鑑定や嘘発見器による聴取を経たあとも、彼の目撃談は、なお、しばらくの間、恐怖のあまりの錯覚と考えられ、まともに受け取る者は少なかった……という。

ともあれ――これが、戦史に刻まれた〈回天〉の初陣であった。我が海軍が、ドイツからもたらされた「ツァウンケーニヒ（ミソサザイの意）」と呼ばれる音響追尾システムを応用し、これと、

史実においても、人間魚雷「回天」を搭載したこともある「伊58」。〈回天〉もこのサイズの潜水艦に搭載される。(Photo/USN)

我が国独自の酸素魚雷技術を合体させることで誕生させた必殺兵器による、初の凱歌であった。

海の怪物「リヴィ」の正体

以下に、この兵器の要目を掲げる。

【回天一型】●全重量十・二トン●全長十五・四五メートル●全幅二・八メートル（水中翼を含む）●弾頭直径一メートル●動力素／純酸素+ガソリン●速力／最大三十八ノット、巡航二十二ノット●航続距離／全速十五海里、巡航三十四海里●誘導方式／三次元受動音響追尾●炸薬量／一・五五トン

当時、我が海軍が潜水艦用に供給していた酸素魚雷の代表格である九五式は、口径が五十三サンチ、全長七・一五メートル、重量約一・七トンで、炸薬量は五百キロ程度。これに比べる

と、〈回天〉は、ほとんど小型潜水艇と呼びたいほどの図体であるから、当然、発射管を用いるわけにはいかず、艦内にも収納できない。そこで、〈回天〉は、大型の伊号潜水艦に背負われて戦場まで運ばれた（なお乙型は二基、丙型は六基を搭載した）。

その基本的な運用法であるが、小型水偵を搭載する乙型改（回天二基搭載）と、水偵を搭載しない丙型（回天六基搭載）がチームを組んで出撃。乙型の空中偵察によって敵の所在が確認された場合、丙型が先行して予想進路近傍まで進出（理想的には十海里圏内）して〈回天〉を発進させる。

その際、精密な照準を行なう必要はなく、大まかな方向だけ定めての自走発進である。海中で潜水艦から切り離された〈回天〉は二十メートル程度の深度を保って二十二ノットの巡航に入る。しばらく進んだところで時限スイッチが入り、音響追尾装置ツァウンケーニヒ（国産装置は津式探知機と呼ばれていた）が作動する。そして、音源を感知すると、ただちに機関出力が全開となり、水中翼を含めた舵が自動制御に切り替わって、一挙に海面下五メートルあたりまで浮上しつつ、まっしぐらの突進に入る。最大速度は三十八ノット超――たとえ、敵が気づいて回避を試みても、〈回天〉は目標の発する機関音めがけて右に左に舵を切りつつ、これを追い詰め、命中させる。

目標が潜望鏡視野に入っている場合などは最初から最高速で発進させるが、いずれにせよ、いったん津式探知機に感知され、最高速で追尾を受けたら最後、これを振り切ることは不可能に近い。

そして、一・五トンの炸薬を水線下に叩きつけられた目標は、ひとたまりもない。

これぞ！　必殺の海の忍者、究極の隠密兵器であった。当然、我が軍は、その存在秘匿に最大限の努力を傾注した。不発による捕獲を防ぐため、起爆装置が三重（衝撃式＋電気式二系統）にセットされ、さらに、機関の停止と同時に作動する自爆装置も備えられていた。そして、それらは、発進直前、本体と潜水艦をつなぐ連絡筒に整備員が入って、そのつど、調整をやり直し、万全を期すのである。

結果、相次ぐ被害に震え上がった米軍が、必死の諜報活動と囮艦隊まで使った捕獲作戦を繰り広げたものの、その正体は、ついに終戦まで暴露されることがなかったのである。

ちなみに、米軍は、この海の怪物をリヴァイアサンに因んで「リヴィ」と呼び、恐れた。その制式名が、戦勢の一挙挽回を意味する〈回天〉であることを彼等が知るのは、戦後、数年を経てからのことであった。

電子に守られた戦闘指揮中枢

CIC（戦闘指揮所）

　近代の海戦では、艦隊の指揮官は軍艦の艦橋に陣どって、指揮を執った。海戦は指揮官の視界の範囲内で繰り広げられ、戦闘での判断は肉眼でえられる情報をもとに下された。軍艦の搭載兵器、つまり主砲の射程はしだいに伸びていったが、主要兵器が大砲である間は、基本的に有視界戦闘に終始していた。

　だが、航空機の登場が海戦の様相を一変させた。航空機は軍艦の10倍以上の速度で、軍艦の大砲の射程をはるかに超える距離を飛行しての攻撃を可能とした。海上においてこれは水平線の彼方、視界外からの攻撃を意味する。

　航空攻撃を探知し、その情報をえるためには、肉眼あるいはそれを補強する光学兵器では当然、間に合わない。そこでより早く、より遠く探知するために、電波兵器が開発された。レーダーの登場である。第二次世界大戦は、電波兵器を駆使しての戦いとなり、レーダーの優劣がしばしば勝敗の分かれ目になった。

●アメリカ軍艦の主要レーダー

SKレーダー（対空レーダー）
SK2レーダー（能力向上型）
SCレーダー（対空／対水上兼用レーダー）
SC2レーダー（小型化したもの）
SGレーダー（大戦初期の対水上レーダー）

仰天度
有効度
現実度
間に合った度
計りしれない貢献度

CICの出現

　海戦の主役は航空機を搭載した航空母艦となったが、航空戦においては偵察機から無線によってもたらされる情報、レーダーの電波により探知された情報など、広域に渡る情報が大量に集められることになった。これらの情報をもとに、航空母艦に搭載された航空機を運用し、戦闘を行なうことが勝利の鍵となっていく。

　アメリカ海軍は、1943年から続々と完成していた「エセックス」級空母に、CIC（戦闘情報センター＝Combat Information Center）を設置した。CICには、指揮下の各部隊からの無線により情報が集められる。同心円と放射状の直線が交わる図形が刻まれた透明アクリル板が設置され、情報はそこにペンで記入されていく。発見された敵の距離・方位などの位置関係が把握され、対処するべき順序や向かわせる部隊が決定、即座に命令が下される。その結果、空母艦載機による効率的な戦闘行動が可能になったのである。

写真はCICではないが、このように艦の状態をリアルタイムで集積することで、的確な判断と命令を下すことができた。アメリカの強さは、兵器の性能や数だけではない。（Photo/USN）

ＣＩＣの施設自体には、新奇な機械や斬新なメカニックがあるわけではないが、各種の高性能レーダーによる高精度の情報探知、無線電信機による緊密な情報伝達が可能になって、はじめて実現したいわば「ソフトウェア」で、当時、アメリカだけが唯一開発しえた「秘密兵器」であった。

１９４４年６月のマリアナ沖海戦では、ＣＩＣに集められた情報により、日本海軍航空部隊の攻撃を察知して、艦隊上空での迎撃態勢を決定。それを受けた戦闘機隊の大群が、日本の攻撃隊を優位な高度で迎え撃つことになった。航空機の機数という戦力で優位に立ったうえ、さらに戦闘における状況判断材料という情報面でも優位に立ったアメリカ海軍が、この海戦で完璧な勝利をえたのは、当然であったといえよう。

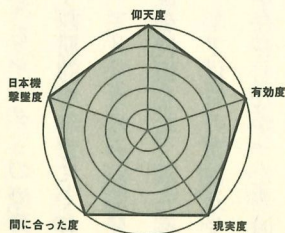
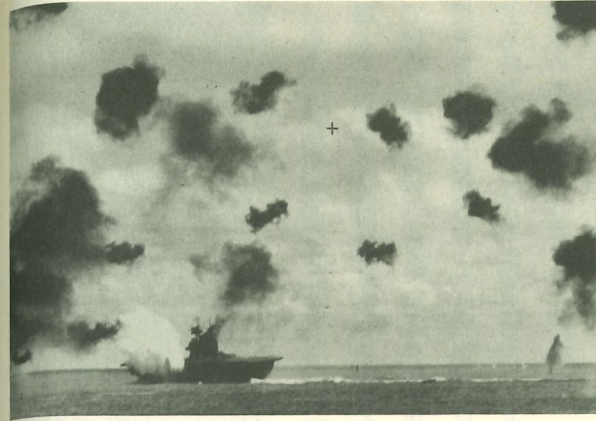
現代の軍艦では、かつての艦橋にかわって、このＣＩＣで指揮官が指揮を行なう。戦闘に必要なすべての情報がここに集約されて、指揮官が判断して命令を下す。かつては艦橋付近に設置されていたが、現代の軍艦のＣＩＣはもっとも重要な区画として、艦体内部の奥深くに設置されている。

また、かつてはアクリル板に手書きで記入された情報も、いまではコンピュータネットワークを介して集められた大量のデータがモニター画面に直接表示され、ミサイルなど各種攻撃兵器にそのまま転送される、というシステム化がなされている。

ＶＴ信管

米軍の勝利の女神　対空近接信管

第二次世界大戦まで、航空機に対する高射砲による砲撃は、時限信管を取りつけた対空砲弾で行なわれていた。目標とする航空機の飛行高度をあらかじめ想定して、その高度に砲弾が達する時間に着火するよう信管をセットして射撃するのである。発射された砲弾は、一定時間を経過後、炸裂する。その時、想定高度の付近に目標の航空機がおり、命中あるいは炸裂した破片が当たれば、撃墜できる。しかし、これでは高い命中率は望めず、第二次大戦期における航空機の性能向上にともない、効果的な対空射撃は困難になっていた。

アメリカ海軍では、対空射撃力の向上のため、画期的な対空砲弾用の信管の開発に着手した。電波の送受信機を内蔵した信管により、自ら電

波を発し、その電波が目標物に当たり、反射した電波を受信すると着火して砲弾を破裂させる、という仕組みである。この信管を取りつけた対空砲弾は、目標の航空機の近くに達すると自動的に炸裂するため、発射前の着火時間の調整もいらない。当然、高射砲の命中率、撃墜率は、飛躍的に向上する。これがＶＴ（Variable Time）信管である。

アメリカの対空砲火は、VT信管導入以前も熾烈なことでは定評があった。写真はミッドウェー海戦時のもの。さしもの日本海軍のベテラン搭乗員もこの弾幕を突破することは困難だった。（Photo／USN）

　電波による探知装置であるレーダーの原理を、信管に応用するという画期的な着想にくわえ、当時の世界では唯一、アメリカのみが開発可能であった電子機器技術を使用した、最先端のハイテク兵器といえる。ＶＴ信管の電波送受信機には、トランジスタが存在しなかった当時ゆえ、真空管が用いられた。その真空管には、衝撃緩和のため樹脂に封入され取りつけられるなどの工夫がなされている。当時において発射時の砲弾内部の衝撃に耐えてなお確実に動作する真空管を大量に生産するという離れ業は、アメリカの技術力と工業力があって、はじめて可能となったことだ。

　一説には、ＶＴ信管の開発には、原子爆弾開発のマンハッタン計画に匹敵する予算とスタッフが投入された、ともいわれる。

　ＶＴ信管が、12・7センチ両用砲の砲弾に装着され、最初に実戦で使用されたのは、1943年1月。ソロモン海域で軽巡洋艦「ヘレナ」が日本海軍攻撃機に対して行なった射撃で、以後、米海軍の防空能力はますます強力となった。

　従来の高射砲が、数千発撃って一発当たるかどうか、といった命中率だったのに対し、ＶＴ信管装着の対空砲弾は、1機撃墜あたりの発射数が約600発だったという。

　ただし、アメリカ海軍の艦隊防空能力向上は、ＶＴ信管という1種類の兵器によってなされたわけではない。レーダーによる敵機の早期探知、多数の艦上戦闘機によるＣＡＰ（Combat Air Patrol＝戦闘空中哨戒）、戦闘機隊へのＣＩＣからの指示による迎撃管制、各艦に多数搭載された12・7センチ両用砲、40ミリ機銃、20ミリ機銃と各種口径を揃えたことによる各高度の隙間ないカバー（ＶＴ信管は、12・7センチ砲弾に取りつけられた）。これら各種の整備によって、強力な艦隊防空態勢が実現したのである。結果、日本海軍機による急降下爆撃や雷撃という対艦攻撃は、不可能に近い状態となり、体当たり特攻の実施に踏みきる要因となった。

　ＶＴ信管は、画期的な新兵器ではあったが、あくまで艦隊防空システムの一部を構成する要素にすぎなかった点を忘れてはならない。

特殊作戦用小型艇

各国の小型潜水艦・潜水艇

ドイツの小型潜水艦

小型潜水艇というと、日本の甲標的などが有名であるが、欧米でも同様の研究、実戦配備がなされていた。

特に、この手の兵器の宝庫といえばドイツであろう。

「ビーベル」は、小型潜水艇の両脇に魚雷をくくりつけて、これを発射する艦で、排水量6トン。シュノーケル装置をもち、航続力も100キロ程度ある本格的な潜水艦であった。沿岸警備や、あるいは狭隘（きょうあい）なドーバー海峡を警戒するのであればUボートでなく、これで充分であったのだろう。

さらに単純な潜水艇として「ネーガー」がある。これは魚雷を上下に2つつなげたもので、乗員は炸薬を抜いて操縦可能にした上部魚雷に乗り込み、バブル状のコクピットから敵艦を見つけて下部魚雷を発射後、逃走する。出現当初は相応の戦果をあげたようであるが、ガラスのコクピットは潜水艦の潜望鏡よりははるかに目立ち、銃撃により簡単に追い払われてしまうようになった。

最終的にドイツがたどり着いたのが「ゼーフント」である。「ビーベル」と同様な構造で、排水量15トン。だがこれも、残念ながらさしたる戦果をえられずに敗戦を迎える。

「マイアーレ」の殊勲

この種の小型水中兵器でもっとも華々しい戦果をものにしたのはイタリアの「マイアーレ」であろう。魚雷にアクアラングをつけた人間が乗って進むだけの、原始的というよりむしろお粗末な水中スクーターである。速力も3・5ノット、航続距離もわずか16キロ。魚雷の改造よりアクアラングの開発のほうが面倒だったほど

冒険心の固まりのような「ネーガー」だが、戦果をあげたのはごくわずかな期間だった。

「ネーガー」の運用風景。人との比較で船体のサイズがわかる。（写真提供＝潮書房）

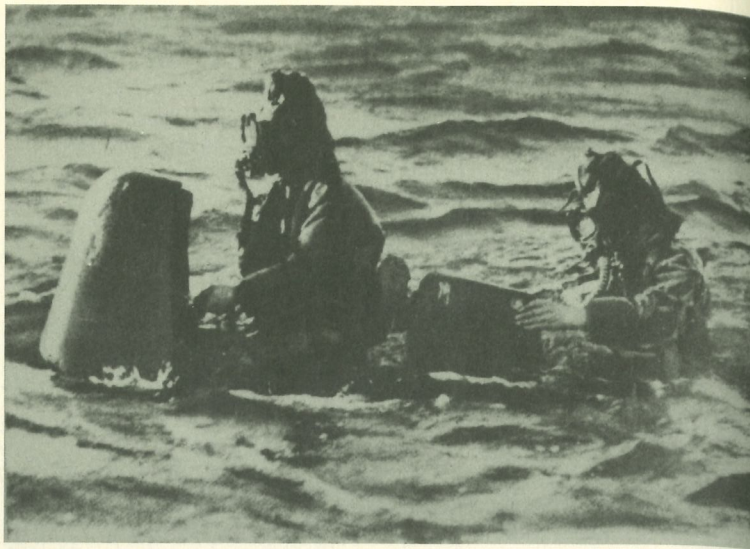
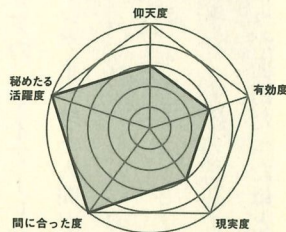
●「ネーガー」要目
重量：2.7t（水中）
全長：7.6m
全幅：0.53m
速度：4kt（水中）

である。
だが、これは恐るべき戦果をあげたのである。
1941年12月18日、イタリアの潜水艦「シーレ」が、アレクサンドリア港で3隻の「マイアーレ」を発進させた。資料によれば、ルイジ・デ・ラ・ペンネ伯爵指揮のもと、「マイアーレ」にまたがった乗員は防雷網を切断し、停泊中のイギリス戦艦「ヴァリアント」「クィーンエリザベス」とタンカーの艦底に500ポンド爆弾をしかけたのである。爆弾は見事爆発、3隻は大破撃沈、着底してしまった。
ペンネ伯爵以下6名の乗員は捕虜となったが、のちにペンネ伯爵は連合軍側に与(くみ)して同様の作戦に従事したそうである。余談ではあるが、アレクサンドリアでの戦艦撃沈に関する映画が存在する。DVDは発売されていないが、タイトルが『人間魚雷』。脚本はルイジ・ドランデ・ラ・ペンネとなっている。本人かどうかは諸説あるようだが、同一人物であるとすると、なかなかの大物である。なお、「マイアーレ」はほかに27隻の商船に損害を与えている。

●「マイアーレ」要目
重量：不明
全長：6.7m
全幅：0.53m
速度：3.5kt

仰天度
有効度
現実度
間に合った度
秘めたる活躍度

戦艦を攻撃する水中スクーター

イタリア人も大したものだが、やられたら、やり返すのがイギリス人である。イギリスも「マイアーレ」を手本に「チャリオット」という水中スクーターを開発する。目指す最初の目標は、ノルウェーのフィヨルドに身を隠すドイツ戦艦「ティルピッツ」である。「チャリオット」は「マイアーレ」に毛が生えたような代物でもちろん外洋航行能力はない。そこでトロール漁船を母艦に仕立て「ティルピッツ」に接近した。この作戦は荒天により失敗してしまったが、地中海では一応の戦果をあげている。
「チャリオット」と並行して開発が進められて

写真は「チャリオット」だが、見てのとおり「水中スクーター」以外の何者でもない。（写真＝潮書房）

●「チャリオット」要目
重量：1500kg
全長：7.65m
全幅：8m
魚雷速度：7.4km/h

いたのが「X艇」である。排水量27トンというから、「ゼーフント」と比べてもかなり大型である。ドイツが魚雷を使用したのに対して、イギリスは機雷を搭載した。そっと敵艦の艦底に近づき、機雷を放って脱出するのである。

「X5号」から「X10号」までがドイツ軍の洋上艦艇を攻撃するため出撃したが、ほとんどが事故、ないし反撃で失われている。だが、「X7」の発したとおぼしき機雷が「ティルピッツ」の主機を破壊して行動力を奪っている。

「X艇」はアジア方面でも使用され、「XE1」と「XE3」がシンガポール、セレター港内の日本海軍の重巡「妙高」「高雄」に果敢な攻撃をくわえる。「妙高」は無傷だったが、「高雄」は艦体に亀裂を生じさせる被害を受けた。

アメリカの水中破壊部隊

上記はどちらかというと、勇敢かつ、ユーモラスなエピソードだが、似たようなことをアメリカ軍が行なうと話は急にシリアスになる。

反攻に転じたアメリカ軍は幾多の上陸作戦を繰り返すが、いかに上陸前に艦砲射撃や予備爆撃で上陸地点を叩いても、すべての敵軍や小陣地を破壊できるわけでもない。

そこで急遽「水中破壊部隊」が組織される。泡の出ない特殊な呼吸器をつけたフロッグマンが主力攻撃の直前、ひっそりと上陸し、要地に時限爆弾を取りつけたり、水中で敵の重要施設を破壊したりする。いわゆる、特殊部隊の走りである。これにより、上陸作戦でのアメリカ軍の被害は激減したという。

公園のボートとさほど変わらない大きさの「X艇」だが、日本海軍の重巡に大損害を与えた。（写真提供＝潮書房）

水中破壊部隊はその後も存続を続け、機能を拡大。今日では、陸海空軍共同のSEALsと呼ばれる特殊部隊として活動を続けている。

●「X艇」要目
重量：29t（水中）
全長：15.7m
全幅：1.8m
速度：約5kt

危険すぎたロケット戦闘機

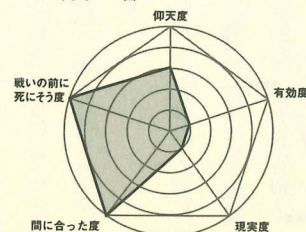
メッサーシュミットMe163「コメート」

絶滅品種!? ロケット戦闘機

145ページで紹介するメッサーシュミットMe262が世界初の「ジェット戦闘機」ならば、ここで紹介するメッサーシュミットMe163「コメート」は、同じく世界初の「ロケット戦闘機」である。しかし、現代において「ロケット戦闘機」は完全に血筋が絶えている。

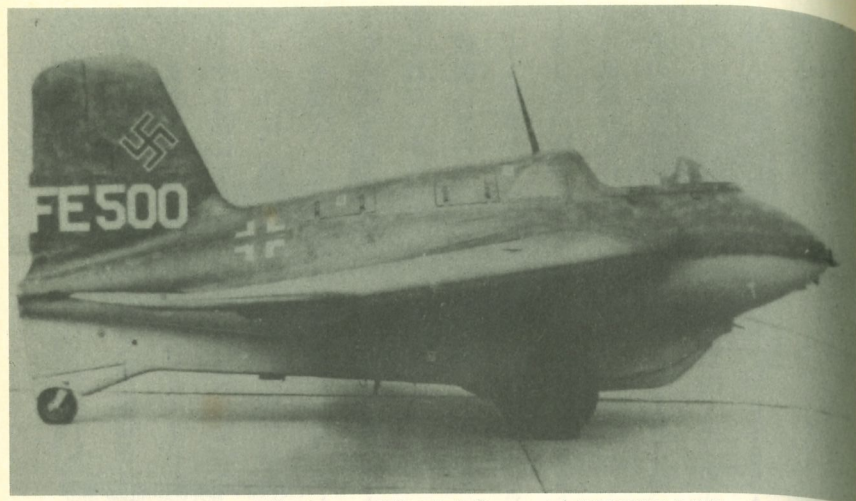
では、その始祖たるMe163は、どのような機体であったのだろうか。

●メッサーシュミットMe163「コメート」要目

全幅：9.32m
全長：5.85m
全高：3.6m
翼面積：18.5m²
最大重量：3885kg
発動機：ヴァルターHWK509A－1
最大速度：960km/h
実用上昇限度：12100m
航続時間：約8分
武装：30mm機関砲×2
乗員：1名

リピッシュ博士の執念 ロケット無尾翼機

まず、メッサーシュミットMe163がどうして誕生することになったのか。それをひとことで表わしてしまえば、アレキサンダー・リピッシュ博士の執念が結実したからといっても過言ではない。

話は1920年代にまでさかのぼる。すでにこの頃からドイツの航空産業界で「変わり者」として知られていたリピッシュ博士は、無尾翼機の研究設計を進めていた。この無尾翼機とは、文字どおり尾翼のない戦闘機のことで、彼はこの形態の戦闘機こそ高速を発揮するという持論を持っていた。この考えにもとづき、リピッシュ博士は「Delta」シリーズという無尾翼グライダーの設計を進め、実物を作っては実験と研究を進めていた。

そんな彼に朗報が舞い込んだのは、1938年。ドイツ空軍が彼に、新たな動力であるロケットエンジンを搭載した無尾翼実験機の開発を命じたのである。この時、すでにロケットエン

破格の給与にもかかわらず、あいつぐ事故のため「コメート」配属部隊の士気は、このうえなく低いものであった。（写真提供＝潮書房）

ジンは、フォン・ブラウンやヘルムート・ヴァルターなどの研究家によって実用化されており、また世界初のロケット機Ｈｅ１７６も、ハインケル社によって試験飛行を終えていた。リピッシュは、動力にヴァルターのロケットエンジンを選び、実験機の開発を開始した。ロケットならば、音速を超えることさえ可能だったかもしれないからだ。

研究はさらなる進化をとげる。リピッシュはドイツ空軍からの要請に従い、実験機「ＤＦＳ１９４」の開発に着手、この機体は１９３９年末に初飛行を行なった。

その後のテストにおいてＤＦＳ１９４は、５００キロ以上の最大速力を発揮し、ドイツ空軍はさらに彼にロケット戦闘機、Ｍｅ１６３Ａの開発を命じた。

「悪魔の卵」の苦闘

Ｍｅ１６３Ａは、ＤＦＳ１９４の発展型として試作された。その姿はより洗練され、まるで卵に翼を生やしたような形状となった。また、この時エンジンも強化され、滑空性能も向上している。ただし、車輪を収めるスペースがないために、離陸時には使い捨ての車輪を使い、着陸はソリによって行なうという独特の降着装置が取り入れられた。

１９４１年８月、試作３号機がエンジンを搭載して初飛行を行ない、Ｍｅ１６３Ａは実用化への一歩を踏み出した。

だが、ここからが苦難の連続だった。Ｍｅ１６３Ａはあまりに扱いにくい機体だったからだ。

そもそもの話として、エンジンが危険すぎた。

三菱局地戦闘機「秋水」

コメートの資料をもとに、日本陸海軍が開発した秋水にも、配属部隊司令が「神のお告げ」によって基地を決めるなど、なんともいえないエピソードが存在する……。

リピッシュの選んだヴァルター・エンジンは水酸化ヒドラジン（Ｃ液）と過酸化水素（Ｔ液）を混ぜ合わせて動力を生み出すという設計だったが、双方ともにかなり危険な液体燃料だった。たしかにこのロケットは時速８００キロ以上という、どんな戦闘機でも追いつけない高速性能をＭｅ１６３Ａに発揮させたが、もしエンジンから燃料が漏れれば一瞬で爆発、もしくは搭乗員を溶かしてしまう。

また、着陸時には車輪を使わずソリを使うためかなりの訓練が必要となり、当然のように着陸時の事故も多発した。こうした悪夢のような状況に対し、テストパイロットたちはＭｅ１６３を「悪魔の卵」と称したという。

Ｍｅ１６３に関する苦難は、Ｍｅ１６３Ａを再設計した、より実戦的なＭｅ１６３Ｂが実戦

配備された1944年5月以降も続いた。さらにMe163は高速が最大の長所だったわけだが、あまりに高速すぎるため、まともに敵機を射撃することすら困難だったという。
　また、ロケット機の必然として、燃焼時間（航続距離）はわずか数分と極端に短く、敵重爆に配置場所を迂回されてしまえばそれで終わりというあまりに情けない現実もあった。こうした事情により、Me163Bを装備した第400戦闘航空団は、終戦までにたった7機しか撃墜スコアを稼ぐことができなかった。
　結局、メッサーシュミットMe163は、常識的に考えれば「戦時にすら」許容しかねる、恐るべき兵器だったのだ。その事実は、現代までにロケット戦闘機が生き残っていないことからも理解できるだろう。

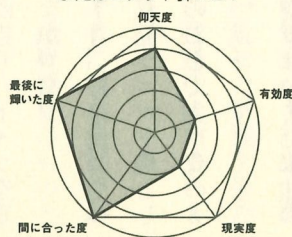
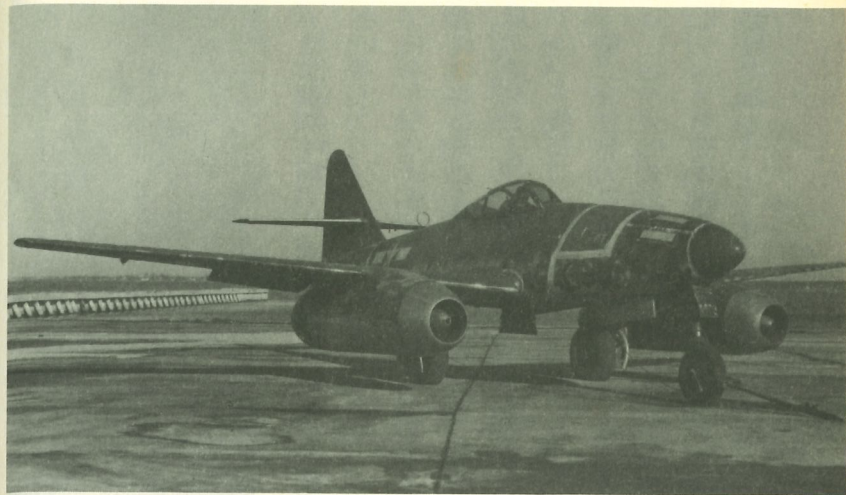
「秋水」の憂鬱

佐原晃

秋水は、メッサーシュミット社のロケット迎撃機Me163コメートの資料をもとに、日本で開発した機体である。
　開発スタート時、ドイツで資料を調達した厳谷中佐は簡単な資料のみを持参して先に帰国したものの、主な資料を運んでいた「伊二九」潜水艦は米国の潜水艦に撃沈されてしまった。
　このため外観とエンジンは日本の技術で復元できたものの、完成機には外からはわからない問題が山積みであった。
　たとえば、1号機の墜落の原因になった燃料タンクの不良。技術者には、機体が急速上昇すれば内部がどうなるかという想像が働かなかったのだろう。
　零戦の座席を流用し、座席に緩衝器を設けなかったことも着陸時に事故を引き起こす要因となったが、これは着陸時の衝撃や速度が日本人技術者の常識の範疇外だったからである。結局、コメートは扱いづらい機体であることを日本でも証明する結果となった。

ドイツ空軍の傑作ジェット機
メッサーシュミットMe262「シュヴァルベ」

　現代において、ジェット機は珍しい存在ではない。
　日本人ならば誰もが、上空を飛ぶジェット旅客機の姿を見たことはあるだろうし、航空自衛隊の迎撃および支援戦闘機も、いまではすべてジェット機だ。
　第二次世界大戦の末期にドイツ空軍が実戦投入したメッサーシュミットMe262は、そんなジェット機の始祖、世界初の実用ジェット戦闘機である。

●メッサーシュミットMe262「シュヴァルベ」要目
全幅：12.5m
全長：10.58m
全高：3.83m
翼面積：21.7m²
自重：3800kg
最大積載量：6400kg
発動機：ユンカースJumo004B-1×2
最大速度：870km/h
実用上昇限度：11450m
航続距離：1050km
武装：30mm機関砲×4
　　またはロケット弾×24

　ドイツの大手航空機メーカーであるメッサーシュミット社において、Me262の開発が開始されたのは、第二次世界大戦が勃発した1939年の夏のことだった。すでにこの時、メッ

ガーランド中将が指揮した第44戦闘航空団などで活躍したMe262は、ドイツ空軍に最後の栄光をもたらした。(写真提供＝潮書房)

サーシュミット社とライバルの関係にあるハインケル社が、世界初のジェット機He178の初飛行を成功させ、さらに純粋なジェット戦闘機たるHe280の開発を開始していたが、ハインケル技師のナチス嫌いが祟り、ドイツ空軍にはまったく注目されていなかった。

その3年後の1942年7月、紆余曲折をへてMe262試作3号機は双発ジェット機として初飛行に成功、ようやくのことで実用化のメドをつけた。

それでもこの間、ドイツ空軍はいまだ未知のジェットエンジンを載せたMe262に期待は寄せていなかった。しかし、戦闘機の配備計画と実行の責任を負っていた、戦闘機総監アドルフ・ガーランド中将がこれに試乗した後は、空軍の態度がガラリと変わり、彼らはこのジェット戦闘機の高性能にほれ込んだ。

たしかに、レシプロ機をはるかに超える高速を発揮し、良好な操縦性を持つMe262はそう見込まれてしかるべき性能の機体だった。ガーランドが試乗の後にMe262の乗り心地を指して「まるで天使に押されているような」と語ったことが、そのなによりの証拠だろう。

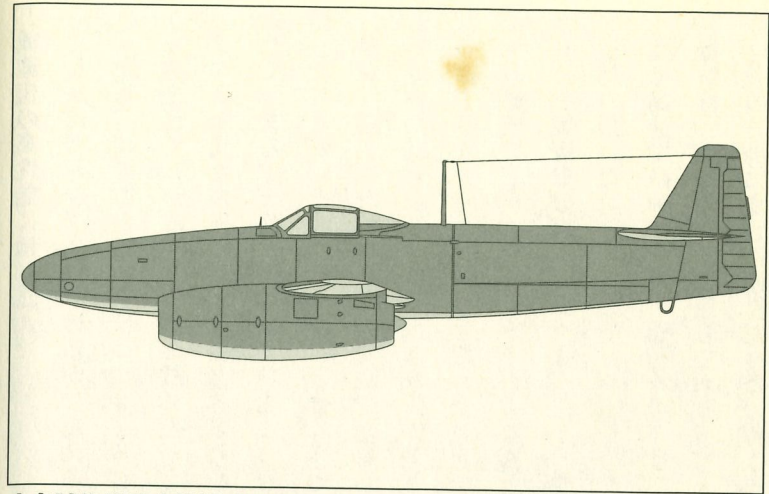
だが、遅まきながらもその実力を認められはじめていたMe262に、大きな影が差し込んだのは1944年5月のことだった。ナチスドイツの総統アドルフ・ヒトラーが、なんとMe262を戦闘爆撃機に改良せよ、という命令を下したのだった。

彼は高速で敵陣に接近、爆弾を投下する「電撃爆撃機」を以前から夢想しており、Me262はその立場にまさに適役だった。ガーランドをはじめとする関係者はこれに猛反対し、高速のジェット戦闘機は迎撃任務にこそふさわしいことを説いたが、ヒトラーはMe262の量産数20機につき1機のみ戦闘機として生産することをかろうじて認めただけだった。

1944年8月、すでに前年末から編成が開始されたMe262実験隊が最初の撃墜を果たしたのを皮切りに、ジェット戦闘機Me262の戦いははじまった。

だが、すでにノルマンディーには米英軍が上陸、ドイツ上空の制空権は、敵戦闘機のものとなっていた……。

奮戦、ジェット戦闘機部隊！

こうして第二次世界大戦に「間に合った兵器」として、そしてナチスドイツの航空技術の先進

中島試作特殊攻撃機「橘花」
こちらは日本海軍がコピーを試みた「橘花」。しかし、実用化することなく敗戦を迎えた。

性を体現する機体として登場したＭｅ２６２だったが、その戦いぶりは苦闘の連続だった。

まず、Ｍｅ２６２は乗りこなすまでがたいへんな機体だった。なにしろエンジンはいまだ不安定なジェットエンジン。故障も多く寿命も短く、パイロットにしてみれば危険極まりないしろものだった。また、単純にいってＭｅ２６２はあまりに「速すぎ」た。当時のレシプロ戦闘機に乗りなれた彼らにしてみれば、高性能すぎたのだった。

また、Ｍｅ２６２は運用にも苦労が多かった。ジェットエンジンの整備は困難だったし、加速が悪いため、長大な滑走路が必要だった。そしてなにより、すでに制空権は米英軍が支配しており、ドイツ軍の滑走路は爆撃によって破壊されつつあった。

そんな苦労のなかでも、Ｍｅ２６２を装備する少数のジェット戦闘機部隊は、雲霞のごとく迫り来る米英軍重爆隊に対し、迎撃を行なった。Ｍｅ２６２はやはり敵機との戦闘においても「速すぎ」たため、攻撃にすらも危険がともなった。しかし、歴戦のパイロットたちはしだいにＭｅ２６２を乗りこなし、着実にスコアを稼いでいった。

なかでも、前述のアドルフ・ガーランド中将が率いた第44戦闘航空団（ＪＶ44）は、ガーランドをはじめとするエースばかりを集めた文字どおりの精鋭部隊であり、ロケット弾を用いた集団戦法で、大戦果をあげていた。

また、機首にレーダーを仕込んだ夜間戦闘機型Ｍｅ２６２を装備した部隊も出現、英軍の高速双発戦闘機モスキートに完勝を果たした。ヒトラーのごり押しで編成された戦闘爆撃機部隊も、大損害を受けながらも西部戦線での地上支援に活躍した。このほかにも、偵察型や大口径砲搭載型も実戦に投入され、さらにメッサーシュミット社においては、多数の発展型の開発が進んでいた。

しかし、こうした活躍も、本土に迫り来る連合軍の前では最後のあだ花でしかなかった。Ｍｅ２６２部隊はドイツ降伏と同時に各地で戦闘を停止、その敢闘に幕を降ろした。だが、Ｍｅ２６２はその最後の悪戦苦闘によって、第二次世界大戦における最後の栄光ある秘密兵器として、歴史に名を刻んだのである。

なお、大戦末期、日本陸海軍はこのＭｅ２６２を原型として、日本で最初のジェット機「橘花」の初飛行を成功させている。

もし、日本海軍の手に「Me262」が渡っていたなら!?

文・内田弘樹
イラスト・松田大秀

Me262は大戦末期のドイツ軍において、戦局逆転こそかなわなかったが連合軍に一矢を報いる活躍を残すことができた。同盟国の日本も未完成ジェット攻撃機「橘花」として、これのライセンス生産をめざしたものの、残念ながら実用化できなかった。しかし、日本海軍が「購入」していたらどうなっていただろうか？　ジェットの前に、対抗できるアメリカ戦闘機など……！

1944年（昭和19年）10月、台湾沖。米太平洋艦隊第3艦隊第38任務部隊第1群。

「方位2-4に敵機群！　数は20！」

「艦隊防空任務（CAP）のF6F-5N（夜戦）、発艦開始」

すでに夕闇は完全に落ちていたが、第38任務部隊第1群の戦いは始まったばかりだった。彼らはこの時、レイテ侵攻作戦の前段階として台湾・沖縄へと来襲。その当然の結果として、日本機による攻撃を受けているのだった。

むろん、空母16隻という圧倒的な戦力を誇る第38任務部隊にとって、日本機の攻撃は恐れるべきほどのものではなかった。現在、第38任務部隊第1群の旗艦、空母「ヨークタウン」のCICでも、それは完全に実証されていた。日本機の攻撃はこのCICからの防空システム管制により、各個撃破されつつあった。

そう、少なくともこの瞬間までは。

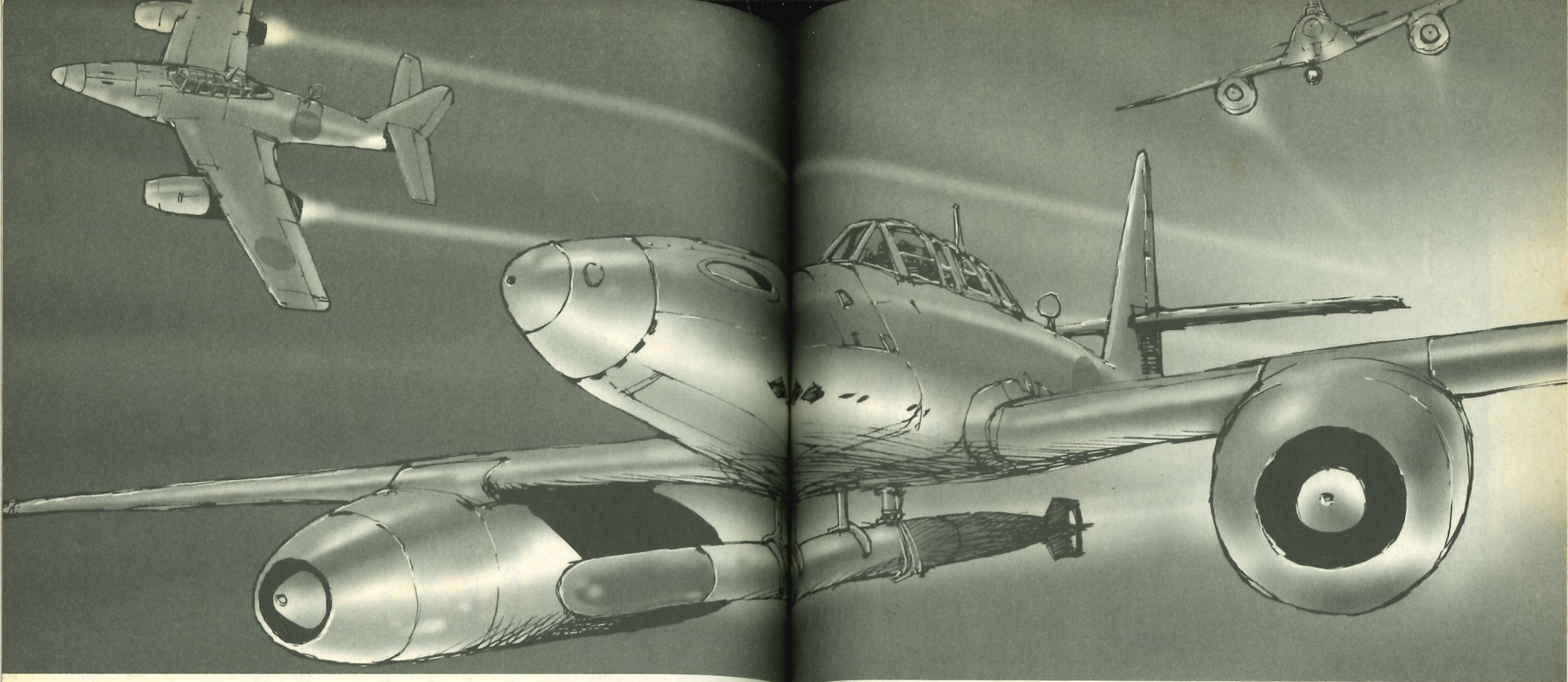
「なんだ、これは——」

始まりはレーダー員の呻（うめ）き声だった。CIC統制官が彼に声をかけようとした瞬間、レーダー員は絶叫した。

「方位3-3-1に新たな敵編隊！　数は40！　全艦に警報を！　速い——とんでもなく速いぞ、こいつらは！」

＊＊＊

敵夜戦の迎撃から逃れた瞬間、江草隆繁中佐の内心に愉悦（ゆえつ）が沸かなかったといえば嘘になる。これまでは天敵だったF6Fヘルキャットを、夜戦とはいえ、ぶっちぎりの速さで振りきったのだ。半年前と比べればえらい違いだ。マリアナにこの機体があれば、生き残れた奴も多かっただろうに。

江草が感傷に浸っていたのはわずか数秒だった。今、後方に続く42機の雷撃隊——海軍第七二四航空隊の指揮官である彼は命じた。

「このまま敵輪形陣を突破する！　低空をそのまま突っ切るぞ！　アメ公どもにジェットの力を見せてやれ！」

そういって、彼は自分が操縦する新鋭機——ドイツから直輸入されたジェット戦闘機Ｍｅ２６２シュヴァルベの操縦桿を傾け、機体を低空へと導いた。

＊＊＊

新たな、そして高速の敵機群の出現に、空母「ヨークタウン」のＣＩＣは大混乱となっていた。Ｆ６Ｆ夜戦による迎撃は、すでに簡単に振りきられている。さらに驚くべきことに、Ｆ６Ｆとの無線交信によると、この敵機群はドイツで姿を現わしたというジェット機らしい。

ＣＩＣ統制官はその混乱のなか、必死に冷静さを保とうとしていた。彼の眼前の戦術ボードには、いまや第1群の輪形陣に切り込もうとしている新手の敵機群がプロットされている。彼は焦燥を覚えながら思っていた。なんでドイツのジェットがこんなところに！

＊＊＊

彼の疑問に答えるならば、事情は以下のようになる。答えは簡単、それを望んだ男が日本にいたからだった。その男の名は源田実。彼はマリアナ沖海戦後、Ｔ部隊という夜間雷撃隊を編成するために、新鋭機を欲していたのだった。彼はその新鋭機をドイツに求めた。幸運にもこの時、１９４２年にお

けるドイツ軍の第二次モスクワ侵攻によって崩壊したソ連を介したドイツ——満州へのシベリア鉄道輸送はすでに開通しており、新鋭機の輸入は金さえ工面できれば可能だった。元軍令部員であった源田には、それを可能とするだけの実績とコネがあった。

＊　＊　＊

CIC統制官は輪形陣を構成する多数の護衛艦に射撃開始を命じた。VT信管とレーダー射撃を併用した対空射撃ならば、彼らの突進を止められるはずだった。しかし、とも思う。なんで日本軍は、わざわざ整備に手間のかかるジェットを？

彼の疑問は、直後に氷解した。CICオペレーターのひとりが叫びを上げる。

「だめです！　敵機群が速すぎて、レーダー射撃の効果がありません！」

江草は半ば高笑いしながら、低空を這うように輪形陣を突破した。たしかに笑える情景だった。あの濃密な対空砲火が、すべて自分の後ろで爆発している！

「よーし、そのまま……よーい、てっ！」

江草がそう命じた瞬間、機首に腹ばいになっている航法員がレバーを引き、彼のMe262は雷撃を放った。「エセックス」級空母に問答無用に迫る10本以上のドイツ製の音響誘導魚雷。その光景に口を歪めながら江草は思った。源田サン、あんたの考案した「音速雷撃隊」のフレーズ、まちがっちゃいなさそうですぜ。

最強の高々度爆撃機
ボーイングB29「スーパーフォートレス」

第二次大戦中の最大の爆撃機であり、戦中派の日本人にとって、恐怖の象徴ともいうべき存在であったB29。しかし、戦果をあげはじめるまでにこの機ほどの労苦を強いられた機体も珍しい。

おびただしい犠牲

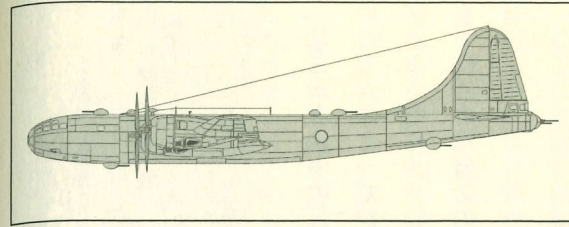
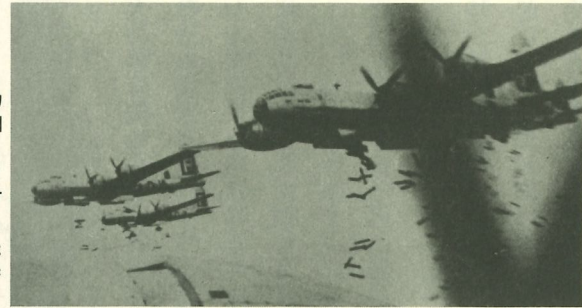
初飛行は1942年。試作機が飛び立ったもののあっさり事故を起こして消失している。さらに、2年をかけて完成はさせたものの、日本国内を攻撃しようにも適当な発進基地がない。

そこで中国四川省、成都を出撃地として設定。ヨーロッパ経由でヒマラヤ越えをしてガソリンを運び込むことを考えたが、ヒマラヤを越えられる輸送機は存在しない。しかたなくB29の爆

●ボーイングB29「スーパーフォートレス」要目

全幅：43.05m
全長：30.18m
全高：9.02m
自重：32.4t
最大重量：61.2t
エンジン：ライトR-3350-57×4
最大速度：576km/h
航続距離：5,200km（爆弾4.5t搭載時）
武装：20mm機銃×1、12.7mm機銃×10、爆弾9000kg（最大）
乗員：11名

仰天度
有効度
現実度
間に合った度
これぞ秘密兵器度

日本人にとっては市民を無差別に殺害した悪魔の飛行機という印象が強い。

ルメイの「低高度、無差別爆撃」は成功し、数多くの日本国民を殺傷せしめた。これに対し、最後まで日本防空部隊は有効な反撃手段をとることができなかった……。（写真提供＝潮書房）

弾槽に燃料タンクを搭載して、何往復もして成都にガソリン、資材を集積した。

こうして、やっと日本国内にB29を送り込む準備が整ったのだ。

日本初爆撃時のB29は、1944年6月16日に中国を出撃、北九州八幡製鉄所を空襲したが、結果は目を覆うような有様であった。

出撃した68機中、機体の不調で21機が引き返し、日本上空に達したものは47機。夜間戦闘機の迎撃を受けて、爆弾を捨てて逃げ帰るもの多数。7機が撃墜され、かろうじて1機が投弾しているが、当然外れている。

これではとても使い物にならない。そこでアメリカ軍は、発進基地としてマリアナ諸島を狙ってきた。マリアナからなら日本全土を攻撃範囲に収められるからだ。

マリアナ陥落後、米軍はもくろみどおり日本本土空襲を開始したが、主戦法は高々度からの軍需工場に対する昼間精密爆撃であった。B29は最新の照準システムを搭載していたが、この攻撃効果は疑わしいものであった。日本の天候の変化は激しい。とくに冬季は上空をジェット気流が吹き荒れ、このなかを飛ぶB29の対地速度は時速800キロを超えた。投下が0・1秒遅れても爆弾はあさっての位置に落ちる。投下された爆弾も風に振られる。これでは外れて当たり前である。

運用の問題もあった。マリアナ諸島には約1000機のB29が配備されたが、小島であるため、仮に滑走路が10本あって、1分に1機が飛び立ったとしても、全機発進するには1時間半かかる。結果、小機数ずつが日本本土上空に達して迎撃を受け、各個撃破される。

護衛戦闘機をつけたいところだが、B29に随伴できるような長距離戦闘機など存在しない。

そこで急遽（きゅうきょ）、米軍は硫黄島の確保を強行。B29の緊急着陸地として利用すると同時に、護衛戦闘機の発進基地として利用するためである。同島攻略に際しての被害は甚大で、アメリカ軍の死傷者が日本軍のそれを上回った。

だが、被害に見あうだけの価値は充分にあった。硫黄島に不時着したB29はじつに1000機を超える。硫黄島がなければすべてが海の藻屑と化していたかもしれないのだ。

そして、硫黄島を発進したP51は日本軍の戦闘機を追い払い、日本本土の防空はとどめを刺されたのだ。

戦術変更で大戦果

しかし、その後もB29による日本本土攻撃は不調続きで、結果、ヘイウッド・ハンセル准将は更迭され、後任にカーチス・ルメイ少将が就任する。

ルメイが実施したのが「低高度、焼夷弾による都市攻撃」であった。

事前に攻撃範囲を確定し、先行爆撃機により周囲をぐるりと輪を描くように火災の列を作る。そしてそのなかの燃えていない場所めがけて、適当に焼夷弾をばらまくのである。

戦中派の人たちの文章に「探照灯のなかにB29が浮かび上がった」との描写を見かけるが、これはB29が人の目に見えるほど低い高度を飛んでいたためだ。1万メートルもの高々度を飛んでいたら、B29がいかに巨大だとしても肉眼で捉えられない。

低高度飛行にも理由があって、いかな高性能機でも安全確保のため限界に近い高度を飛行すれば燃費は悪くなるし、爆弾搭載量も減らさなければならない。だが、ある程度、高度を下げればこれらの問題をクリアできるのだ。

ちなみに低高度爆撃の命令が下された時、パイロット、クルーからは大反発を受けた。日本軍戦闘機の迎撃と対空砲を恐れたのである。だが、結果はご存じのとおりで、B29はやっとまともな戦果をあげられるようになった。

高々度精密爆撃を目的として開発されたB29であったが、本来の目的を放棄してはじめて実用的な機体となったのは皮肉としかいいようがない。

嫌われた4発機

青山智樹

B29はもっとも成功した大型爆撃機であり、他国にはこれに匹敵するような爆撃機はない。各国例外なく4発機が軍部に嫌われたためである。

日本の一式陸攻も4発機として計画されたが、海軍のごり押しにより双発機として完成している。とはいうものの、一式陸攻は、それまでの単列星形エンジンを複列にしただけで、ひとつのナセルに2つの旧式エンジンを詰め込んだ機体である。

B29の前身であるB17も、欧州の様子がきな臭いので渋々採用された機体だ。ナチスの勃興がなければ量産されなかっただろう。アメリカのB24はB17より航続力が優れており、ドイツ奥地の攻撃に活躍したが、いささか機体強度に難点があり「空飛ぶ棺桶」と揶揄された。また、B29が失敗したときの保険としてB32が作られていたが、生産は少数にとどまった。

イギリスのアブロ「ランカスター」爆撃機は、双発機を4発に再設計した機体で10トン爆弾が搭載可能な大型機であったが、航続力も短く、対空機銃に難点があり、被害が続出したため、のちに夜間爆撃専門に切りかえられた。

ドイツ軍は開戦を見越してフォッケウルフ「コンドル」を爆撃機に改造可能な旅客機として開発していた。しかし、使ってみると、しょせんは旅客機の改造機、性能的に満足がいくものではなく、すぐに洋上の哨戒任務に回されている。皮肉にも、こちらでは大活躍したそうである。

しかしながら、ドイツは大型爆撃機を諦めない。しかも、軍はなんとしても双発にしろという。仕方なくハインケル社ではV型水冷エンジンを2つ直結してナセルに押し込んだ。ハインケル１１７である。結果は無惨なもので、火災が頻発し、戦闘で失われたものより、事故での損失のほうが多かった。のちに4発に設計し直されるが、空軍は終戦直前まで量産を認めなかった。日本の「連山」は、実機が完成したもののこれまた終戦を迎える。

こちらは戦後になるがソ連のＴｕ4がある。通称ボーイングスキー。ソビエトが領内に不時着したB29をコピーしたものといわれている。

結局、この話もB29の優秀性を示している例にすぎず、大戦中、使い物になった4発爆撃機はB29だけであったのだった。

海を越えるジェット&ロケット弾

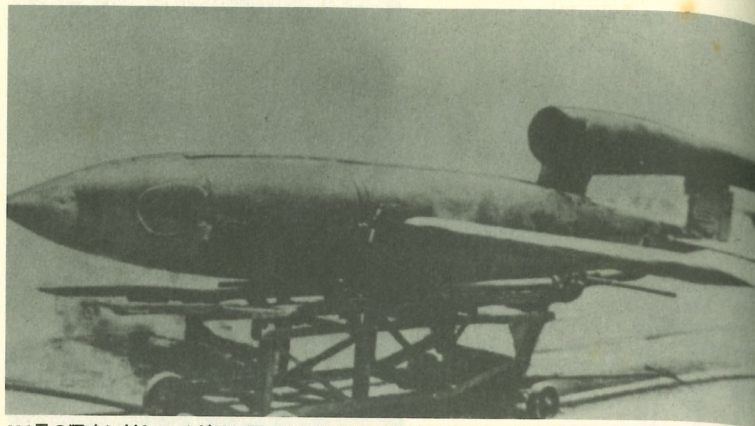
ドイツの弾道弾&ミサイル

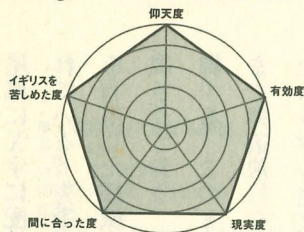
フィゼラーFi103巡航ミサイル「V1号」

ドイツの報復兵器V1号は本来、1939年にフィゼラー社が陸軍に提案したFi103という名の飛行爆弾であった。

V1号はペーネミュンデ実験場で開発が進められ、1942年に制式採用となって、オーストリア近くの巨大地下工場で8000機以上におよぶ量産が行なわれた。

V1号は機体尾部上部に配置されたアルグスAs014パルスジェットエンジンにより、高度2500メートルを時速640キロの巡航速度で最長330キロを飛行し、時速800キロの最大速度でロンドンの市街へと落下する。また、弾頭には1トンの爆弾が使用されていた。

V1号の基地は、ドイツ占領下のフランス各地に建設され、液体火薬式のカタパルトを使用して発射されていた。それ以外にも、ハインケルHe111爆撃機などからの空中発射も試みられている。

V1号の猛攻に対し、イギリス国民と軍は気丈な抵抗を続けた。（写真提供＝潮書房）

●フィゼラーFi103巡航ミサイル「V1号」要目
全長：8.32m、全幅：5.72m、全高：1.47m、全備重量：2250kg、発動機：アルグスAs014パルスジェット、巡航速度：645km/h、落下速度：800km/h、最大射程距離：330km、弾頭重量：1000kg。

実戦にはノルマンディー上陸作戦への報復として、1944年の6月からV1号によるロンドン市街攻撃が開始された。防衛のためにイギリス軍は、多数の阻塞気球や迎撃機、重火砲や対空砲を投入することとなり、多くの人員がこの迎撃に振り向けられたのだった。

A4弾道ロケット「V2号」

ドイツ陸軍は、1929年頃からウェルナー・フォン・ブラウンを中心に開発していた液体燃料ロケットに目をつけ、36年にはペーネミュンデ実験場でA4ロケットとして開発が開始された。

弾体は長大な流線型で、

仰天度
有効度
現実度
間に合った度
イギリス打つ手なし！度

●A4弾道ロケット「V2号」要目
全長：14.03m、全幅：3.5m、最大弾体直径：1.68m、全備重量：12870kg、発動機：BMW液体燃料ロケット、最大速度：5760km/h、到達高度：96000m、最大射程距離：330km、弾頭重量：1000kg

「V2号」のおそるべき威力をもってしても、ドイツの戦局逆転はかなわなかった。（写真提供＝潮書房）

尾部にX字に配置された4枚の安定板が配置されている。先端には1トンの弾頭と、ジャイロを利用した機械式のアナログコンピュータが搭載されており、これにより安定板後縁の舵を制御する。このミサイルは、8万メートルの高度まで弾道飛行を行ないながら、300キロ離れたロンドン市街に超音速で落下する。さらに、V1号とは違い、イギリス軍は直接この攻撃を防ぐ手立てを持たなかった。

　発射中隊は運搬車と発射機、指揮車、燃料輸送車と兵員輸送車などから構成され、ヨーロッパ各地にゲリラ的に移動して、4〜6時間で発射シークエンスを完了する。こうして連合軍の拠点に容赦ない攻撃を続けるのである。

　V2号の生産拠点はオーストリア近郊の地下に建設され、5000発以上にもおよぶミサイルが生産された。後期型のミサイルには無線誘導装置が搭載され、専用の地下要塞の建設計画や、潜水運荷筒を利用した水中発射計画も存在している。

X4空対空ミサイルの搭載実験も行なわれたユンカースJu88。爆撃機としてはもちろん、夜間戦闘機としても活躍した。(Photo/UKG)

ルールシュタール X4空対空ミサイル

　1943年から、ルールシュタール社でクラマー博士が開発していた戦闘機搭載用空対空ミサイル。戦闘機の主翼下に装備されたETC70ラックにより懸吊される。

　弾体中央には後退翼の4枚の主翼、尾部には4枚の補助翼が十字型に配置されている。また、尾部にロケットモーターが搭載されて

●X4空対空ミサイル要目
全長：2m
全幅：0.725m
最大弾体直径：0.222m
重量：60kg
発動機：BMW109-548ロケットモーター
最大速度：893km/h
最大射程距離：3200m
弾頭重量：20kg

おり、音速に近い速度で飛翔する。

弾体は、戦闘機からの有線コントロールにより誘導される。そのため主翼2枚の両端には制御ワイヤーを収納したポッドが取りつけられている。戦闘機のコクピットには操作用のジョイスティックが設置されており、ここからの操作で補助翼を可動させ、制御する。

ミサイルの先端には20キロの弾頭と触発信管、音響信管が内蔵されており、敵機の接近を音で感知して爆発、周囲の敵機を破壊する。最大射程距離は、3・5キロであった。

44年8月から、フォッケウルフFw190やユンカースJu88に搭載されて試験が実施されている。

ルールシュタール X7ロートカプヒェン 対戦車ミサイル

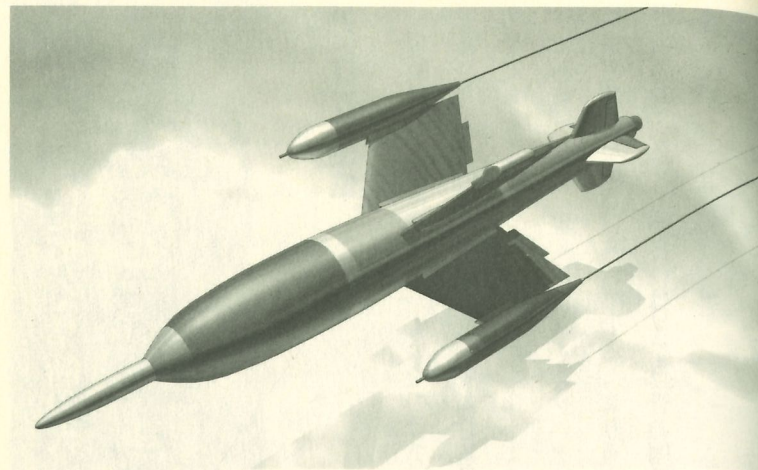
ルールシュタール社では、1943年よりクラマー博士が中心となり、X7ロートカプヒェン（赤ずきん）対戦車ミサイルを開発していた。

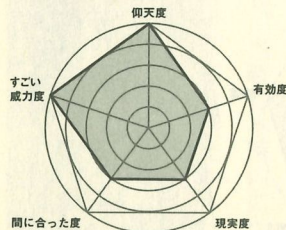
これは、105ミリ榴弾砲を改造したランチャーより発射される誘導式のミサイルであった。

砲弾型の弾体左右に前進翼の主翼があり、その両端には誘導ワイヤーを収納したポッドが取りつけられている。弾体尾部には下方に向けて、垂直安定板が取りつけられ、その先端の制御機構を可動させて飛行を制御する。

弾頭には2・5キロの特殊成形炸薬と触発性信管が配置されている。この炸薬はモンロー効果を利用したもので、発生したメタルジェットで敵戦車の装甲を貫通する。弾体尾部には推力68キロの固体燃料ロケットが搭載されている。

照準装置には、ビデオカメラを利用した電子光学式照準装置、または赤外線照準装置を使用していた。

最大射程距離は1200メートルで、対戦車ミサイルとしてだけでなく、地対空ミサイルとしてもテストされていたようだ。

実用化されていれば、ロートカプヒェン（赤ずきん）という名前とは裏はらに恐ろしい威力を発揮したに違いない。

●X7ロートカプヒェン 対戦車ミサイル要目
全長：950㎜、全幅：600㎜、最大弾体直径：150㎜、重量：9㎏、発動機：BMW109-506ロケットモーター、最大射程距離：1200m、弾頭重量：2.5㎏。

各国の原子爆弾計画

世界を終末に導く禁断の火

アメリカの優位

理論研究で第一線を走っていたのはアメリカであったように思われがちだ。相対性理論の創始者であるアインシュタインが亡命しているからである。だが、現実にはアインシュタインは原爆開発から遠ざけられている（より重大事項であるレーダー、あるいはVT信管の開発に従事していたといわれている）。

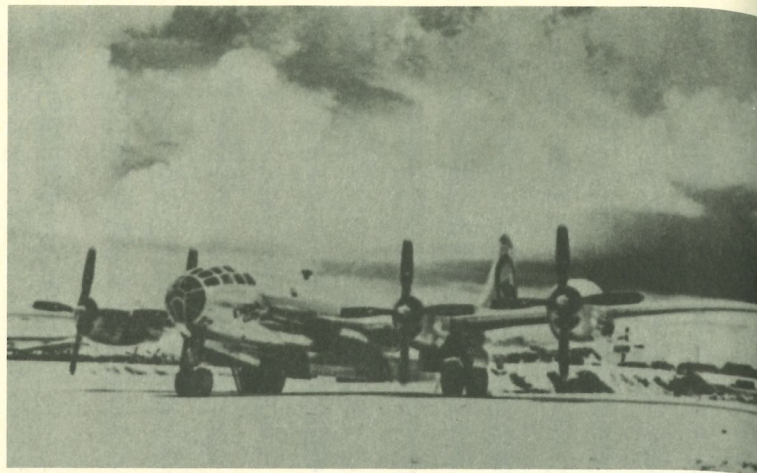
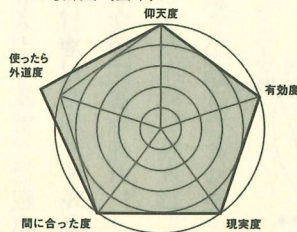
また、アインシュタインはもともとはドイツ生まれであるため、その業績はドイツでも知られており、核開発の情報は世界中が共有していたといっても過言ではない。

イギリスもまたG・P・トムソンの報告を受け、カナダ、モントリオールに研究所を設立。独自に「チューブアロイ計画」の名のもとに原子力開発を行なっていたが、これはアメリカとの共同開発という名目で「マンハッタン計画」に吸収されてしまう。ちなみにソビエトは完全に蚊帳（かや）の外に置かれた。とくに終戦が近づき、連合国の戦勝が確実なものとなると、アメリカは原爆の技術がソビエトに漏れないように徹底した情報統制をしく。

また日本でも理論はある程度確立され、仁科芳雄のもと、湯川秀樹、朝永振一郎らが原爆開発に従事していた。しかし、当時日本国内にウラン鉱山は発見されておらず、鉱山開発から始めなければならなかった。そこに軍部の理解不足が重なって充分な研究資材も与えられず、爆弾どころか、原子炉の開発もままならなかった。

●各国の原爆開発計画名

マンハッタン計画（アメリカ）
チューブアロイ計画（イギリス）
二号計画（日本）

仰天度
有効度
現実度
間に合った度
使ったら外道度

テニアン基地で発進を待つB29エノラゲイ。この狂気の爆弾を放った悪魔の機体は、いまもスミソニアン博物館でその姿をさらしている。（写真提供＝潮書房）

ドイツの理論はトップだが

当初、原爆理論研究のトップに立っていたのは本場ドイツのウェルナー・ハイゼンベルクであった。早くからウランの有用性に気づいたナチス・ドイツは併合したチェコ領内ヨアヒムシュタールのウラニウム鉱山に精製工場を建設、稼働させていた。

また、原爆の製造にはウランよりプルトニウムのほうが有効であるが、プルトニウムは原子炉がないと作ることができない。アメリカは1942年に世界初の原子炉を稼動させているが、これは気体冷却式の原始的な実験炉であった。

一方、ドイツもまた、重水と呼ばれる特殊な水を利用した原子炉を複数建設している。こちらは気体冷却式より高効率であり、高い濃度のプルトニウムを取り出すことが可能であった。

しかしながら、これはOSS（戦略事務局）、のちのCIAの知るところになり、ドイツ国内の重水工場は完膚なきまでに破壊され、かろうじて運び出された重水も破壊工作員の手により輸送コンテナごと爆破されてしまう。

そのうえ、ハイゼンベルグ自身も戦後の平和利用を優先すべきとして、原爆の開発には懐疑的であり、ヒトラーも興味を示さなかったため、爆弾開発は進まなかった。ハイゼンベルグは意図的に原爆開発を忌避した、ともいわれている。

いずれにせよ、敗戦を目前にしてドイツは核開発を断念する。ドイツが保有していた酸化ウラン550キロは「U234」潜水艦によって日本に移送される運びとなるが、5月8日のドイツ降伏により、「U234」はアメリカ軍に

投降。同艦は大西洋で接収され、ポーツマスに回航されて搭載していたウランもアメリカ軍の手に渡る。これが広島に対し使用されたのではないかともいわれているが、いまも判然としていない。

戦後、アメリカ軍はドイツの核開発施設を調査したあと、徹底的に破壊した。ソビエトに渡さないためである。もっとも、ドイツの核施設は調査報告によれば「お粗末きわまりない」ものであったという。

科学者の群像

核は人類の作り出した恐るべき業火だ。最後にこの焔（ほのお）を作り出した人々の言葉を述べ、項を終わりたい。

「おれたちはどいつもこいつもくそったれだ」――ロバート・オッペンハイマー。マンハッタン計画の科学者側責任者。のちに核開発反対運動に参加し、公職を追放される。

「気にするな。続けたまえ」――仁科芳雄は、「この戦争中に爆弾は間に合いません」と進言した部下にこう答えている。戦後、仁科は医薬品製造で多数の人々の命を助ける。

「嘘だ。信じられない」――ウェルナー・ハイゼンベルク。民間人であったハイゼンベルクは戦後、戦犯とされることもなく、ドイツのマックス・プランク物理学研究所長に就任。高名な科学者であるので少なくない伝記があるものの、戦中の彼について触れられたものはわずかである。

爆弾に比べて遅れた動燃開発

青山智樹

第二次世界大戦中、原子爆弾は各国でさかんに研究されていた。

だが、原子力の動力としての開発はほとんど顧みられず、動燃について言及したのはドイツのオッペンハイマーくらいで、ほかはすべて爆弾開発であった。

最初期の原子炉の構造は、燃料となるウランと、減速材と呼ばれる黒鉛などのブロックを積み上げられて作られた。「炉」というぐらいであるから高熱が発生する。この熱を外部に取り出すため炭酸ガスを循環させ、タービンを回すのである。

もちろん、冷却してやらないと原子炉内が高熱になりすぎてメルトダウンが起きる（冷却剤には現在、おもに水が使われている）。燃料の組み上げ方のノウハウや、安全性の問題が残るにもかかわらず、プルトニウム製造原子炉が堂々と動いていたところを見ると、動力としての利用は著しく遅れていたといえよう。

米国は水爆に関しても熱心で、第二次大戦終了前からスーパー計画の名で研究に着手していた。初めての水爆実験が１９５２年。第一号水爆「マイク」は液体水素を使った重量65トンもある代物で、とても実用化できるものではなかった。54年から小型化への研究が推進され、55年から56年にかけて爆撃機に搭載可能なメガトン級の爆弾が登場する。

長崎に投下された原爆が20キロトンであるから、じつに１００倍の威力である。

むろん、動燃利用も無視されていたわけではないが、原子力潜水艦の開発が承認されたのは１９４６年なのに、計画は遅れに遅れ、初の原子力潜水艦「ノーチラス」の竣工は１９５４年である。

また、発電用原子炉も稼動したのは１９５１年。水爆より若干早いが、原爆とはくらべものにならないスローペースである。

さまざまな問題を抱えながらも、原子力は炭酸ガスの排出も少なく、水力に比べて環境負荷の少ない優れたエネルギー源である。しかしながら、歴史をひもとけば、あくまで軍事利用のスピンオフでしかないのが見てとれるのだ。

もし、ドイツの原子力潜水艦が完成していたなら!?

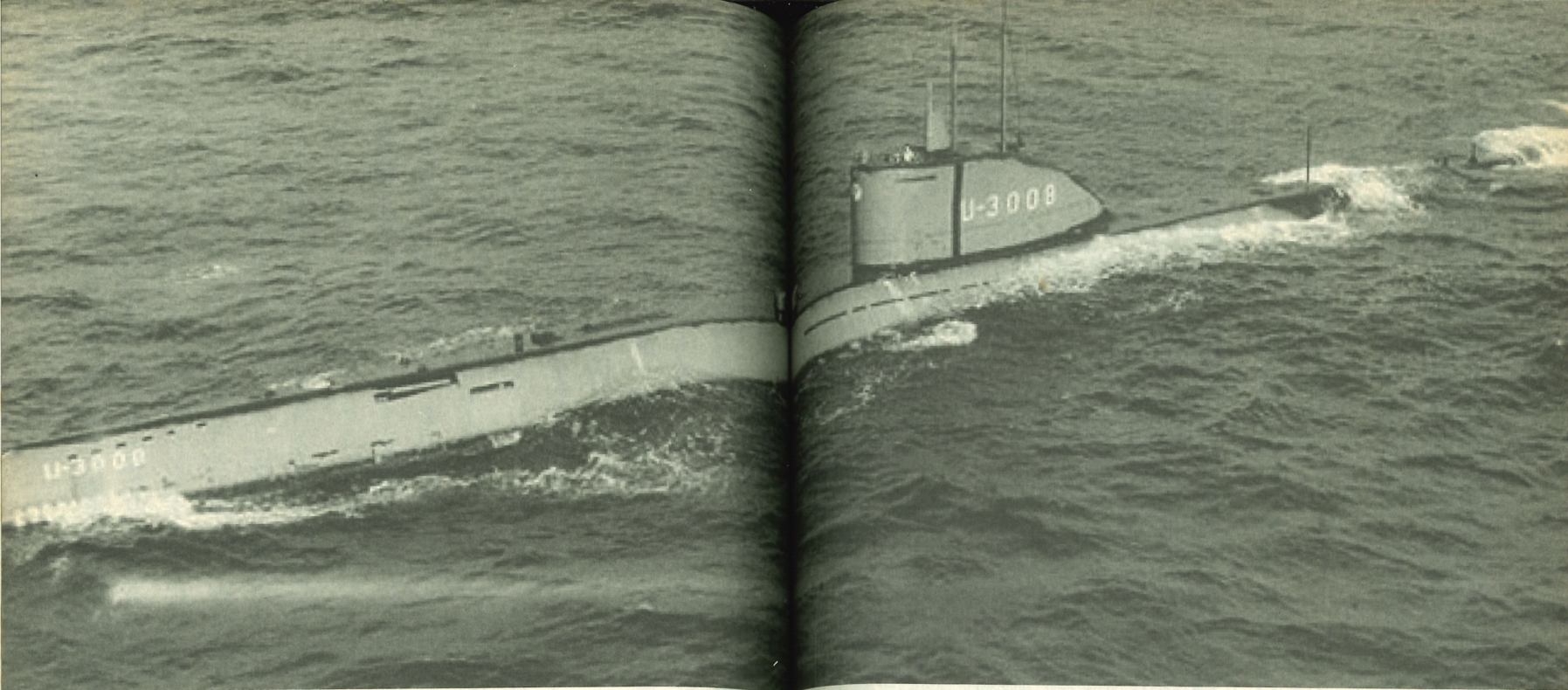
文・林譲治

世界初の原子力潜水艦「ノーチラス」は、ドイツの原潜開発計画から着想をえて、「ＸＸＩ」型潜水艦のコピーともいうべき艦に原子力タービンを搭載して、米国が作りあげた艦である。いわばパクリである。戦争の勝者のやることといえど、それではオリジナルの着想者が報われない。あまりに理不尽ではないか。ドイツ人にこそ、初の原子力潜水艦建造の栄誉が与えられるべきであろう。そこにいかなる結果が待っていようとも。

その「ＵＸＸＩ」型潜水艦が浮上したのは、夜明け前のことだった。陽はまだ完全には昇っていないが、すでに周囲は明るかった。

「作業、かかれ！」

下士官の命令一下、乗員たちは決められた手順の作業にかかる。耐圧容器の扉が開かれ、機材が潜水艦の狭い飛行甲板に展開されはじめる。作業にあたる人間は多かった。それは艦長であるヘルナー大佐が許可したことだ。この潜水艦の乗員たちには外気を吸う権利がある。

Photo/USN

「奇跡ですな」

この直での哨戒長で、航海長でもあるカール少佐は司令塔の上で作業を見守るヘルナー大佐にそう話しかける。

奇跡、そうその言葉に嘘はない。

「貴官は最初からこの作戦に懐疑的だったな」

「試験段階の潜水艦に、試験段階のウランマシーンを載せ、大西洋を渡り、敵を攻撃し、帰還する。それでも懐疑的にならないような馬鹿が航海長では困るでしょう」

「たしかにな」

大西洋の戦いが激化し、Uボートの損失が増大するとドイツ海軍当局は従来型潜水艦の性能に限界を認めざるをえなかった。そのために開発された潜水艦のひとつが水中高速潜水艦「UXXI」型だった。

この型は巨大な電池室を持っており、その電力で高速性能を実現するものであったがヘルナー大佐らの「UXXI」型潜水艦はそれとは違った。彼らの潜水艦はウランマシーンつまり原子炉を用いていた。彼らの艦が「UXXI」型潜水艦なのは、原子力潜水艦の開発期間を短縮するため「UXXI」型潜水艦の船型を流用したためだ。

核分裂の巨大なエネルギーを兵器として利用する研究は、すでにドイツでも行なわれていた。しかし、彼らの研究は、原子爆弾開発に向かわなかった。

独善的なドイツ科学者は自分たちに開発不可能な原子爆弾を連合国が開発できるとは思わなかったからだ。そのかわり彼らが力を入れたのは、原子力の動力としての活用だった。

原子炉開発はベルリンのBマシンとライプチヒのLマシーンの二系統で進められていたが、開発の進んでいたLマシーンが事故で失われると、開発はBマシンひとつに絞られた。彼らの潜水艦に用いられているのもBマシンの一族だ。

これは中性子反射材としてグラファイト――ドイツ原子炉では中性子減速剤として使われていない――で覆われたシリンダーのなかに減速材として重水をくわえ、そのなかに実験室レベルのガス拡散法である程度濃縮したウランの炉心を浸すものだ。中性子は重水により減速され、分裂核断面積を増やし、ついには臨界に達して連鎖反応を招く。

ドイツの原子炉技術には連合国のもののように制御棒は存在しないため、原子炉の核分裂の制御は減速剤である中性子の量で行なわれた。彼らにはこれ以外の方法はなかったのだ。そしてそんな原子炉が、この潜水艦に搭載された。

原子炉により半永久的に潜水できる潜水艦。しかし、ヘルナー大佐らの航海は苦難の連続だった。

高速では減速ギアの騒音がひどすぎた。そもそも聴音機などの水中音響兵器が原子力潜水艦を想定していないため、高速では周囲の状況が一切わからない。ドイツは原子力潜水艦を運用できるほど海底がわかっていなかった。

それ以外にも多くの故障やトラブルが連続した。大西洋を横断し、ニューヨーク沖まで来られたのは、たしかに奇跡、それと乗員の献身的な働きによるものだ。

「それでもウランマシーン潜水艦が本艦だけというのは残念ですな。こいつはいまは暴れ馬だが、飼い慣らせば名馬になりますよ」

「だが戦争の間は本艦だけだろう。濃縮ウランも重水も、もはや我がドイツにはない」

9・11の悲劇!?

準備完了の報告がなされ、「UXXI」型潜水艦の甲板に設置されたカタパルトから2機のV1号が順番に発進する。それらは特別製で、レーダーを装備し、大きな建築物を探すように作られていた。

苦しい航海のわりには任務であるV1号の発射はあっけなく終わった。彼らが自分たちの戦果を知ったのは、本国に戻ってからだった。2機のV1号は両方ともアメリカの象徴エンパイアステートビルに命中した。それは1944年9月11日。

ヘルナー大佐らは、それがアメリカの戦意喪失どころか、アメリカを本気で激怒させたことを知らなかった。よもやそれが翌年ベルリンへの史上初の原爆投下を招くことになろうとは。

第三章 本格参戦に至らず……

～登場する秘密兵器～

この秘密兵器映画がすごい！

吉田親司

映画に登場した秘密兵器であるが、意外に例が少ない。ファンタジックなものなら『ビグルス時空を越えた戦士』（英／85年）の超音波砲、『ガンバス』（米／86年）の飛行戦艦、『ロケッティア』（米／91年）のロケットパックなどがある。しかし一定の軍事的リアリティを求めるのなら、紹介すべき本数は限られよう。

まずは『クロスボー作戦』（伊／91年）から。ジョージ・ペパード率いる特攻野郎Aチーム……じゃなくて3名の特攻隊がドイツ軍ミサイル基地に潜入するというストーリー。V2の拡大強化版というべき架空のV10や有人型V1が登場する。模型ながら出来映えは上々だ。

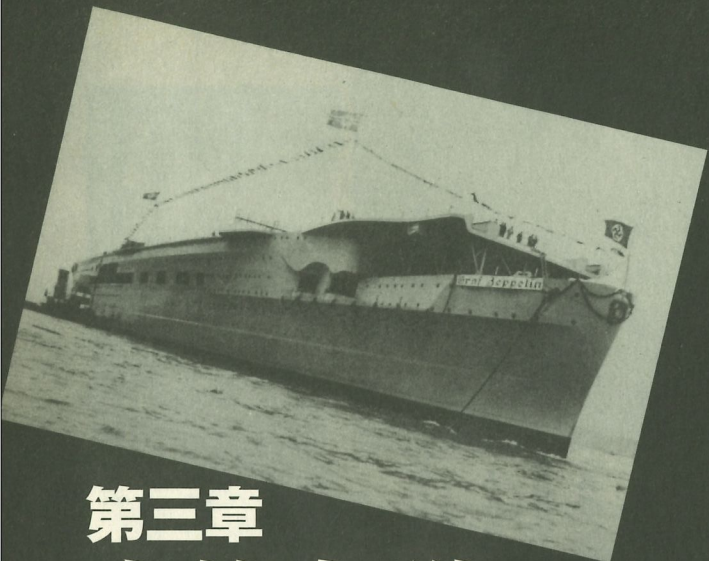
海戦兵器では『人間魚雷』（伊／53年）に低速走行型人間魚雷SLC「マイアーレ」が出演する。また『潜水艦X−1号』（英／67年）、『巨艦いまだ沈まず』（英伊／62年）には、イギリス海軍がマイアーレを参考に造りあげた人間魚雷「チャリオット」が姿を見せる。ただし、いずれも日本海軍の自爆兵器「回天」とは違い、乗員は突入前に脱出する手筈になっていた。

ドイツ軍の特殊機では『レイダース／失われた聖櫃（アーク）』（米／81年）に型式不明の全翼プロペラ機が顔を出す。計画されたアラドArE・555／1に似ているが、舞台設定は1936年のはずである。しかもなぜかドイツ軍がエジプトに駐屯してるし。

『エイセス／大空の誓い』（米／91年）ではラスボスが乗る機体としてMe263なる奇怪なジェット機が出撃した。実際のMe263はロケット戦闘機Me163「コメート」の性能強化機だが、似ても似つかない。それもそのはず。映画のMe263はスケールド・コンポジット社の「エイリーズ」という飛行機なのである。これに立ち向かうはサニー千葉が操る零戦。もちろん最後はカミカゼアタックだ。

超兵器「パンジャンドラム」繋がりでは、同兵器の開発に携わったネビル・シュート原作の『渚にて』（米／59年）が忘れがたい。架空の核戦争を描いた傑作である。

最後に「UFO」繋がりで『SFゾーン・トゥルーパーズ』（米／85年）をあげよう。テーマはずばりUFO墜落。イタリア戦線に墜ちたUFOをめぐり、米軍と宇宙人が共同戦線を張ってナチを叩くという悪夢のような作品。破壊されたUFOは、なぜかサンダーバード4号にそっくりだ。

飛ばなかった異形の翼

ドイツ・空前の計画機列伝

フォッケウルフ「トリープフリューゲル」

フォッケウルフ社のハンス・ムルトホプ技師が、1944年9月に設計した垂直上昇迎撃機。機体の中央には、逆テーパー（翼端にいくほど太くなる翼）の主翼が3枚、120度の角度で取りつけられており、主翼の先端には円筒形のポッドが設置されている。

このポッドには、ヴァルターロケットモーターとパブスト式のラムジェットが配置されており、機体を中心にその周囲を回転するようになっている。ロケットに点火して始動、加速し、ラムジェットの動力で飛行する仕組みだ。

また主翼は、垂直上昇から水平飛行に移行する過程で、その角度を変更することが可能となっている。

気密式のコクピットは機首先端に配置されており、パイロットは上を向いた状態で離着陸する。このため機体尾部に、大きな1輪の主車輪と4基の補助車輪からなる引き込み式の降着装

トリープフリューゲルは近年、玩具にもなった知る人ぞ知る人気の機体である。（写真提供＝潮書房）

●フォッケウルフ「トリープフリューゲル」要目
全長：9.15m、ローター直径：10.7m、翼面積：80㎡、自重：3200㎏、全備重量：5300㎏、エンジン：パブストラムジェット×3、最大速度：990㎞/h、航続距離：500㎞、実用上昇限度：14000m、武装：30㎜機関砲×2、20㎜機関砲×2、乗員：1名

置が配置されている。

武装は機首に搭載された30ミリのMK103機関砲2門と、20ミリのMG151／20機関砲2門である。

終戦までに、遷音速での風洞実験が実施されたという。

ホルテンHo229

1943年8月から、ホルテン兄弟が開発した全翼ジェット戦闘機。当初ホルテン兄弟は、空軍の1000×1000×1000爆撃機構想に全翼爆撃機を提案し、この懸賞金で本機の開発資金をえることになった。この構想を発展させたHoⅧ爆撃機については別項に記した（200ページ参照）。

機体は完全な無尾翼で、生産性を考慮して合

特徴的な全翼機のホルテンは、現在も現物がアメリカのプレーンズ・オブ・フェイム航空博物館に保管されている。（写真提供＝野原茂氏）

●ホルテンHo229要目
全長：7.465m、全幅：16.8m、全高：2.81m、翼面積：57㎡、自重：5067kg、全備重量：8999kg、エンジン：Jumo004Bジェットエンジン×2、最大速度：977km/h、航続距離：2500km、上昇限度：15000m、武装：20mm機関砲×2、乗員：1名

板が多用された。合板の接着に使用した接着剤にカーボンを混入したことで、レーダー電波を拡散させることに成功。結果的にステルス機となり、量産機には電波吸収塗料まで使用される予定であった。

無動力の試作機HⅨV1は44年3月に飛行。ユモ004Bジェットエンジン2基を搭載したHⅨV2がエルウィン・ツィーラー中尉の手で12月に飛行し、時速800キロ以上の速度を記録した。

BMW003ジェットエンジン2基を搭載した量産機は、工場のあるゴータ社とクレム社に移管されて、生産される予定であった。

最終的には単座戦闘攻撃機型のA型と、複座夜間戦闘機型のB型が生産機として計画されていたが、結局のところ6機の試作機の生産中に

もしかするとナッターこそ、当時のドイツの国情に沿った機体だったかもしれない。（写真提供＝潮書房）

●バッヘムBa349「ナッター」要目
全長：6.1m、全幅：3.6m、全高：2.2m、翼面積：2.75㎡、自重：800kg、全備重量：2050kg、エンジン：HWK109-509ロケットモーター、補助エンジンとしてシュミディッヒ109-533ロケットモーター×4、最大速度：900km/h、航続距離：40km、実用上昇限度：16000m、武装：24mmフェーンロケット×24、またはR4M55mmロケット弾×32、乗員：1名

終戦となり、1機が米軍に接収された。

バッヘムBa349「ナッター」

大戦末期に試験が行なわれた単座ロケット迎撃機。特に生産性を考慮し、機体は全木製となっていた。

実際の運用は3機を1個小隊とし、対空監視レーダーと目標追尾レーダーからの情報によって4基の補助固体ロケットと1基の液体燃料ロケットを噴射して、ランチャーから垂直に発進する。さらに上昇中、補助ロケットを分離、または敵機の上空で反転し、敵機の直上から攻撃するというものだった。

武装は機首に搭載された24発の24ミリフェーン空対空ロケット、または32発の55ミリR4M空対空ロケットで、これを一斉に発射して、強

力な爆発力により敵爆撃機を粉砕する。また状況によっては機体を敵機にぶつけ、パイロットが直前に脱出する攻撃方法も考えられていた。
この場合、パイロットは機体からパラシュートで脱出、さらに機体後部も分離して液体ロケットごとパラシュートで降下させ、回収して再利用することになっていた。
1945年までに20機ほどが試作され試験が開始されたが、有人打ち上げ試験の際に人命が失われる事故が発生。実用化に至らぬまま終戦となった。

フォッケウルフ Ta183「ヒュッケバイン」

フォッケウルフ社のクルト・タンク博士が、1944年の緊急戦闘機計画のために設計したジェット戦闘機。緊急戦闘機計画とは、機体の量産性を考慮した戦闘機開発計画で、機体構造の簡素化や機体の木製化、フォッケウルフFw190戦闘機との部品の共通化などがその目的とされた。「ヒュッケバイン」とは、伝説上の大カラスを意味する。
中翼配置の後退翼を主翼とし、尾翼にはT字尾翼を採用した。気密式の操縦席は機首に配置され、視界の広いバブルキャノピーが採用されている。量産機には、ハインケル・ヒルトHeS011ジェットエンジンが搭載される予定であった。
武装は機首に搭載された30ミリ機関砲4門のほか、X4空対空ミサイルの運用も可能であった。
44年末に制式採用が決定し、生産が開始されたが、45年4月連合軍が工場を占拠し、開発は終了してしまう。戦後、ソ連のミグ設計局がロールスロイス・ニーンジェットエンジンを搭載してこれを試作し、これがミグ15戦闘機の原型になったともいわれている。

皮肉なことに、ヒュッケバインはソ連新鋭機の原型となった可能性がある。

●フォッケウルフTa183「ヒュッケバイン」要目
全長：9.35m、全幅：10m、全高：3.48m、翼面積：22.5㎡、自重：2824㎏、全備重量：4291㎏、エンジン：ハインケル・ヒルトHeS011Aジェットエンジン、最大速度：1017㎞/h、航続距離：969㎞、上昇限度：14400m、武装：30㎜機関砲×4、乗員：1名。

ドルニエDo335「プファイル」

1943年10月、ドルニエ社が初飛行させた単座の重戦闘機。ダイムラーベンツDB603液冷エンジンを機体の前後に串形配置した、その独特の形状からプファイル（矢）ともアマイゼンベア（オオアリクイ）とも呼ばれた。
本機は、時速770キロもの最大速度を誇り、たとえ1基の発動機が停止してももう1基の発動機で航行することが可能で、その際にも時速560キロの速度での飛行が可能であった。
また、尾部にプロペラを配置したことから、

ドルニエDo335戦闘攻撃機は、実戦不参加が惜しまれる機体だ。

●ドルニエDo335「プファイル」要目
全長：13.85m、全幅：13.8m、全高：5m、翼面積／38.5㎡、自重：7260kg、全備重量：9600kg、エンジン：ダイムラーベンツDB603A-2×2、巡航速度：685km/h、最大速度：770km/h、航続距離：1380km、上昇限度：11400m、武装：30mm機関砲×1、15mm機銃×2、乗員：1名

本機にも脱出用の射出座席が採用され、脱出時には尾翼と後部プロペラが起爆装置により分離される。

戦闘攻撃機型のA型のほかに、武装を30ミリ機関砲に強化した夜間戦闘機・駆逐機のB型などが派生案として計画された。

だが、本機の採用と量産が決まった頃には空襲が激化し、生産はままならなかった。終戦までに37機が完成したが、実戦に参加することは一度もなかったという。

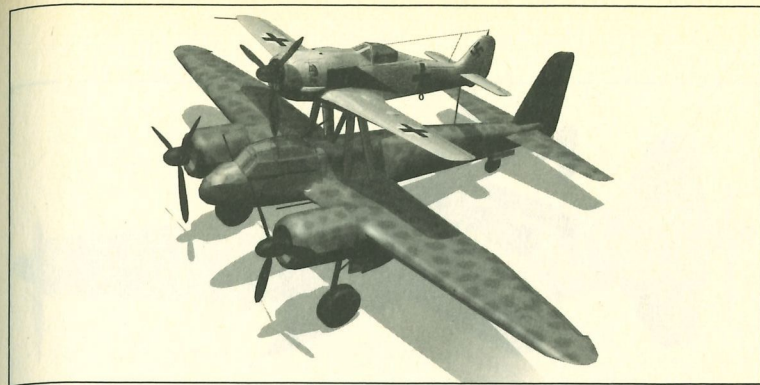
ハインケルHe162「サラマンダー」

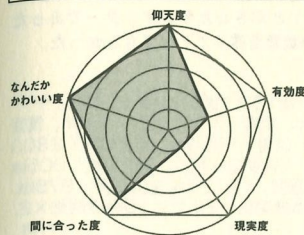
1944年9月にドイツ空軍は、生産が簡単で、どんな初心者にも操縦が容易、そして連合軍の機体よりも高性能なジェット戦闘機を目指した国民戦闘機を計画した。このコンペにはドイツの各航空機メーカーが参加したが、メッサーシュミット社は参加せず、結果的に選考に残ったのはハインケル社のP.1076計画案であった。

この案は、ハインケル社独自開発のジェットエンジンBMW003を機体背部に背負い式に搭載し、中翼配置の主翼とH字型の尾翼を配置。生産性を考慮した全木製の機体として約3カ月という短期間でまとめられ、12月に試作機が初飛行した。また本機には、射出座席が採用されている。

本機はHe162「シュパッツ」（すずめ）として採用されたが、機体安定性の不良により主翼端に下げ角が追加され、当初の計画とは裏腹に極めて操縦の難しい機体となった。なお、サラマンダー（火トカゲ）は俗称である。

「国民戦闘機」と称されたサラマンダーであったが、華々しい戦果を残すことはできなかった。

●ハインケルHe162「サラマンダー」要目
全長：9.05m、全幅：7.2m、全高：2.6m、翼面積：14.5㎡、自重：1660kg、最大重量：2800kg、エンジン：BMW003E-1、最大速度：905km/h、実用上昇限度：12000m、航続距離：975km、武装：30mm機関砲×2または20mm機関砲×2、乗員：1名

「ミステル」は、ノルマンディー作戦での数隻のタンカーを撃沈、ドイツ本国に迫ったソ連軍の侵攻を阻止するため、各地の鉄橋を破壊するなど、少ないながらも戦果をあげている。

●ミステルV組み合わせ事例
メッサーシュミットBf109（母機）＋ユンカースJu88（子機）
フォッケウルフFw190（母機）＋ユンカースJu88（子機）

合板に使用された接着剤の不良による空中分解事故や、当初搭載予定だった30ミリ機関砲の工場の壊滅など様々なアクシデントがあったが、45年には本機のみの飛行隊が創設された。

ミステルV

大戦末期のドイツ空軍では、余剰爆撃機の操縦キャビンを撤去して特殊成形炸薬を搭載した大型飛行爆弾が開発された。

この爆弾の上に、戦闘機を操縦母機として積み上げたものをミステル（やどり木）と呼称し、敵目標上空で爆弾を分離落下して戦闘機は帰投するという戦法が採られた。

特に、余剰機となったユンカースJu88爆撃機とメッサーシュミットBf109、またはフォッケウルフFw190戦闘機との組み合わせはミステルVと呼称され、50機が生産された。

このほかにも、メッサーシュミットMe262戦闘機2機を重ねたものや、新規開発した大型爆弾ArE377aの上にハインケルHe162戦闘機を重ねたもの、Ju287爆撃機をもとにした大型爆弾の上にMe262戦闘機を重ねたものなどが構想された。

だが、大型機に小型機を積み重ねるという構造では機体が鈍重になるのは必至で、制空権を連合軍に抑えられていた大戦末期には、本機の活躍の場はほとんどなかった。

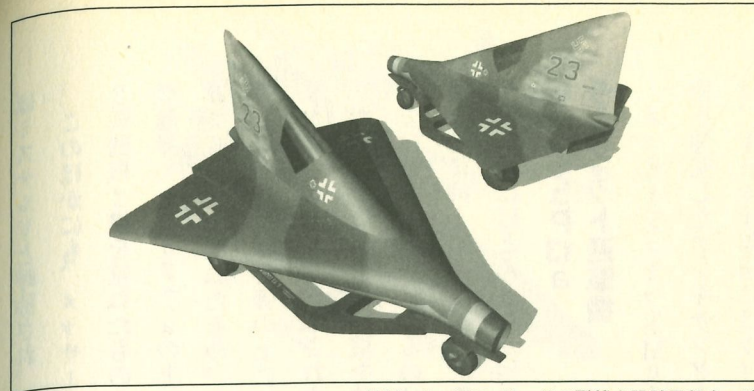
リピッシュP13a ラムジェット迎撃機

メッサーシュミットMe163コメート迎撃機を開発したアレキサンダー・リピッシュ博士は、1944年末にはウィーン航空研究所の所長となり、ラムジェット機とデルタ翼の研究を行なっていた。

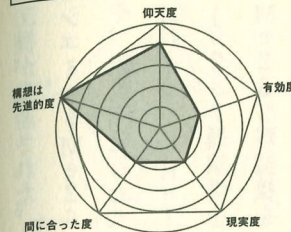
本機はその研究成果を形とするために計画された超音速迎撃機で、機体は後退角60度のデルタ翼で構成されていた。気密式の操縦席は機体中央に配置され、本機にも射出座席が採用されている。

運用の際はフォッケウルフFw58やジーベルSi204といった輸送機の機体背面に搭載されて飛行し、高度8000メートルで分離して液体燃料ロケットにより上昇加速する。そこでラムジェットエンジンを作動させて超音速で飛行するのである。

武装は30ミリ機関砲2門で、戦闘後はスキッド（橇（そり））を使用して着陸する。

空力試験用のDM1滑空機が完成し、風洞実

リピッシュP13aは、その形状も設計思想も、時代を先取りしていた機体であった。

仰天度
有効度
現実度
間に合った度
構想は先進的度

●リピッシュP13aラムジェット迎撃機要目
全長：6.7m、全幅：6m、全高：3.25m、翼面積：20㎡、全備重量：2300kg、エンジン：ローリンラムジェットエンジン、最大速度：1650km/h、武装：30mm機関砲×2、乗員／1名

験が開始された時点で終戦を迎えた。
　その後DM1は米軍に接収され、アメリカのコンベアXF92ダートデルタ翼戦闘機の原型機となる。

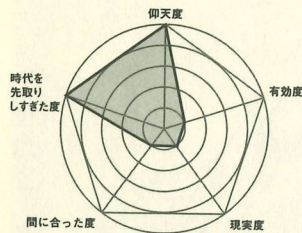
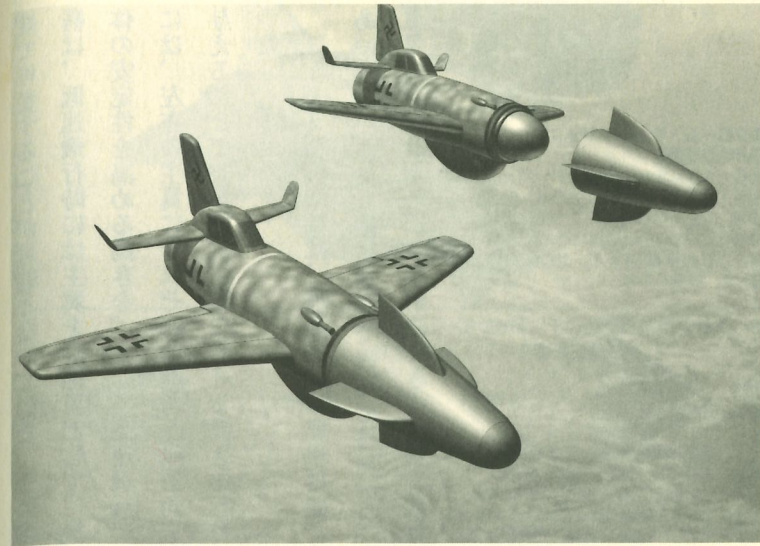
ブローム・ウント・フォスBvP202

　1944年9月に、ブローム・ウント・フォス社のリヒャルト・フォークト技師が設計した単座高々度戦闘機。2機のBMW003A―1ジェットエンジンを胴体下部に配置し、武装は機首に搭載された30ミリのMK103機関砲1門と、20ミリのMG151／20機関砲2門となっていた。
　本機のもっとも特徴的な部分は、肩翼に配置された長い主翼であろう。この主翼は重心位置に設置されたピボットを中心に、最大35度の角

度で可変することが可能となっていた。この機構は、低速飛行時には主翼を直線翼として、機体の安定性を高める働きを、そして高速飛行時には、左右の主翼にそれぞれ前進角と後退角を与えることで空気抵抗を減少させる働きをしていた。
　このような航空機は、理論的には実現可能であったが、あまりに革新的で当時の技術では、主翼の強度などの問題が解決できず、第二次世界大戦中には実現しなかった。ずっとあとの1979年に、NASAが主翼に複合材料を用いた実験機AD1を開発したことで、ようやく日の目を見たのであった。

●ブローム・ウント・フォスBvP202要目
全長：10.45m、全幅：11.98m、全高：3.7m、翼面積：20㎡、全備重量：5400kg、エンジン：BMW003ジェットエンジン×2、武装：30mm機関砲×1、20mm機関砲×2、乗員：1名

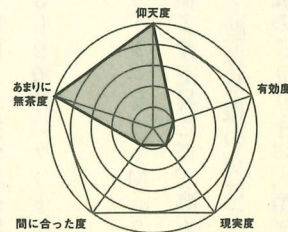
ソムボルトSo344

　ドイツ空軍の簡易迎撃機計画のために、ハインツ・ソムボルト技師が設計した単座の小型ロケット迎撃機。ドルニエDo217などの大型爆撃機の主翼に懸吊されて離陸し、敵爆撃編隊直前で分離、ヴァルター509液体ロケットエンジンにより上昇する。
　上昇した本機は、メッサーシュミットMe262と同じように一度敵機より上昇して、高々度からの急降下ののちに、敵爆撃機めがけて、機首に装着された一撃必殺の500キロ大型無

ソムボルトSo344もまた、大戦末期のドイツ軍らしい計画機であった。

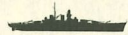
誘導ロケット弾を発射する。大型ロケット弾には近接信管が装着されており、敵爆撃編隊の中心部で炸裂する。

通常の機体ならば、このまま敵機もろとも爆炎に巻き込まれて爆散するところだが本機は、ロケット弾を分離すると機体の重心が急激に変化するので、そのまま失速、落下してこれから逃れる。機体の失速は、織り込み済みというトンデモ機であった。

●ソムボルトSo344要目
全長：7m、全幅：5.7m、全高：2.18m、翼面積：6㎡、全備重量：1350kg、エンジン：ヴァルター509ロケットモーター×1、武装：400kgロケット弾×1、機関砲×2、乗員：1名

仰天度
有効度
現実度
間に合った度
あまりに無茶度

本体には2門の20ミリ機銃、または30ミリ機関砲が搭載される計画であったが、これはあくまで自衛用の武装である。

その後パイロットは、なんとか機体を失速状態から立て直し、機体下部のスキッド（橇）を使用して着陸する。

この計画のために1／5スケールの模型が製作されて風洞実験が実施されたが、１９４５年の初頭に計画は破棄された。

ドイツ機の開発者たち

佐原晃

第二次大戦中のドイツ航空工業界では、さまざまな航空技術者がさまざまな形状の航空機を創造していた。

とくに、ヴァルター、ライマールのホルテン兄弟と、アレキサンダー・リピッシュ博士、ブローム・ウント・フォス社の主任設計技師であったリヒャルト・フォークト博士は、独創的な才能を発揮していた。

ホルテン兄弟は一貫して無尾翼機を作り続け、戦後もアルゼンチンで無尾翼機を開発している。

メッサーシュミットMe163ロケット戦闘機を開発したリピッシュ博士は、デルタ翼とラムジェットの研究に没頭し、戦後も米国でデルタ翼やWIGを研究した。

川崎航空機にも在籍したフォークト博士は、左右非対称機などの独創的な機体を開発し、戦後はリピッシュ博士とともに米国コンベア社で研究を続けた。

ドイツは敗れたが、彼らのその技術と情熱は、戦後の航空界で生き続けたのである。

もし、ヒトラーユーゲントがナッテルを運用していたなら!?

文・青山智樹
イラスト・長谷川正治

終戦直前、ドイツ軍のパイロット訓練時間は、平均30時間にまで縮小されていた。もし、最低限の訓練で実戦投入できるナッテル（ナッター）が（本当の意味で戦力になるように）実用化されていればユーゲント隊員が投入されていたのは間違いない。なおこの場合、最低でも隊員は15歳以上であるべきであろう。追い詰められたドイツにおいて、理念が通じるかはともかく、ジュネーブ協定は15歳未満の兵役を禁じているからである。

ヒトラーユーゲント「夕べの集まり」は楽しかった。映画『少年クヴェックス』を観た。キャンプファイヤーを囲んで歌を歌った。ワンダーフォーゲルなどつらい活動もあったが、「夕べの集まり」は別格だ。

だが、その日、かつてない雰囲気がユーゲントハイムに漂っていた。

団員たちの前にＳＳの隊員が立った。その団員も何年か前に「ユーゲント」を卒業したかつてのリーダーだったが、ユーゲントは青少年の自治が前提で、いわゆる大人が介入してくることはまれ

だった。

「勇気の求められる作業に志願しようとする者はいないか？」

団員のなかから軍隊の補助員になったものも少なくない。補助員の仕事は軍の武器弾薬の輸送や伝令など、比較的簡単なものが多かったが、少年たちにとって大いなる栄誉だった。

「軍の作業だ。安全とは限らない。恐ろしい目にも遭うだろう。だが、やり遂げれば君らの頭上に栄冠が輝くだろう」

「それはどこの作業でしょう？」

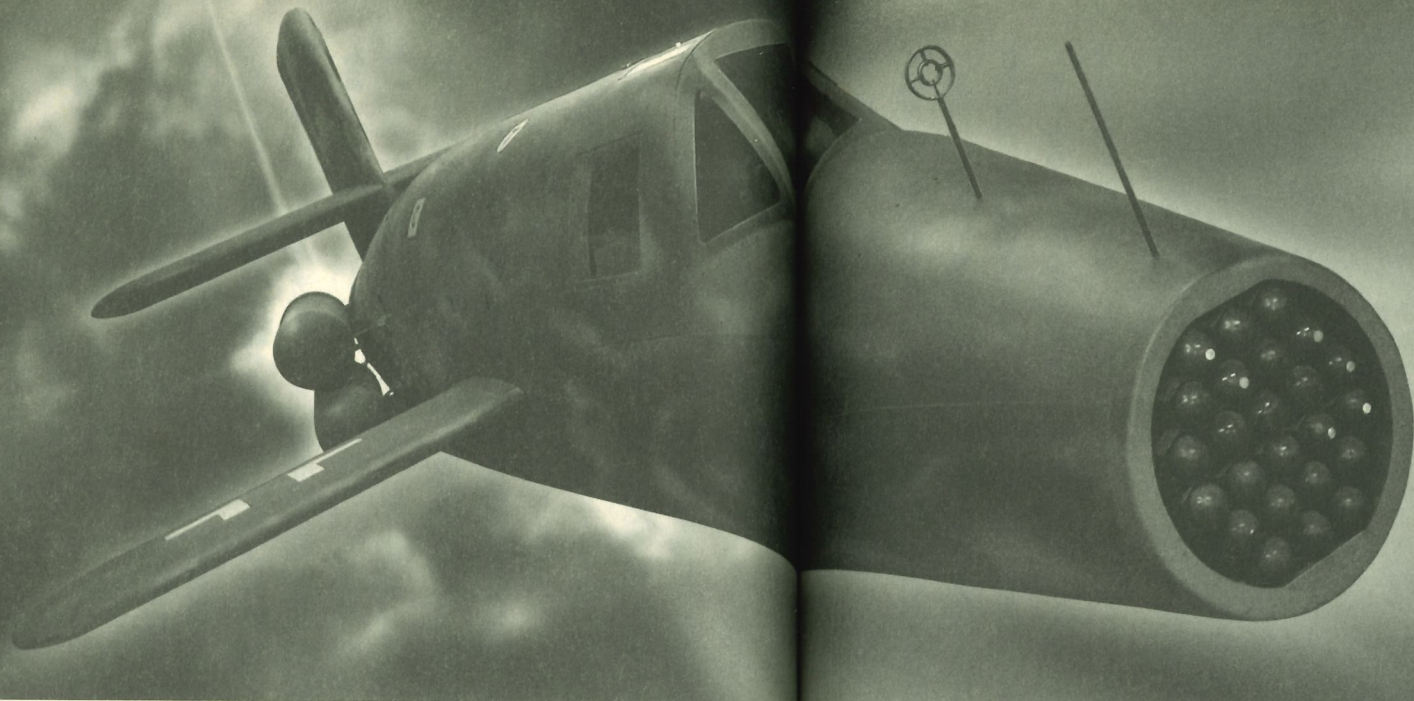
質問が上がった。補助員だとしても、陸海空のどこに進みたいか、希望はある。ユーゲントを卒業したら、少年たちは親衛隊なり、国防軍に志願すると決意していた。その時、補助員としてどこにいたかが将来を左右するからだ。

「空軍だ。飛行もありえる」

ペーター・アンダーセンはいちもにもなく手をあげていた。

「やらせてください」

「できるのか？　貴様のような腰抜けに？」

ＳＳ隊員は鼻を鳴らした。何年か前のペーターの失敗を覚えているのだ。だが、ペーターも意地を張った。

「もちろんです」
「よかろう。成長ぶりを見せてもらおう」

＊＊＊

ペーターのほかにも数人の少年が選別されてミュンヘン郊外のワルトゼーに送り込まれた。少年たちは理由も明かされないままシミュレータに乗せられた。飛行機の操縦席に見えた。形だけの酸素マスクをつけるだけで胸が高鳴った。

簡単な訓練だったが、模型の目標を照準環に導けなかったり、レバー操作を間違えたりして数人が振り落とされた。

「諸君に乗ってもらうのはナッテル。連合軍のテロ爆撃に対抗する秘密兵器だ」

SS隊員はナッテルの飛行経路を示した。ナッテルは垂直に打ち上げられる。攻撃を終えると、乗員は空中脱出する。空中脱出と聞いて少年たちは顔を見合わせた。つまり、パラシュート降下だ。そんなことをしたこともなければ、降下訓練も受けていない。

「むろん、任務を拒否することもできる。君らはまだユーゲントだ。だが、諸君が将来、空軍に志願して戦闘機パイロットとなったら、それが許されない行為であることは理解できるだろう」

「もちろん、成し遂げてみせます」

だが、SS隊員の目は「お前にでき

るのか?」と挑発的な光をたたえていた。

初めての戦果

短い訓練期間を置いてペーターたちは実戦配備につき、そして、12月末のどんよりとした日。ついに出動命令が下った。

ナッテルは最低限の訓練で実戦化できる。この頃のドイツの戦闘機パイロットの平均訓練時間は30時間。しかも、パラシュートの利用により、もっとも難しいとされる着陸訓練を省略できるのである。

「よし、行け、急げ」

サイレンが響き渡り、基地は臨戦態勢に入った。敵編隊がミュンヘンに向かっているのをレーダーが捉えたのだ。第一号のナッテルに燃料が注入され、発射ランチャーが垂直に立てられた。ペーターの心臓は、期待と不安で大暴れしていた。

「訓練どおりやれば問題はない」

SS隊員がコクピットに駆け昇ってきた。ペーターはうなずいて酸素マスクを被った。やがて、手旗信号が振られ「発進」が命令された。ペーターは歯を食いしばった。とてつもない轟音が耳を覆った。振動も想像した以上上だった。

目の前が真っ白になった。ペーターのナッテルは分厚い雲のなかを上昇していた。急に胃が膨れ上がり、大きなゲップがでた。急激な気圧変化で胃のなかの空気が膨張しているのだ。

突如、目の前が明るくなった。真っ青な空が広がる。目の前を大型の四発機が飛んでいた。1機や2機ではない。ペーターは1機に狙いをつけた。訓練どおり引き金を引く。24発のロケット弾がB17に向かっていった。

一撃でB17の翼が吹き飛んでいた。「やった!」と叫びたい気持ちだったが、訓練にあった「ロケットを発射したら、即座に第一レバーを引くこと」を実行した。ナッテルの機首部分が弾け飛んだ。続いて第二のレバーを引いた。パラシュートが開いて、ペーターは空中に放り出された。

ペーターは真っ白い雲に突っ込んでいた。地面が見えなかった。激しい衝撃で彼は気を失っていた。パラシュート降下とはいえそれなりの衝撃は避けられない。

＊＊＊

気がつくと野戦病院のベッドだった。SS隊員が心配そうにペーターの顔をのぞき込んでいた。

「やりましたよ。兄さん、あいつをたたき落としてやった」

「ああ、お前はもう弱虫じゃない」

初めてSS隊員の顔に笑みが広がった。

早すぎた超重爆撃機構想

ドイツ・巨大爆撃機大全

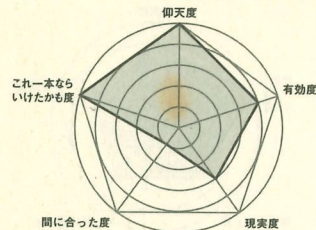
アラドE555-1

1943年12月から、アラド社は空軍の米国本土爆撃計画にもとづき、大型高速長距離爆撃機の開発に着手した。その骨子は、BMW003Aジェットエンジン6基を機体上部にまとめて搭載し、時速860キロの最大速度で5000キロを飛行して、4トン以上の爆弾の雨を降らせるというものだった。全翼の機体形状や、機体前部に設置された気密式の操縦キャビンなど、当時のドイツの最新技術を結集して開発される予定の機体であった。

離着陸に用いられる着陸脚は、前脚も主脚も二重車輪による引き込み式で、爆弾満載時には投下式の補助車輪が使用される予定だった。

防御武装も、操縦席上部に旋回式の20ミリ連装機関砲1門、左右の主翼付け根に30ミリ機関砲が1門ずつ装備され、機体尾部にはこれに加え、20ミリ連装機関砲による砲座があり、操縦キャビンからのリモコン操作による射撃が可能となるはずであった。

しかし戦局の悪化により、44年の12月にこの計画は中止される。

アラドE555-1長距離爆撃機は、その特異な形状が印象的だ。

●アラドE555-1要目

全幅：21.2m、全長：18.4m、全高：5m、翼面積：125㎡、全備重量：24000kg、発動機：BMW003ジェットエンジン×6、最大速度：860km/h、上昇限度：15000m、航続距離：4800km、武装：30mm機関砲×2、20mm連装機関砲×2、爆弾4000kg、乗員：3名

フォッケウルフTa400

クルト・タンク博士が設計した米本土爆撃のための大型爆撃機で、1943年よりフランス各地で部品単位の生産が開始された。

42メートルという長大な主翼に、1700馬力のBMW801E空冷エンジン6基を搭載し、時速535キロの最大速度で4800キロの距離が飛行可能とされた。また、補助動力として2基のユモ004ジェットエンジンが搭載されており、非常時にはこれを用いて、時速720キロという、大型機としては驚異的な加速力を発揮する。

ボンブベイと機体下部、主翼下面を合わせた爆弾搭載量は最大10トンで、機体下部と主翼下面にはフリッツXやヘンシェルHs293などの対艦ミサイルを搭載し、対艦攻撃も可能であった。

機首の気密式操縦キャビンには9人が搭乗し、機体上部、および機体下部に旋回式の20ミリ連装機関砲が各1門、機首に20ミリ連装機関砲が1門が装備されていた。機体尾部には、20ミリ連装機関砲のリモコン砲座が配置されていた。

しかし、ドイツ空軍省がこの機体を採用することはなく、大戦途中でこの機の開発は中止となっている。

●フォッケウルフTa400要目
全幅：42m、全長：29.4m、全高：6.5m、翼面積：170m²、全備重量：62500kg、エンジン：BMW801E×6、Jumo004ジェットエンジン×2、最大速度：535km/h、720km/h（ジェットエンジン使用時）、上昇限度：15000m、航続距離：4800km、武装：20mm連装機関砲×6、爆弾：10000kg、乗員：9名

仰天度
有効度
現実度
間に合った度
かなりマシなほう度

ホルテンHoXⅧA

空軍の米本土爆撃計画のため、1944年の末にホルテン兄弟が計画した長距離爆撃機。軍からは、4トンの爆弾を搭載し、1万キロを無補給で飛行することが要求されていた。これに対しホルテン兄弟は、主翼幅40メートルの大型無尾翼全翼機を設計、機体は完全な全木製として、8基のユモ004Bジェットエンジンを機体内部に搭載した。これにより本機は、時速900キロの最大速度で飛行可能となっていた。

着陸脚も完全な引き込み脚だが、与圧式操縦キャビンの内部に前脚の収納スペースが張り出しており、乗員6名の操縦スペースはかなり狭いものであった。

また、機体の組立てにはカーボンを混入した接着剤が使用され、結果的にレーダーに探知されにくい、ステルス性も持ち合わせることになった。

だが、空軍側が尾翼のない設計にまったく理解を示さなかったため、巨大な着陸脚をまとめたスパッツを機体下部に配置したHoXⅧBへと設計を変更したものの、ついに実戦参加には間に合わなかった。

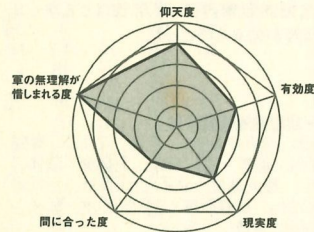
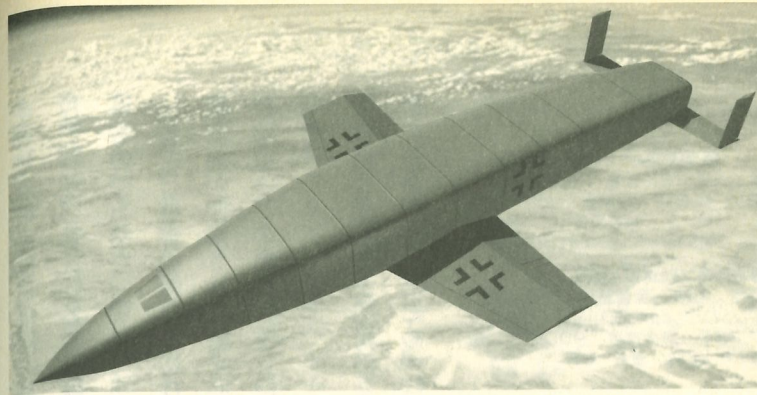
●ホルテンHoXⅧA要目
全幅：40m、全備重量：33100kg、エンジン：Jumo004Bジェットエンジン×6、最大速度：900km/h、爆弾：4000kg、乗員：6名

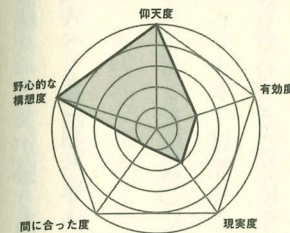
仰天度
有効度
現実度
間に合った度
軍の無理解が惜しまれる度

ゼンガー成層圏爆撃機

オイゲン・ゼンガー博士が戦前に発表した論文をもとに、成層圏を飛行する超音速長距離爆撃機の開発が秘密裏に行なわれていた。

この機体は、今日のスペースシャトルのように、機体自体が揚力を発生するリフティング・ボディ機として設計されていた。

後部に600トンの推力を発揮する巨大なロケットブースターを連結し、全長3キロという長大な離陸用レーンを滑走して離陸する。離陸後は、推力100トンの液体ロケット1基により加速、大気圏を離脱する。

ゼンガー成層圏爆撃機は、実現性はともかくコンセプトは画期的なものだった。

●ゼンガー成層圏爆撃機要目
全幅：15m、全長：28m、全高：2.1m、翼面積：44.7㎡、重量：9979㎏、発動機：液体ロケット×1、最大速度：22100㎞/h、上昇限度：40000m、航続距離：23500㎞、武装：爆弾3629㎏、乗員：1名

そこから成層圏へと降下して、ちょうど石が水面を跳ねるようなかたちで飛行し、機体と大気の摩擦をブレーキとして利用し、速度を制御する。

ニューヨーク上空でボンブベイを開放し、約4トンもの大型爆弾を投下する予定であったうえ、核弾頭や化学弾頭の使用も想定されていた。

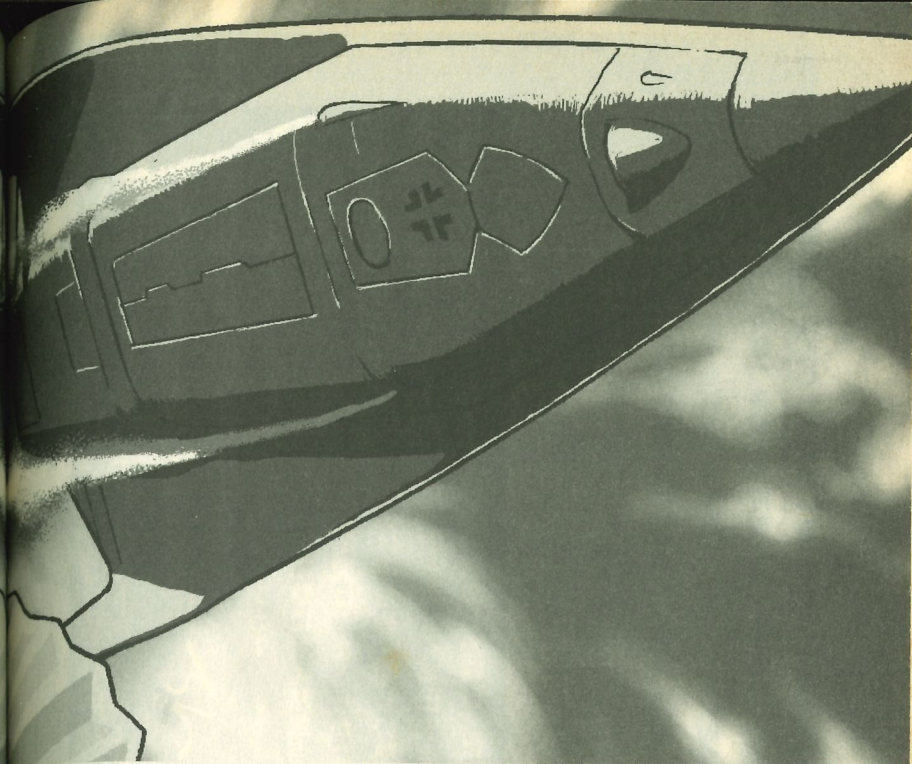
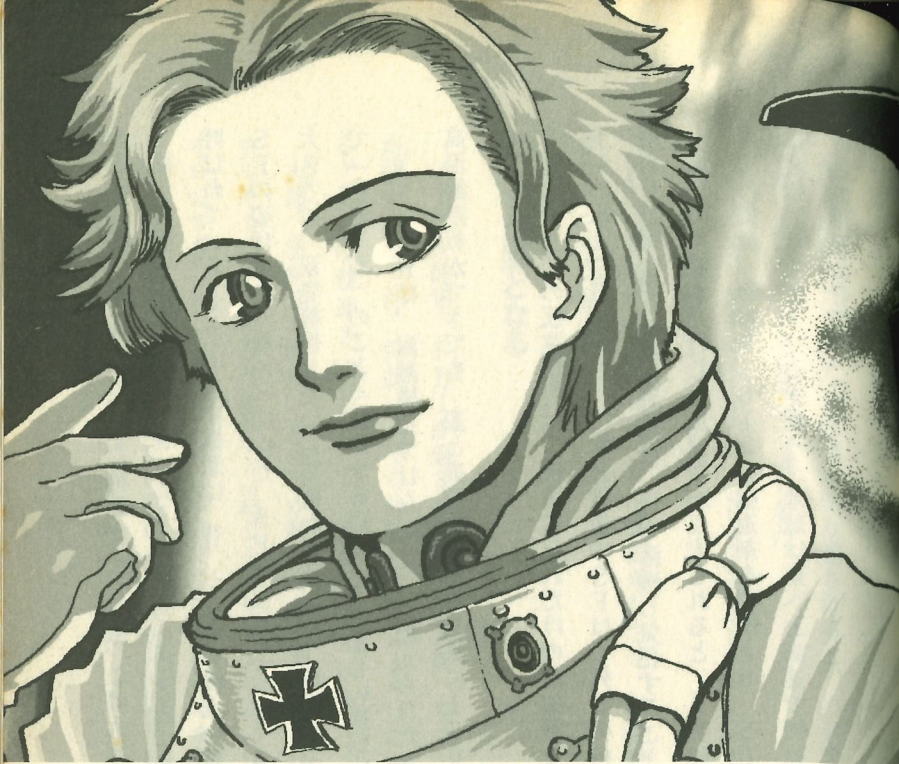
攻撃終了後は、大気ブレーキを使用して減速を繰り返し、全長2万3500キロにもおよぶ長大な行程を飛行してドイツ本国へと帰還し、任務は終了となる。

機体の耐熱の問題が解決しなかったものの、45年までにメインロケットの試験設備が建設されていたという。

もし、亜宇宙爆撃機が実際に飛んでいたなら!?

文・陰山琢磨
イラスト＝颯田直斗

亜宇宙爆撃機ゼンガー……ドイツは「SF」として実用化にこぎつけた。反跳滑空時の熱衝撃に耐え熱焦点の発生を防ぐため、機体から鋭角は消え、胴体、翼、双尾翼は、なだらかな曲線を持つ。漆黒の塗装は、亜宇宙での放熱効率を上げるため。激しい熱が加わる機体底面に開口部も、着陸脚もない。バルブから激しく噴出する霧は、機体の熱を奪い高圧水蒸気と化した氷だ。宇宙に拡散した霧は、はるか後方に美しい真円の虹を描くだろう。

円筒形の鋼製気密チャンバー。
ハンナ・ライチュ名誉大尉は、そのなかで、0・7気圧の冷気を呼吸している。
『大尉。推進剤再充填、機器作動確認ともに終了。発射、マイナス720秒――いま！』
彼女はヘルメットを被り、与圧服の気密リングに固定。胸のバルブから下がったパイプやコードと携行生命維持装置の接続を再度確かめて席を立つ。
宇宙を飛ぶには正しい資質（ライト・スタッフ）がいる――ハンナは思う。
――激しい加速と振動、轟音、低圧、熱…

……。人が耐えうる限界は〝劣等種(ユー)〟たちの協力で判明した。その時使われた試験装置で私の資質も確認された。このチャンバーに初めて入ったのも生身のユーだ。ちょっと嫌な臭い、したね――。

標高1700メートル。山の稜線を開削し、高強度コンクリートの台座に据えられた、延長8・6キロのモノレール。その後端には、滑走を始めると大気をラム圧縮して、レールから数センチ浮揚する台座がある。強固な座上には、打ち上げトレインが鎮座していた。

図面も模型も見たけど、実物はすごいね。全長110メートル。そう、駆逐艦くらい？――もちろん、ハンナは知っている。目前の巨大機械は、駆逐艦416

隻分の駆動力を発揮する。その製造価格は1億6800万マルク。重巡2隻分だ。Dr.ゼンガーも、Dr.ワルターも、この機が気に入らない。「推進効率が悪く、理想的設計からほど遠い」とか……でも、飛べば文句はない。地球の向こうまでね――。

亜宇宙機の出撃

打ち上げトレインの最後部は固体ロケットを12本束ねた、魁偉(かいい)なレール上加速機だ。推力はじつに2480トン。その前方には二段式打ち上げ機(ロケット)。推力26トンの液体燃料モーターを、それぞれ8基と6基束ねている。ロケットを束ねるほど、構造は重くなる。それを飛ばすには、も

っと推力がいる。すると、また構造が……まあ、この大きさですんでよかったじゃない——。

彼女の亜宇宙機は、最先端にある。放熱のため漆黒に塗装されたそれは、黒いフォーゲル、SFと呼ばれている。SFの基本構想は、昔、ゼンガー博士が世に問うた対蹠地航空機だ。が、その構想と、SFの姿は大きく異なっていた。SFは、ロケットモーターを持たぬ、極超音速グライダーなのだ。大きさは、双発軽爆とたいして変わらないが、構造重量だけで18トンを超える。理由は大気圏上層で「水きり石」のごとく反跳する際の、すさまじい衝撃応力と急激な加熱に耐えるためだった。

——「SFは、耐熱構造ではない」って教えられたときは驚いたな。でも、考えてみれば当然。高温耐熱板ができても、表と裏の温度差が一気に1700度になったら、間違いなく粉々になるね——。

極超音速での反跳飛行は、機体にそれだけの熱衝撃を与えるのだ。耐熱を放棄したSFには、72トンの氷が搭載される。二重殻構造のSFは、外殻の内側を常にアイスジャムが巡り、機体底面や機首を分厚く覆う蒸発冷却剤は、自ら溶融し気化することで熱を奪う。

無数の手順が進行し、加速機が点火されると、SFは黄白色の炎と爆煙を残し、26秒で離床。打ち上げ機は、毎秒0・6トンの推進剤を燃焼させ、SFを宇宙へ放り上げた。目指すは北方。SFは北極回りでアメリカを襲う。地球は東へと高速で回転している、アメリカへ向かい西方に打ち上げるのは愚の骨頂だ。

加速が終わり、打ち上げ機が切り離されると、ハンナは短く通信した。

『私は、カモメ（Ich Möve）』……彼女の暗号名だ。

ペーネミュンデのDr.たちは、SFの速度と高度にふさわしい攻撃法を考案した。300キロ運動エネルギー集束弾だ。

算出投弾時刻。ハンナはSFを背面飛行させ、熱防御のため背面にある投弾ハッチから6発の300キロ弾を射出した。

すべてが塵となる

アメリカ陸軍、FBIが厳重に警備する荒野、ロス・アラモス。その土地へ6発の300キロ弾が襲いかかった。弾殻は高空で分解し、重さ1キロのモリブデン合金球を、合計1440発放出する。それは秒速3・6キロで、20メートル四方に一発、およそ4平方キロに降りそそいだ。

大地へ激突した瞬間、合金球が持っていた速度は熱へと変わり、爆発的に放散される。一発のエネルギーはTNT炸薬換算で、およそ10キログラム。15センチ榴弾に充填される炸薬が、わずか6キロにすぎないことを思えば、そこでなにが起こるか想像できよう。

すでに20億ドルが注ぎ込まれていた、原子兵器開発の中枢は、永久に失われた。

世界にさきがけた回転翼機

ドイツ・至高のヘリコプター研究

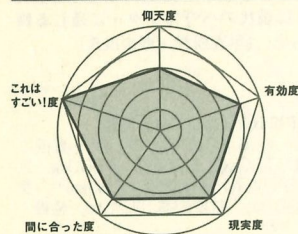
フォッケアハゲリス Fa223「ドラッへ」

フォッケウルフ社の創始者であるハインリッヒ・フォッケは、1936年に同社初の本格的なヘリコプターとなるフォッケウルフFw61を開発した。この機体はベルリンオリンピックの際に、ナチスドイツの技術力を誇示するために使用されている。

その後フォッケは、グレッド・アハゲリスとともにフォッケアハゲリス社を設立し、6人乗りの本格的な実用ヘリコプターの開発生産に着手する。

1940年に初飛行したFa223「ドラッへ（ドラゴン）」は、対潜作戦、偵察、輸送、救難などでの使用を目的として製造された大型ヘリコプターで、1トンの小型車両を懸吊輸送できるほどの大馬力を有していた。

しかしながら空軍からの理解が得られず、5種類が予定されていた生産機は、1種の他用途機へと設計変更が行なわれた。そのうえ、あい

Fa223ドラッへは、イタリア統領のムッソリーニ救出作戦に投入される予定だった。（写真提供＝野原茂氏）

●フォッケアハゲリスFa223「ドラッへ」要目
全幅：24.5m（ローターハブ間）、全長：12.25m、全高：4.35m、ローター直径：12m、翼面積：226.1㎡、自重／3180kg、全備重量：4300kg、エンジン：BMW301R、最大速度：175km/h、巡航速度：120km/h、実用上昇限度：2,000m、航続距離：700km、武装：7.92mm機銃、爆弾500kg、乗員：6〜8名

つぐ工場への爆撃で生産が遅れていった。

本機の晴れ舞台となるはずだった1943年のムッソリーニ救出作戦の際も、ローターの故障により作戦不参加となる。同作戦で本機の有効性が証明されれば、活躍の機会は増していたであろう。

1945年2月にオーストリアで捕獲された機体がイギリス本土へ飛行し、世界初のドーバー海峡を渡った回転翼機となった。

フレットナー Fl282「コリブリ」

アントン・フレットナーが研究していた本格的な偵察用ヘリコプターで、「コリブリ」とはハチドリを意味する。

偵察、弾着観測、対潜哨戒に用いる単座の艦載ヘリコプターとして、ドイツ海軍が1940

Fl282コリブリは現代のヘリコプターに通じる構造が特徴となった。(写真提供＝野原茂氏)

仰天度
有効度
現実度
間に合った度
もっと作りたかった度

●フレットナーFl282「コリブリ」要目
全長：6.56m、全高：2.2m、ローター直径：11.96m、自重：760kg、全備重量：1000kg、エンジン：ブラモSh14A、最大速度：150km/h、実用上昇限度：3300m、航続距離：170km、乗員：1名

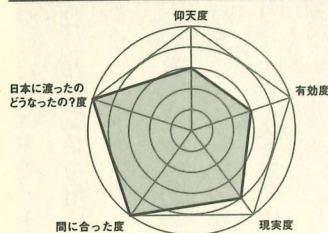
年前半にフレットナー社に発注し、42年には試作・原型機による運用テストが開始されている。最大の特徴は、なんといっても動力が2軸V型の配置になっていることで、これに2翅のプロペラを1組ずつ配置して回転トルクを打ち消している。この配置は現在、カマン社のヘリコプターで採用されている方式である。

徹底的な軽量化のせいで運動性は悪かったものの、状況しだいでは悪天候でも飛行が可能で、43年にはエーゲ海、地中海方面での船団護衛任務に活躍した。

A型は単座偵察機だが、B0、B1型には5キロ爆弾2発を搭載可能であった。またB2型は非武装の複座型であった。

海軍からは1000機もの発注を受けていたが、連合軍の爆撃により生産は思うようにいか

凧のような外観が印象的なFa330バッハシュテルチェ。(写真提供＝野原茂氏)

仰天度
有効度
現実度
間に合った度
日本に渡ったのどうなったの?度

●フォッケアハゲリスFa330「バッハシュテルチェ」要目
全長：4.45m、ローター直径：7.32m、翼面積：42㎡、自重：68kg、最大運用速度：40km/h、実用上昇限度：220m、乗員：1名

なかった。

フォッケアハゲリスFa330「バッハシュテルチェ」

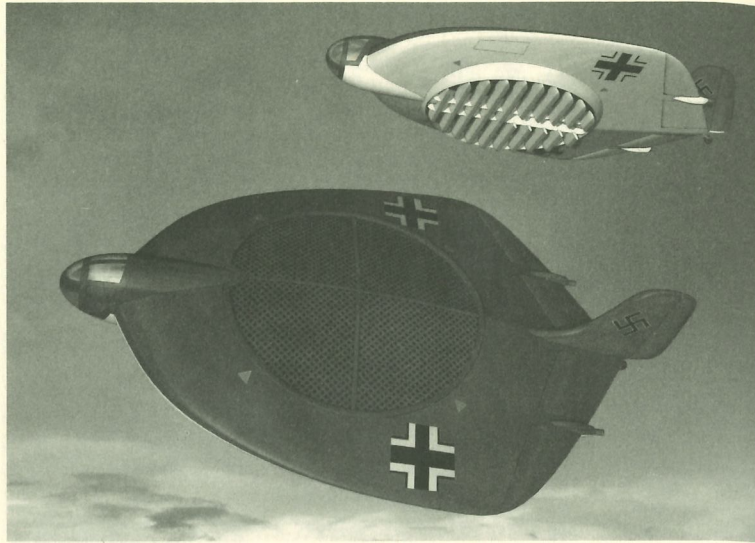
大西洋で「ウルフパック」の勇名をはせたドイツ海軍のUボートは、遠洋型のUⅨ型が開発されるとインド洋へと進出した。このUⅨ型に搭載し、長期遠距離偵察を主目的に使用されたのが本機で、「バッハシュテルチェ」とはセキレイの意味である。

外観は3翅のプロペラを回転翼とした単座無動力の凧で、通常はUボートの艦橋に配置されたキャニスターに折り畳んで格納する。

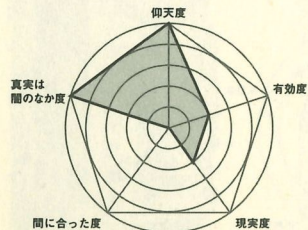
偵察任務の際は、3分で組立を終了して離艦、Uボートの艦橋からロープで牽引され、最大120メートルまで上昇することで、4万メートルまでの遠方洋上を偵察可能とする。この時パ

イロットは、送受話装置のついたヘッドセットを装着し、牽引ロープに併設された電話を用いて洋上の状況を母艦に報告する。
　また、偵察時に母艦が敵艦の攻撃を受けた場合、本機は牽引ロープを切り離し、操縦席下部のレバーを引いて機体よりローターを分離する。その後パイロットは、パラシュートにより脱出するしくみだった。
　インド洋上では日独潜水艦の交流があり、何機かが日本の潜水艦にも譲渡され、運用されたともいわれている。

フォッケウルフVTOL

　第二次世界大戦中に、フォッケウルフ社で構想されていたといわれている垂直上昇機。おそらくは、偵察機や連絡機、観測機としてヘリコプターのかわりに使用される予定であったものと思われる。
　大型の円形の機体の中央には2重反転式のローターと、形式不明のジェットエンジンが配置されている。運用の際はローターの回転により機体下部に揚力を発生させるとともに、機体上部からの吸気をジェットエンジンに送り込み、これを機体後部左右にある噴射口よりノズルを通して噴射、推進力を得る。じつはこの構造は、多くのドイツ円盤機の飛行原理とされているものと、ほぼ同じである。
　尾部上部には方向舵を備えた垂直安定板があり、機体下部のローターダクト左右には引き込み式の主脚と、尾部下部には尾輪がある。武装については不明である。
　機首にある単座の操縦キャビンは、気密式であると思われる。
　そのほか、本機についての詳細はまったく不明であり、実際に開発が行なわれたかどうかも定かではない。

フォッケウルフVTOLの詳細は不明だが、近年、玩具化されてファンを喜ばせた。

●フォッケウルフVTOL要目
全長：不明、ローター直径：不明、翼面積：不明、自重：不明、最大速度：不明、実用上昇限度：不明、乗員：不明

夢想の円盤翼機

ヴォートXF5U1「フライング・パンケーキ」

この怪物を語るにおいて、まず強調しなければならないのは、本機がれっきとした「戦闘機」だという事実だろう。「XF5U1」という開発コードに注目願いたい。Fはまさしく戦闘機(ファイター)のFである。

それも陸上基地での運用を主眼においた機体ではなかった。

フライング・パンケーキは軍艦から発進する「艦載機」なのだ。

このUFOを思わせる機体が現実化した背景には、1930年代前半における合衆国航空界の渇望があった。低空低速での安定性から、超高空における高速性能まですべてを満たす飛行機は設計できないか？

この一見矛盾しているリクエストに応(こた)えたのは、チャールズ・H・ジンマーマンという、全米航空諮問委員会(NACA)に勤める技師であった。

円盤翼こそそれを満たせる唯一の設計。そう確信したジンマーマンは1937年にチャンスヴォート社に移籍。そこで本格研究に着手した。

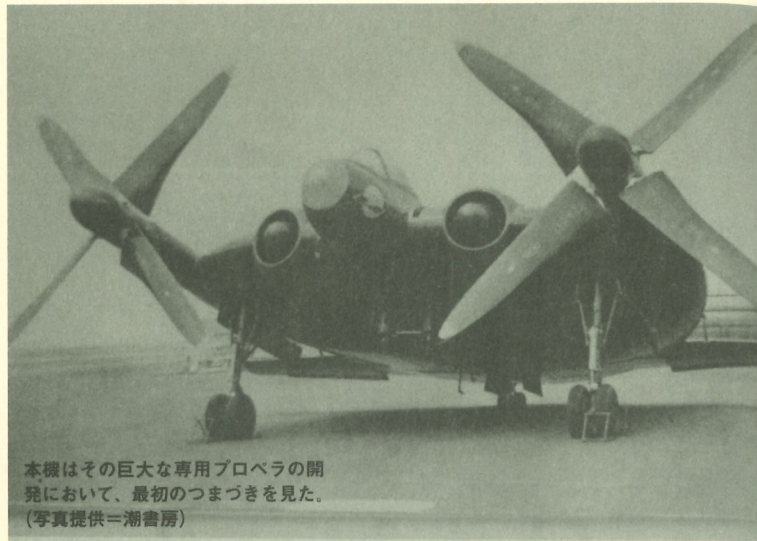
たしかに全体翼ともいえる形状ならば揚力は稼ぎやすい。だが反面、翼端失速を起こしやすくなる。

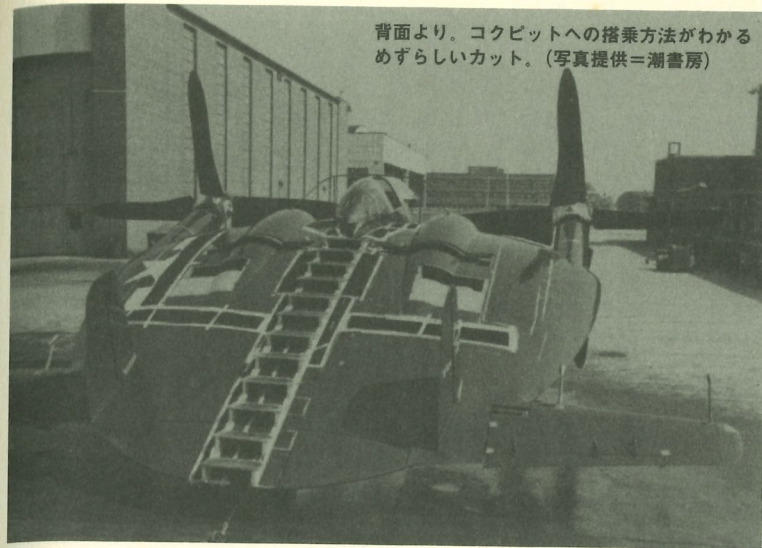
ジンマーマンはそれを避けるため、巨大なプロペラを機体の両脇に抱えるという案に行きついたのだ。

エンジン性能にもよるが、計算上は空中静止(ホバリング)から時速750キロ超の速度発揮が可能だった。失速速度も低く、6メートルの甲板があれば離着陸ができた。つまりフライング・パンケーキは現代の短距離離着陸機(STOL)の始祖鳥(しそちょう)的存在だ

●ヴォートXF5U1「フライング・パンケーキ」要目

全幅：12.5m、全長：10.58m、全高：3.83m、翼面積：21.7㎡、自重：3800kg、最大積載量：6400kg、発動機：ユンカースJumo004B-1×2、最大速度：870km/h、実用上昇限度：11450m、航続距離：1050km、武装：12.7mm機銃×6または20mm機銃×4

仰天度
有効度
現実度
間に合った度
最後に輝いた度

本機はその巨大な専用プロペラの開発において、最初のつまづきを見た。(写真提供＝潮書房)

背面より。コクピットへの搭乗方法がわかるめずらしいカット。（写真提供＝潮書房）

ったわけである。

評価機は完成したが

彼のアイデアを買ったアメリカ海軍は試作機の製作を命じた。ジンマーマンとチャンスヴォート社は1942年11月に「V173」という評価機を完成させた。80馬力の小型エンジンを2基装備した機体はテスト飛行に成功。飛行特性も認められた。

ここにアメリカ海軍は「XF5U」というナンバーを与え、プロトタイプ2機の製造を発注したのであった。

44年7月のことである。

勇んで図面に向かったジンマーマンであったが、特異すぎる機体ゆえ実現は困難をきわめた。最大の難関は4翅の特殊プロペラ「フラッピン

グ・ブレード」の開発であった。

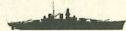
これはヘリコプターのローターとしての機能をプロペラに与えるための工夫だった。速度と安定性を両立させるための新機軸と思われたものの、非常に複雑な構造だったため、フラッピング・ブレードの開発は先送りにされてしまい、結局はコルセア戦闘機のプロペラが仮採用された。

コルセアは同じチャンスヴォート社の機体であったため、流用は容易だったのだ。

武装は12・7ミリ機銃6挺もしくは20ミリ4挺。豊富な搭載量を生かした戦術爆撃機タイプも俎上にのぼっていたらしい。

苦難の末、どうにか評価機が完成したのは1945年8月20日だった。しかし、第二次大戦は5日前に終結していた。奇怪な円盤翼は、もはや飛ぶ空を失っていたのだ。

その後も細々と研究は続けられ、フラッピング・ブレードも完成したものの、47年3月にアメリカ海軍は研究破棄を命じる。

完成こそしたが、終戦で息を絶たれた機体といえば、我が日本が誇るエンテ翼の局地戦闘機「震電」が著名であるが、ユニークな形状とあわせ、なんとなく相通じるところを感じないだろうか——。

リモコン式自爆戦車
「ゴリアテ」

無人兵器の誕生

第二次世界大戦前、一部の夢想的な軍事技術者は、やがて無人兵器が戦場の主役になると予測し、実際にいくつかの無人兵器が計画された。

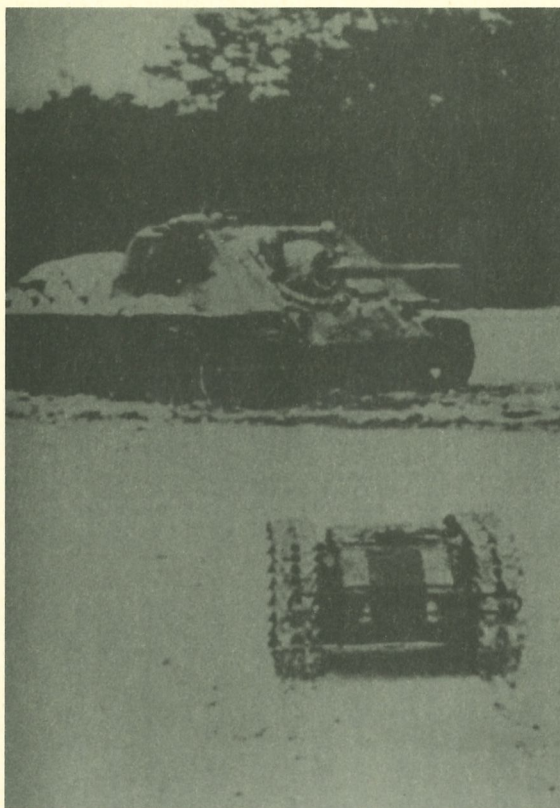
無人兵器にもっとも大きな期待が寄せられていたのは、地雷の除去や鉄条網の破断、敵陣地への爆薬設置といった、生身の人間がこなすにはあまりにも危険の大きい任務の肩代わりで、基本的には工兵が主体となって開発を進めていた。たとえば、1930年代にはイギリスのヴィッカース社が有線操縦の無人小型車両を試作したほか、ほぼ同時期には日本でも遠隔操縦で爆薬筒を設置する九七式小作業機を開発したが、どちらも実戦には投入されなかった。

●「ゴリアテ」要目
重量：0.43t
全幅：0.9m
全長：1.63m
全高：0.6m
最大速度：12km/h
装甲：10mm（車体前面）

仰天度
有効度
現実度
間に合った度
実戦参加度

また、ドイツも1939年後半に遠隔操縦の無人地雷除去車両B1を開発しており、翌1940年にはボルグヴァート社に対して障害物除去用の自爆車両を開発させている。

1942年4月に完成した試作車は、爆薬60キロを搭載する有線誘導式の小型車両で、ケーブルの有効長は800メートルあり、動力は2基の小型モーターだった。試作車は陸軍兵器局の要求をほぼ満たしていたため、多少の手直しを加えただけで、試験後すぐさま量産が開始された。

また、試作車完成前にヒトラーがこれをゴリアテと命名しているが、ゴリアテとは聖書に登場する巨人の名前で、のちに古代イスラエルの王

ソ連の自走砲に肉迫するゴリアテ。……だが、これはドイツ軍が作った「やらせ」写真である。（写真提供＝潮書房）

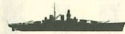
となるダビデに倒される、というのは皮肉である。

そののち、バッテリーで電動モーターを駆動する方式は、コストパフォーマンスが悪いとの指摘がなされ、量産開始からしばらくしてバイクメーカーのツェンダップ社に改良型の開発が発注された。

B4とゴリアテ

改良型は車体を一新してバイク用エンジンを搭載し、爆薬搭載量も75キロに増加した。そののち、さらに車体を大型化して炸薬量を一〇〇キロに増やした改良型も生まれたほか、無線と有人のどちらでも操縦可能な重爆薬運搬車B４も開発している。B４は一定の戦果をあげたが、ドイツ軍はより安価で手軽に使える自爆兵器のゴリアテに重点を移した。

B４の爆薬は５００キロで、対するゴリアテの爆薬は60～１００キロであり、爆発威力は比較にならないほど大きかった。だが、B４の製造コストはゴリアテの9倍強で、またゴリアテのようにトラックなどで手軽に運搬することもできなかった。

結局、第二次世界大戦当時の技術では遠隔操縦で複雑な作業をこなすことができず、ドイツがこれを自爆兵器として運用する方向に流れていったのは当然だろう。

無線操縦艦「摂津」の生涯

伊藤龍太郎

無線操縦という技術に関しては、我が日本も戦前、実用にこぎつけていた。装置を搭載したのは、海軍の標的艦「摂津」である。

「摂津」は、日本海軍最初の弩級戦艦として建造されたが、ワシントン海軍軍縮条約の結果、戦艦として保有することができなくなり、兵装が撤去され標的艦に改装されることになった。なお、同様の経緯で、アメリカ海軍では戦艦「ユタ」が標的艦となっている。

標的艦となった「摂津」は、標的の曳航が主な役割で自身が標的になることはなかった。ところが、この「摂津」が無線操縦装置を搭載され、駆逐艦「矢風」から操縦する、無人の爆撃標的艦として使用されることになる。改造は昭和12年に行なわれ、無線操縦装置や、耐爆撃用装甲板が取りつけられた。

爆撃標的艦となった「摂津」の駆逐艦「矢風」からの無線操縦は、良好な結果を見せたといわれているが、「摂津」は砲撃標的艦としても使用されることになり、昭和14年から15年にかけて再度改造を受け、その際に無線操縦装置は撤去、有人操縦方式にされた。同時に演習砲弾に耐える装甲が追加され、速度の増加も図られている。砲撃、爆撃訓練の際に標的になるとともに、操縦者は航空攻撃の回避訓練を「摂津」で受けた。この回避訓練を受けた士官の多くが、のちの太平洋戦争で戦艦や空母などの艦長となっている。特に、「摂津」艦長の松田千秋は、「航空機の爆撃はすべて回避可能」という持論すら抱いた。

戦争も末期となった昭和20年には、「摂津」は瀬戸内海の広島湾でアメリカ空母機の空襲を受けて大破、江田島の海岸に着底した。それより4年前、真珠湾攻撃の際に、上空から見た艦型は戦艦そのものだった標的艦「ユタ」が、日本空母機の攻撃を受けて沈没。他艦や基地施設に加えられるはずだった攻撃を引き受け、損害吸収の役割を果たしたのと同様、「摂津」もまた、アメリカ海軍のパイロットたちに戦艦とみなされて猛攻を加えられ、損害吸収の役割を果たしたことになる。

ただ、残念ながら奮闘むなしく、それ以上の攻撃が、燃料もなく身動きのとれない状態で瀬戸内海に残存する空母、戦艦、巡洋艦などの艦艇に加えられ、ほとんどが大破、着底してしまっている。

「ゴリアテ」は電動ダビデの夢をみるか!?

文・吉岡平
イラスト・颯田直斗

世の男子が、タミヤの模型といわれて思い出すのは、はじめはウォーターラインシリーズの戦艦「大和」、つぎは、有線リモコンの戦車プラモだろう。そして、ゴリアテはまさに、大の大人たちが、まじめな顔して作りあげてしまった、大型有線リモコンプラモだ。日本でゴリアテが密かな人気兵器なのも当然である。でも、ゴリアテには、僕たちが見習うべき、とても重要なメッセージが隠されているのだ！　吉岡先生、お願いします！

私の中学3年間はプラモ漬けの日々だったが、当時、「タミヤの三大謎」というものがあって、ごくごくローカルではあったが、同好の志が集まる度に、熱く語り合っていたものだった。

①なぜ、タミヤはウォーターラインシリーズの「三隈」を発売しないのか？

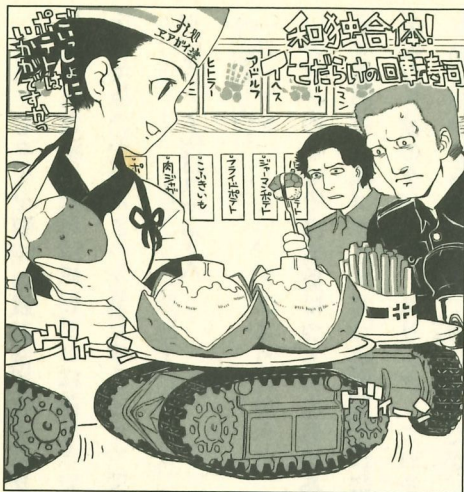
②ヤークトパンターに「ロンメル」、SU100に「ジューコフ」、AMX30に「ナポレオン」などと、勝手にネーミングするのはいかがなものか。

①に関しては「最上」「鈴谷」「熊野」まで出しておきながら、まったく解せない。極端な話、箱だけ換えればよかったのである。もっとも、そこが、タミヤの良心ともいえなくはない。ともかく日本の重巡洋艦でキットになっていないのは、「三隈」だけだったのである。数年前にようやく発売されたのだが、あまりにも機を逸したといわざるをえない。

②は、今でもマニアの酒の肴である。これが原因で思わぬ恥をかいた人も多いのではないか。私もヤークトパンターを見ると、いまでもつい「『ロンメル』が……」とか、いってしまう。もっとも、上にあげたのはまだしもマシな例。いちばん強引なのは1／25の大箱キットのⅢ号突撃砲に名づけられた「ハーケンクロイツ」であろう。ありえね～（笑）。タミヤの社史はその点どうなっておるのか、シュンサクちゃんに小一時間問いつめたい。

そして、ようやく本題。

③「ゴリアテ」を、なぜリモコンキットとして出さないのか？

実際、これほどタミヤの、あのリモコンボックス向きのキットもほかにないと思うのだが、そこのところ、どうよ？　いや、商売的にNGなことはわかってるんだけど……。

それでもタミヤ恒例の風船割りコンテストで、「ロンメル」や「ジューコフ」に混じって（砲身の突き出た駆逐戦車は風船割りに強いというのは、当時の常識です）雄々しく奮戦する「ゴリアテ」を見てみたかったような気もする……って、スケールはどうなるの？　まあ、1／6くらいか。

ダビデくんはユダヤ人

「ゴリアテ」くらい、どのように使われ、どれくらいの戦果をあげたのかわかっていない兵器も珍しい。そのくせその名前はつとに有名である。ドイツ語では、正しい発音は「ゴライアート」になる。英語だと「ゴライアス」。旧約聖書に登場する、ペリシテ（パレスチナ）人の巨人である。まだ王になる前のダビデが、スリング（これを投石器と訳すのは誤訳。実際には石を挟み、頭の上で振り回して投げる投石紐）で殪したのだが、ほんのやられ役のくせに、欧米人はこの名前がいたくお気に召したようで、巨人の代名詞となっている。世界一のオオハナムグリやカエルなど、巨大な生物の名に冠されている。宮崎駿監督も大好きなようで『ラピュタ』に登場する巨人飛行艇は有名だ。

　とにかく、巨大なものの代名詞である。ん？　巨大。だったらなんで、あんな小さなリモコン兵器に「ゴリアテ」と名づけたのかという疑問が浮かぶ。それに関し、一般的にいわれている説はこうだ。曰く、巨大な戦車をも一撃で倒す小さな兵器なので、巨人ゴリアテを殪すダビデに見立て、当初は「ダビデ」と名付ける予定であったのだが、ダビデはイスラエルの王、つまりユダヤ人なので、

ヒトラーから待ったがかかった。それで、ダビデの敵であるゴリアテの名がそのままついたのだ云々……。御節ごもっともな説明である。自分も長いことこの説を信じていたのだが、どうやらこれは「ガセビア」であるらしい。

　そもそもゴリアテは、戦車に対してはほとんど用いられていない。もっぱら障害物撃破用か、地雷撤去用なのだ。考えてみればドイツには、こんなリモコン爆弾に頼るまでもなく、優秀な戦車や対戦車兵器はたくさんあったからね。だいたい切羽詰まっても「ゴリアテ」を使うくらいなら、パンツァーファウストかパンツァーシュレッケを使ったほうが効果的なことは、ちょっと考えればわかる。

　結局のところ、なぜ「ゴリアテ」なのかは謎のままだ。まあ、タミヤのリモコン戦車に比べたら巨大だわなって、あくまでそこにこだわるか筆者……。

命懸けのロボコン

「ゴリアテ」を見ていて連想するのは、ロボコンである。石ノ森先生のアレではない（全然関係ないが、私はロビンちゃんよりロビーナちゃんのほうが好きだ）。ロボコンはロボコンでもアクセントが異なる。ロボットコンテストの省略形のロボコンだ。

　全ドイツ高等専門学校対抗、障害物撃破ロボットコンテスト。優勝者には総統閣下から鉄十字勲

章授与……なんてイメージが、どうしても「ゴリアテ」にはつきまとっているんですけど、そのへん、どうなっておるのでしょうか？

650m（！）ものケーブルをズルズル引き摺っているとか、最初はラジコンだったけど、あまりにもったいないのでケーブル式になったとか、建物の陰に入るともう操縦不能（あたりまえだ！）とか、同じ理由で電動モーターも非効率的だから、ツェンダップのオートバイのエンジンに換装してみたりとか、そういう場当たり的な改修も、まさにロボコン的。使ってみる前に気づけ！

じっさい、あのドイツがこんな兵器を真剣に作っていたというのが信じられない。これはまったくの当て推量だが、ドイツ当局は、二線級の技術者を遊ばせておくくらいならという理由で「ゴリアテ」を作らせてみたのではないだろうか？　材料も、I号戦車のパーツを筆頭になにやら廃物利用くさいし……。そう考えると、ますますもってロボコン的。ロボコン、ロボコン、ロボコン0点……って、ガンツ先生ごめんなさい。加藤夏希いいよね。

というわけで、あまり記録が残っていないので、好きなことをつらつら書き連ねてしまったが、「ゴリアテ」にとって、これはむしろ幸いなこと。兵器でありながら、どこかのほほんと、牧歌的な匂いがする。それに、二線級とはいえ、こんな高価なものを、たかだか地雷撤去に使う鷹揚さも、さすがはドイツ（「ゴリアテ」の名誉のためにつけくわえておけば、たった1個の地雷と道連れにするのではなく、搭載した爆薬による連鎖爆破で、撤去効果は絶大）。全ドイツ大学対抗地雷撤去ロ

ボコンは、僕らの血と汗の結晶だ……って、まだこのネタで引っ張るか。

ところで、多くの日本のマニアがゴリアテの存在を知るきっかけになったのは、おそらく新谷かおるの戦場マンガであろう。ドイツの武装親衛隊員と米軍捕虜が一致団結して、罪もない村人に対し狼藉三昧をはたらく山賊化した脱走兵の群れ（持ち逃げした兵器で強力に武装している）に立ち向かうという、『七人の侍』パターンの物語だ。このなかで、主人公グループのティーガーは、一瞬の油断から山賊の操るゴリアテ（作中ではゴライアートと表記）にやられてしまうのである。強い印象を残したのも当然だ。もっとも、後から考えると、なんでわざわざゴリアテを持って逃げたのかよくわからない。ほかにいくらでも、持ち去る物はあるだろうに。たまたま、実験部隊が脱走したのか？　はたまた、マニアの山賊か？

ともかく、「ゴリアテ」はどこまでも牧歌的な、愛すべき兵器である。少なくとも同時代のどこかの国のように、刺突爆雷、通称アンパン地雷でもって敵戦車や塹壕に肉薄、肉弾もろとも……という自己犠牲的精神に頼った兵器と比べたら、それこそ雲泥の差でしょうね。いやいや、比べること自体、ドイツに対し失礼か。「ミステール」や「V1号」と「桜花」を比べるようなものだ。

そもそもリモコン兵器という発想そのものが、人命尊重の観点から出発していることを、我々は肝に銘ずるべきなのでしょうね。

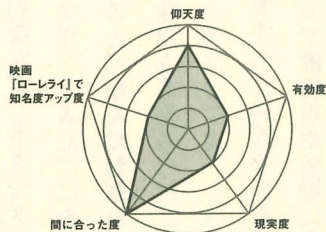
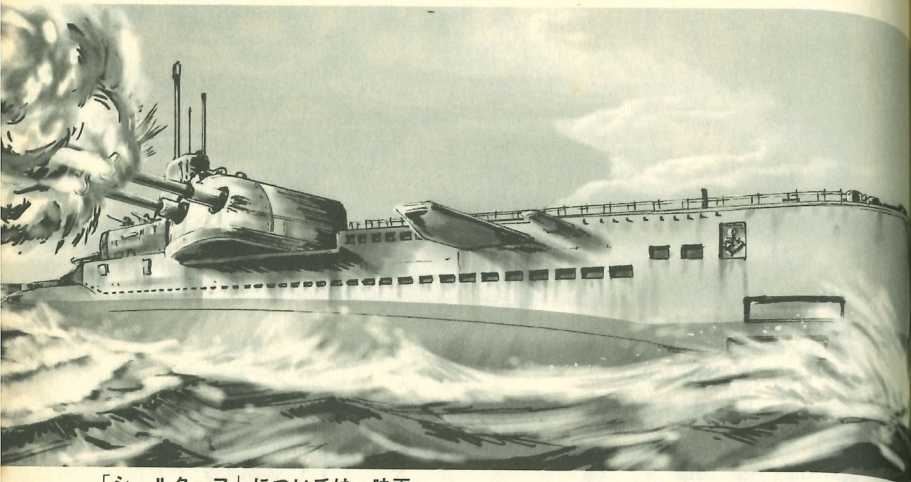
ドイツ万歳！

各国の奇想軍艦たち

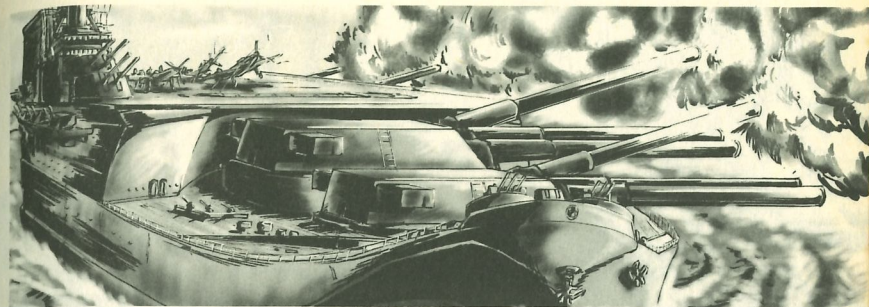
巨砲潜水艦／戦艦空母

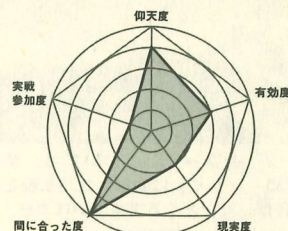
巨砲潜水艦「X1」（イギリス）「シュルクーフ」（フランス）

第一次世界大戦中、イギリス海軍は30センチ砲を装備した潜水艦を建造したが、就役後まもなく終戦となり、実戦では威力を発揮できなかった。

だが、潜水艦に強力な火砲を搭載するという発想は関係者の関心を呼び、イギリス海軍は1924年にも13センチ連装砲塔2基を装備した「X1」を完成させ、10年後の1934年にはフランス海軍も20センチ連装砲を搭載した「シュルクーフ」を建造、就役させた。これらの潜水艦はいずれも大きな航続能力を持ち、火力を活かした通商破壊戦を実施することとなっていたようだが、実用性に乏しいという欠点があった。結局、「X1」はロンドン軍縮条約の際に解体され、「シュルクーフ」は1942年にカリブ海で米商船「トムソンライクス」と衝突、沈没した。通商破壊を目的とした潜水艦が、商船に沈められるという皮肉な最後だった。

●「シュルクーフ」要目
基準排水量：2880t（水上）、4304t（水中）、全長：110m、全幅：9m、最大速力：18.5kt（水上）、10kt（水中）、出力：7600hp（水上）、3400hp（水中）、航続力：10000浬（10kt）、安全潜航深度：80m、武装：55cm魚雷発射管×6（艦首4、中央上構内2）、40cm魚雷発射管×2（艦尾）、50口径20.3cm連装砲×1、37mm単装機関砲×2、13.2mm連装機関銃×2、乗員：118名

「シュルクーフ」については、映画『ローレライ』に登場した潜水艦といえば、ピンとくる方も多いはずだ。

戦艦＋空母＝戦艦空母!?

第一次世界大戦後の軍縮条約時代には、艦艇の保有に厳しい制限が課せられたため、航空戦艦、あるいは航空巡洋艦という、航空機運用能力と強力な主砲火力の両方を兼ね備えた艦艇の建造が真剣に検討された。日本海軍は、空母「蒼龍」の設計にあたって20センチ砲や15センチ砲を装備した案を検討しており、アメリカ海軍もほぼ同じ能力を持った航空巡洋艦の設計案

イラストは活躍想像図だが、ソ連艦艇ならば政治将校の無茶な命令により、搭載機の損傷もかまわず主砲砲撃が行なわれる可能性も高い……。

●ギブス&コックス社が計画したとされる戦艦空母の要目
●A案
排水量：66074t、武装：46㎝連装砲×4、12.7㎝連装砲×14、航空機：36機
●B案
排水量：71850t、武装：40㎝3連装砲×4、12.7㎝連装砲×14、航空機：36機

を検討していた。そのほか、イギリスのヴィッカース社は1923年と26年に輸出目的の航空戦艦案を発表しており、ドイツがZ計画という建艦計画をまとめた際にも航空巡洋艦の設計案が検討されたようだ。また、アメリカのギブス&コックス社がソビエトに売りこんだ設計案は、46センチ主砲と飛行甲板の両方を兼ね備えるという、気宇壮大(きうそうだい)なものであった。

そのほか、第二次世界大戦中の日本海軍は、攻撃機をカタパルト発進させる潜水空母を計画し、「イ四〇〇」型や「イ一三」型として完成させた。しかし、すでに戦局は日本にとって極めて不利な状態となっており、攻撃目標が二転三転した末になんとか出撃したものの、目標海域に向かう途中で日本が降伏したため、有泉司令は自決、同艦も洋上降伏した。

しかし、各国がまとめた航空戦艦や航空巡洋艦の設計案は、いずれも過大な要求を無理やり詰め込んでいたため、火力や航空機搭載能力が中途半端だった。しかも、なかには転覆の危険性すらはらんだものもあり、これらの設計案はいずれも建造すらされなかった。ただ、戦艦空母や海底戦艦というアイデアは、1930年代から21世紀の今日に至るまで、多くの人々のイマジネーションを刺激する存在として、SFやファンタジー作品の定番兵器となっている。実用性とは無縁の夢想兵器としては、もっとも活躍している種類のひとつであろう。

ドイツの水中高速型潜水艦

伊吹秀明

航空機やレーダーの発達により、潜水艦の被害が急増したドイツ海軍では、水中速度と潜航時間を大幅に向上させた新型Uボートの開発に着手した。それがワルター（ドイツ語読みだとヴァルター）機関搭載型と大容量電池搭載型のUボートである。

過酸化水素を利用したワルター型は電池を充電するために浮上する必要がなかったが、技術的に実用化が難しく、電池搭載型のエレクトロ・ボートが「ＸＸⅠ型」として優先的に建造されることになった。

新型Uボートは、従来の潜水艦をはるかに凌駕する兵器として期待されたが、連合軍の爆撃によって工場施設や輸送網が破壊され、建造は遅々として進まなかった。ようやく完成させた120隻も油圧系などにトラブルが続出して戦列化が遅れた。結果として、終戦直前にわずか2隻が哨戒任務に出撃したのみである。

エレクトロ・ボートには小型の「ＸＸⅢ」型もあり、こちらは大戦末期に英本土沿岸で商船5隻撃沈の戦果をあげている。

もし、水中高速潜水艦が実戦を行なっていたなら!?

文・伊吹秀明
イラスト・小だまたけし

日本の「伊四〇〇」型潜水艦が、現在の戦略型潜水艦のハシリだとすれば、ドイツの水中高速潜水艦は、現在の攻撃型潜水艦のハシリともいえる艦だ。かなりの艦が実戦状態にあり、終戦直前にそのうちの1隻は攻撃可能な状態で英国艦艇を追尾していたという記録がある。追尾されていた英国海軍艦艇の艦長は戦後これを知らされて、驚愕したという。かの艦が実際に戦闘を行なっていたらどうなっていただろうか?

「私が唯一怖れていたのは、Uボートだ」とウィンストン・チャーチルが記したように、ドイツ海軍の潜水艦は、島国イギリスをあと一歩まで追いこんだ。

第二次大戦は各国の技術の戦いでもあったが、潜水艦をめぐる攻防はその最たるものだろう。水中探信儀アスディックが登場すれば、吸音材アルベリヒや対ソナー・デコイが対抗手段として開発される。メートル波レーダーには、逆探メトックス。センチ波レーダーには、逆探ナクソスや電波吸収材タルンマッテと、めまぐるしい技術戦が展開した。

最初のうちは有利に戦いを進めたUボートは、次第に劣勢に追いこまれていく。水中に身を潜めることが最大の武器となる潜水艦ではあるが、その潜航時間はあまりにも短く、速度も遅いことが致命的となったのだ。

起死回生をねらったドイツ海軍は、水中高速潜水艦を開発し、大戦末期に投入した。それは戦争の形態を変えたかもしれない革命的な兵器だった。

見えない敵

その空母がもう長くはないことは、誰の目にも明らかだった。全長２１２メートルの船体は炎と黒煙に覆われ、傾斜した飛行甲板からはバラクーダ艦攻がむなしく海面に滑り落ちていく。イギリス海軍の最新鋭空母「コロッサス」は、わずか5カ月の艦歴を終えようとしていた。

付近に敵影はなく、海中からの攻撃に間違いなかった。対潜水艦戦闘を伝えるブザーが全艦に鳴りひびく。護衛駆逐艦や対潜コルベットが襲撃してきたUボートを追った。

「往生際の悪いやつだ」

駆逐艦「エスカペイド」のスミス艦長は、折れ曲がった軍帽に手をやり、洋上をにらんだ。目と鼻の先のドイツ本土はすでにガレキの山であり、ベルリン陥落も時間の問題である。

「だが、骨のあるやつでもある」

祖国が敗れ去ろうという間際になっても、圧倒的な物量を誇る連合軍相手に向かってくる。最後の敵にふさわしいとスミスは思った。

「エスカペイド」は歴戦の駆逐艦だ。E級の姉妹艦のほとんどは沈んだが、同艦は生き残ってきた。戦訓からその姿は刻々と変わり、1番砲が撤去されてヘッジホッグに、4番砲と後部発射管が撤去されて爆雷投射機と多くの爆雷が搭載された。さらに45年初頭には新型駆逐艦さえ持っていない最新の三連装対潜迫撃砲スキッドまでもが実験装備されていた。いまや英海軍トップのUボート・キラーといっても過言ではない。

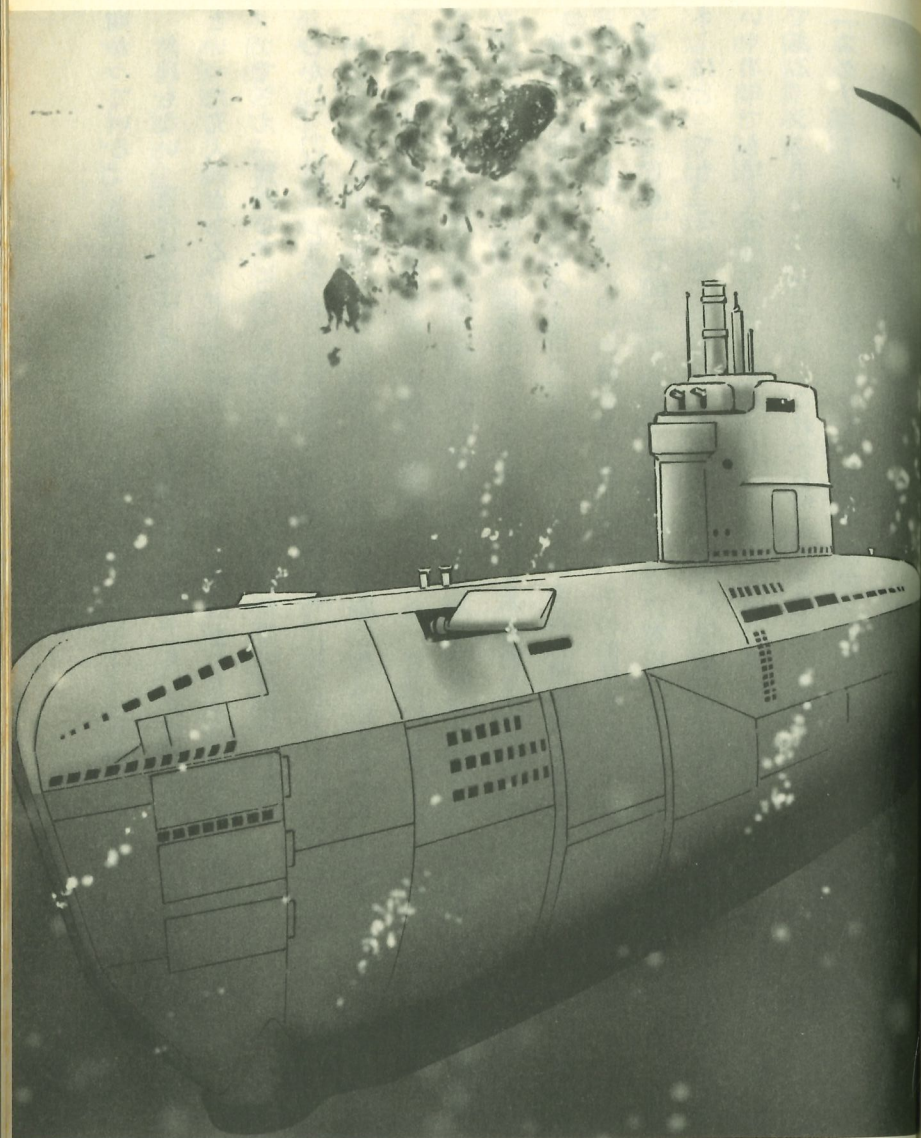
「絶対に逃がさないぞ」

スミスは海中の敵に闘志を燃やして、ソナールームからの報告を待った。

本物の潜水艦

ベテランの駆逐艦長スミスは、ひとつの判断ミスを犯していた。Uボートは、逃げようとはせず、まだ戦おうとしていたのである。

「スクリュー音、遠ざかります」

自らもレシーバーを当てて洋上の様子をうかがっていたアダールベルト・シュネー少佐は、ほくそ笑んだ。こちらの居場所を探る探信音はひっきりなしに聞こえるが、連中は見当違いのところに

向かっている。
　無理もない。連合軍には、受け身にまわったUボートといえば海中をノロノロと逃げまわるだけ、といった先入観がある。ドイツ海軍トップ（そしていまやドイツ第三帝国総統）のカール・デーニッツでさえ「貧弱なアヒル」と呼んでいたほどの頼りない存在である。
　しかし、「白船」というあだ名を持つこの最新鋭艦「U2511」はまったく違っていた。
　1945年4月30日、ノルウェーのベルゲンを出港した「U2511」は、2日後にスコットランド海岸沖で英国の対潜哨戒群を簡単に突破していた。普通のUボートならば、水中を5ノットで走ればわずか1時間で電池が切れたものだが、「XXI」型（21型）の「白船」はその時間を16ノットで駆け抜けたのだ。世界中のどんな潜水艦にも不可能な芸当だった。
　高速化の秘密は、従来の3倍の容量を持った水中大馬力電動機と流線形船体にある。さらに敵の聴音装置に気づかれないぐらいの静かさで航行でき、その船体をソナーで探知することは難しかった。
　これまで「U6」「U60」「U201」を指揮し、17隻12万2987トンの戦果をあげてきたシュネーにとっても、これでようやく「本物の潜水艦」に出会えたとの実感があった。これがあと1年、いや半年でも早く実用化していたら……。いまや本国の軍港にも連合軍が迫りつつある末期的状況である。シュネーたちにしても、これから帰るべき港があるかどうか。
「スクリュー音、接近。1隻がまっすぐ本艦に向かってきます」

「ふん。敵にも勘の働くやつが残っていたか。魚雷は?」
「自動装填完了まであと3分」
「ボールド射出。深度50まで上昇。静かにやれ」
　最後の一言はよけいだったかもしれないが、戦うのは機械ではなく人間なのだ。その戦いもこれが最後になるだろう。この場に立ち会うことができ、シュネーは誇りを感じていた。

最後の一撃

「間違いなく、やつは新型だ」
　数日前、英本土近海で暴れまわったという小型の高速潜水艦に関する交戦記録を「エスカペイド」のスミスは読んでいた。
「同じやつか、あるいはもっと大型のやつだ。いずれにせよ、浮上するまで待っていては、こちらがやられる。アスディック（ソナー）の回復はまだか?」
「敵潜をロストしてから6分が経過します。もうそろそろ」
「再探知できしだい、ヘッジホッグでいぶり出せ。上がってきたらスキッドで仕留める」
　ドイツ軍が使用する対ソナー欺瞞用の囮「ボールド」は、およそ6分間で効果が失われる。「エスカペイド」は全艦の対潜兵器をスタンバイして、Uボートの出現を待ち受けた。

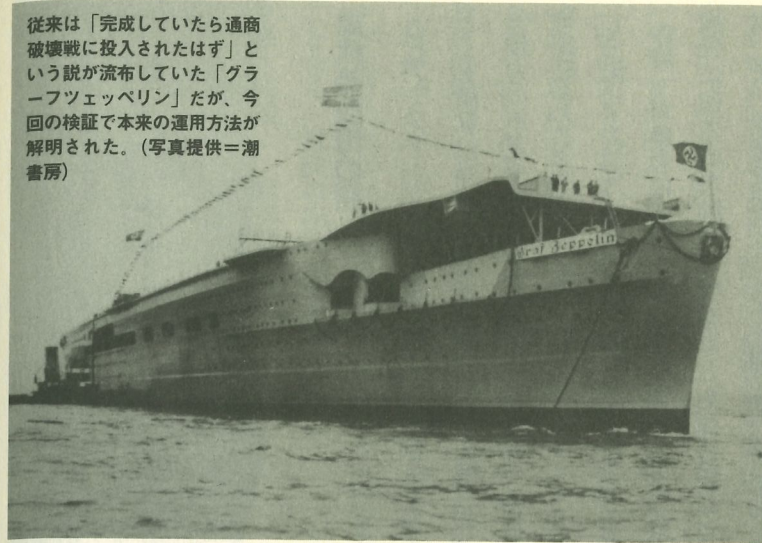
「ソナールームより、艦長。反響音を確認」
「よし、捕まえたぞ！」
スミスの読みどおり、敵潜は通常の3倍の速度で移動していた。
「別のスクリュー音を探知。……1本、いや、2本。魚雷です！　追尾してくる！」
すでに「エスカペイド」は、音響デコイのフィクサーを曳航していた。自艦のスクリュー音と同じ周波数で、より大きな音を出す囮に、ドイツ軍の誘導魚雷は騙されるはずだった。
だが、それはT5魚雷ならば、の話だ。「U2511」が放っていたのは、改良型のT11ツァウンケニヒ・ツヴァイである。50メートルの深さから発射できるT11は、音響デコイに気を取られることなく、目標に向かってきた。
「最大戦速！　回避急げ！」
間に合うはずもない。スミスは衝撃で床に叩きつけられた。必殺の魚雷は、「エスカペイド」の艦尾を吹き飛ばし、2本目が左舷後部をえぐりとった。大爆発が起こり、駆逐艦が海面から姿を消すまで10分とかからなかった。
慌てふためく英対潜艦艇の群れを振りきり、最後のUボート「U2511」は海中深くにその姿を消していった。

ドイツ・幻の空母
「グラーフツェッペリン」

重武装空母の謎

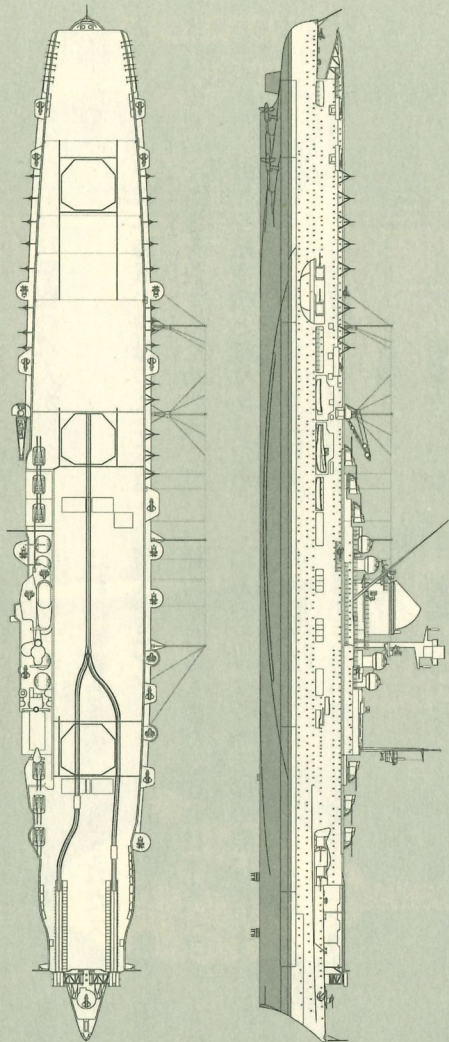
「グラーフツェッペリン」は、1938年よりドイツ海軍が空母として建造していた艦だが、労働力の不足や空軍の非協力などにより、結局未成艦となってしまった。
一説によれば、その設計には日本海軍の空母「赤城」が参考にされたといわれているものの、後世に残された図面や模型などを見る限りでは、その影響を見出すことは難しい。それほどまでに本艦の設計は、独特なものであった。
まず本艦には、15センチ連装砲6基、15センチ単装砲8基、10・5センチ連装砲5基、37ミリ連装機関砲11基、20ミリ機関砲28基という重武装が施されている。これは、空母というより

●「グラーフツェッペリン」要目
基準排水量：19250t
最大排水量：28100t
全長：251.5m
全幅：31.3m
最大速度：32kt
出力：200000hp
航続距離：8000浬（19kt）
武装：15cm連装砲×6、15cm単装砲×8、10.5cm連装砲×5、37mm連装機関砲×11、20mm機関砲×28
乗員：1760名
艦載機：40機

従来は「完成していたら通商破壊戦に投入されたはず」という説が流布していた「グラーフツェッペリン」だが、今回の検証で本来の運用方法が解明された。（写真提供＝潮書房）

対艦戦闘を重視した重巡洋艦に匹敵する武装であった。

飛行甲板には3基の大型エレベーターがあり、これは主翼を広げたままのユンカースJu87シュトゥーカ爆撃機を、甲板上へ持ち上げる充分な広さを持つ。艦首には2基の台車式カタパルトがあり、装備を懸吊したままの艦載機を前方に射出可能である。これによって、短時間により多くの艦載機を展開することが可能だ。

計画当初、採用された40機のうちわけは、メッサーシュミットBf109T戦闘機、ユンカースJu87シュトゥーカ爆撃機、フィゼラーFi167雷撃機であった。その後、戦闘機はBf109Gを経て43年にBv155戦闘機へ、Ju87はC型からE型へ、複葉機のFi167は時代遅れと判断され、搭載を見送られた。

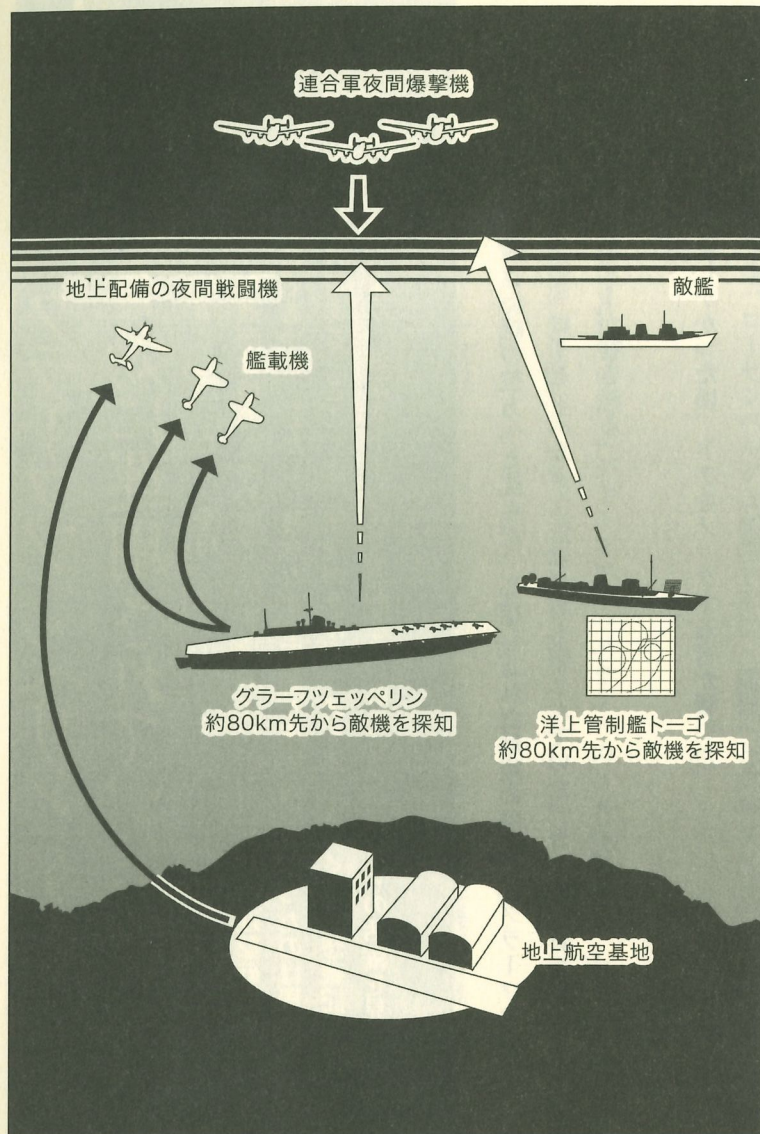
「グラーフツェッペリン」
1945年4月に沈没した本艦は、2006年に沈没位置が判明して反響を呼んだ。

驚異の管制能力

それ以後、艦載機について明確な計画は策定されなかったが、フォッケウルフFw190やMe262といった戦闘攻撃機の導入が検討された可能性が高い。

そもそも本艦は、日本海軍の空母のように遠距離から航空戦闘で雌雄を決するための艦ではなく、極近距離で敵艦や航空機と渡りあうための航空巡洋艦としたほうが、正しい。さらに本艦には対水上レーダーと対空監視レーダー、くわえて4基の目標捕捉レーダーが搭載されている。これは周囲の監視やレーダー射撃だけでなく、洋上で航空機の飛行管制を行なうための装備である。これらの装備を用いて、艦載機だけでなく地上基地の友軍機をも指揮し、夜間も含め、対艦、対空戦闘を実施する。つまり、ドイツ領土に近い海域にいるほど、その力を最大限に発揮しえるのである。

また特殊装備として、艦首に2基のフォイト・シュナイダープロペラが搭載されている。これは艦底と垂直に設置されたスクリューで、現代ではタグボートに搭載され、微細な機動に使用されるものだ。これは本来、ライン川河口にあるドックへの入渠の際に使用する目的でつけられたものだが、これにより、本艦は大型艦とは思えないほどの微細で俊敏な機動を可能とした。

結論を述べよう。本艦が最大の能力を発揮できるのは、遠洋での通商破壊戦ではない。

ドイツ近海での対空、対艦迎撃戦こそが、本来の主戦場なのである。

もし、「グラーフツェッペリン」が有効に運用されていたなら!?

文・佐原晃
イラスト・松田大秀

前項でも記したが、空母「グラーフツェッペリン」はよくいわれていたような通商破壊のための艦ではなく、ドイツ近海における迎撃戦で使うべき艦であった。しかし、残念ながら同艦が未完成に終わったのは周知のとおりである。ここでは、無念のゲルマン魂を満たすべく、空想戦記をお届けしよう。波高きドーバーで展開する、戦乙女と騎士たちの活躍を見よ!

空を紅に染め、太陽は海峡の彼方へと沈んだ。しばし訪れた静寂の刻を、SP盤に針を落とすと、「グラーフツェッペリン」艦長フリードリッヒ・ローゼンベルグ大佐は今宵も楽しんでいた。艦長室いっぱいにワーグナーが響き渡る。

「そろそろ……だな」

第4楽章も中盤に差しかかった頃、ドアをノックする音が響いた。

「艦長、お客さんです」

副長が顔をのぞかせる。ローゼンベルグは制帽を手に、艦橋へと向かった。

戦乙女と騎士の戦場

すでに艦橋は喧騒に包まれていた。「グラーフツェッペリン」の9人の戦乙女、レーダーオペレーターたちが思い思いに指示を出している。

「ブリュンヒルデ准尉、状況は?」

「『トーゴ』のヴィルヘルミナ准尉より入電。敵爆撃編隊、3時方向より20機来襲。距離80」

「トーゴ」とは、索敵レーダーと目標追尾レーダーを搭載した航空指揮艦だ。

「よしっ、迎撃部隊発進」

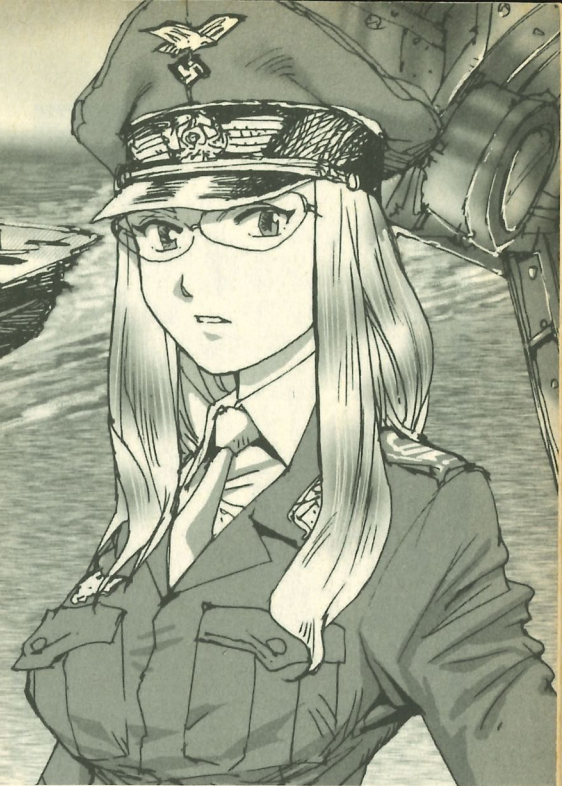
「ノボトニー中隊、発艦準備願います」

「JV44出撃願います」

ゲルヒルデ軍曹とオルトリンデ軍曹が矢継ぎばやに指示を出した。

「コマンド・ノボトニー了解」

「こちらミッキーリーダー。了解した」

2機のMe262ジェット戦闘機が、エレベータから上がってくる。両主翼下にはR4M空対空ロケット弾10基が並んでいる。艦首を風上に立てる必要はない。すさまじい勢いで機体がカタパル

ト射出される。離艦した機体は2基のRATOに点火し、急加速で上昇を開始した。

3個中隊が、見る見る虚空へと消えていく。そしてそれを追いかけるように、上空をさらに3個編隊のMe262が航過した。

「ノボトニー少佐。目標まで5キロです」

「ノボトニー了解。視認した。仕掛ける」

先行したノボトニー隊がダイブに入った。地獄のローラーコースター、この攻撃から逃れられる敵はいない。そしてこの空を緋色に染めて、敵機の反応がレーダーから消えた。

「ミッキーリーダー。続けて攻撃願います」

「こちらミッキーリーダー。了解した」

JV44所属のMe262が、残存機を片づけるためにダイブに入った。翼が闇を斬り、爆炎が雲を焦がす。

「こちらミッキーリーダー。全機撃墜、帰投する。今度デートしようぜ、お嬢ちゃん」

「えっ？……あの……」

オルトリンデ軍曹の頬が、赤く染まった。

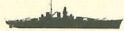
「中将、戦闘中に指揮を乱さない。それとウチの娘はやらん」

無線機の向こうから、アドルフ・ガーランドの豪放磊落(ごうほうらいらく)な笑い声が聞こえ

る。
　呆れるローゼンベルグの横で、ブリュンヒルデ准尉がなぜかペンを握り折っている。

「伯爵」奮戦す

「艦長、新たな編隊を確認。中型機多数」
「洋上に感あり。敵艦です」
　どうやら敵は、邪魔な本艦と「トーゴ」を潰しにかかってきたようだ。
「全艦、対空対艦戦闘準備っ！」
　15センチ砲がいっせいに旋回し、対空砲が仰角を上げる。フランツ・シャル大尉の機体を先頭に、9機のMe262が紅塵を撒く。ボーファイターとモスキートの編隊が迫りくる。その後方に、巡洋艦が見える。
　対空砲がいっせいに機関砲弾を上げ、僚艦「トーゴ」もネーベルベルファー対空ロケット弾を放ち応戦する。敵機が金属片と木片をまき散らし、爆散、波間へと消える。
「雷跡3つ、来ます」
「フォイトシュナイダー・プロペラ始動っ！　緊急回頭っ‼」
　「グラーフツェッペリン」の艦体が、重心位置を中心に小さく弧を描いて転回する。大型艦とは思えない機動で、3本の魚雷を紙一重でかわす。この動きに動揺したボーファイターを対空砲が容赦なく刻む。
　さらに航過した敵機の群れに、シャル大尉の編隊が襲いかかる。
　その時、艦体に衝撃が走った。敵重巡洋艦の砲撃が命中したのだ。
「応戦しろっ！　弾幕を張れ」
　12門の15センチ砲が、一斉に火を吹く。
「こちらファルケ6、ゲルハルト・バルクホルン少佐だ。突貫する、道を開けろっ！」
　3機のMe262が敵重巡に急降下をかけた。バルクホルン大尉のA1aU4が機首の50ミリ砲を放ち、僚機が投下したBT700対艦爆弾が、尾部の安定翼を展開した。3機の航過と同時に敵艦の艦橋が炎に包まれ、艦底の真下で湧き起こった2つの爆発が、艦体を3つにねじり切った。敵重巡は黒煙を濛々（もうもう）と上げて、波間へと消えていった。
　そして東から昇りくる陽光。今夜も彼らは祖国を護りきったのだ。

おわりにかえて

ここまでさまざまな兵器を紹介してきたが、「最強の秘密兵器」とはなんであろう？　巨大戦艦？　超重戦車？　はたまた原子爆弾？　違う。間違ってはいないが、それだけではない。

もちろん、回答はいろいろだろう。たとえば「システム化された戦争のスタイル」はどうだろう。アメリカ機動部隊の輪形陣は、艦艇の数が多いから強力なのではない。艦隊を守るためにやるべきことが、きちんと定められているから強力なのだ。

そのための指揮を統括する「ＣＩＣ」。まったく目立たないが、「発明」と呼ぶにふさわしい。

そして欠かせないのがレーダー、ソナーなどの「裏方兵器」だ。大戦艦が舳先をそろえて進撃しようとも、敵を発見できなければパレードにすぎない。

さらに、兵器を扱う人間を救う「ペニシリン」などの医薬品。このおかげで助かった兵士が、どれだけの数にのぼったか。

これらはいずれも、勇ましさとは無縁である。「ペニシリン」にいたっては、兵器ですらない。しかし、戦史をひもとけば、それらが勝利をもたらした例は枚挙にいとまがない。こういった一見地味な発明の積み重ねこそ、「真の秘密兵器」だと考えれば、戦史は新たな一面を見せはじめるのではないか。世界はひらめきとそれを実現させる知性に満ちている。

本書を読んで知の世界に遊ぶとともに、どうかそんなことも考えてみていただきたい。

別冊宝島編集部

著者紹介

●**青山智樹**（あおやま・ともき）
1960年東京生まれ。作家。戦記関係の著作多数。超兵器の本場はイギリスですね。ドイツはいろいろ持っていながら戦争博物館は「ボクたちこんなことしてしまいました」感があふれているのに、イギリスでは「ガッハッハッ。見ろ、分捕り品もあるぞ」的に自分たちの超兵器とドイツのが並べてあります。超兵器マニアはイギリスへゴー！

●**伊藤龍太郎**（いとう・りゅうたろう）
1964年静岡県磐田市出身。ゲーム企画、プロデュースの傍ら文筆業を営む。『日本・秘密兵器大全』に続き、この「世界編」にも書かせていただいた。役立たずの秘密兵器ほどいとおしいのは、役立たずだからこそ殺戮の道具にならないからだろうか。

●**伊吹秀明**（いぶき・ひであき）
北海道生まれ。作家。主な著作に『第二次宇宙戦争』『出撃っ！猫耳戦車隊』『涙海の鋼鉄葬』『天空魔弾』『マーズアタック・ガール！』『舞-HiME★DISTINY～龍の巫女～』などがある。

●**内田弘樹**（うちだ・ひろき）
日本最少年の仮想戦記作家（多分）。近著に『紅蓮の翼』『爆風死闘の果て』（学習研究社）。

●**陰山琢磨**（かげやま・たくま）
でぶで子持ちの、巨大メカフェチ見参（ぜへぜへ…糖尿が…）。まぁ。ど～考えたって、飛べるはずないゼンガーを「無理から飛ばしてやる！」ことにしました。むろん、僕がペーネミュンデのDr.より、頭がいいわけありません。でも、僕には最強の武器があります。〝あと知恵〟です。

●**川又千秋**（かわまた・ちあき）
【近況】最近、台湾にはまっている。第一の目的は食べ歩きだが、各地に足をのばし、軍事関係の展示や現用兵器を見学して回っている。今年は、SF大賞受賞作『幻詩狩り』の台湾語（繁字体）版が出版予定。

●**小岸元**（こぎし・はじめ）
職歴多数、本職不明。秘密兵器大好き人間。人類の偉大な英知を集めた秘密兵器の数々。いいんです。トホホでも。今はダメに見えても、将来そのアイデアは必ず役に立つ!!（かもしれない）

●**佐原晃**（さはら・あきら）
いろものメカ研究家&メカに関する文筆家。著書に『日本陸軍の試作・計画機1943～1945』（イカロス出版）などがある。近刊は『迅雷計画』（学研）。

●**霜方光造**（しもかた・こうぞう）
成人男性向漫画家、兼モデラー。日本およびアメリカの成人雑誌で漫画を執筆し、文字どおり世界を股にかける。近年、1／144ハウニブの模型・イラスト・解説を製作したためか、命を狙われることも。次は「機甲円盤娘ハウニブちゃん」で再会を……。

●**鈴木ドイツ**（すずき・どいつ）
ハイブリッド戦車はポルシェ博士の専売特許ではなく、WWI末期に開発されたフランスのシャール2Cもそうでした。WWIIでドイツ軍を迎え撃つべく出動したが、戦場までたどり着けずに故障。自体爆破されたとか。南無……。

●**林譲治**（はやし・じょうじ）
SF作家。過日のことだが無人探査機はやぶさ関係の研究者の方々と、ある集まりで話す機会があった。プロジェクトというのは科学であっても組織の力学が存在することを再確認。やはり現場だな。

●**堀場亙**（ほりば・わたる）
プロフィールを依頼されると、いつも困る。はたして自分が何者であるのか、いまだに自分でもよくわからないせいだ。40にもなってなにを青臭いことを……と自分でも思う。きっとあれだな。寝てる間に目玉の大きなちっちゃいヤツに円盤に連れていかれて、大事ななにかを取られちゃったんだ。そうだ、そうに違いない。

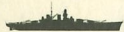
●**松代守弘**（まつしろ・もりひろ）
ただのサヨクには興味ありません。このなかにフェミファシ、プロ市民、壷信者、ブサヨがいたら、あたしのところにきなさい。以上。（『松代守弘の憂鬱』宝川書店刊より）

●**松田孝宏**（まつだ・たかひろ）
フリーランスのライター、編集者。主な仕事に『ミリタリー・クラシックス』（イカロス出版、寄稿）、『中国的天空』（大日本絵画、編集）など。太平洋、大西洋の両戦線における秘密兵器を扱えて、『奇想艦隊』生き残りとしては本懐を遂げた思いです。

●**山本義秀**（やまもと・よしひで）
昭和35年生まれ。山口県出身。模型デザイナー。専門は帝国海軍が使用した兵器全般。著作は『日本海軍艦載兵器大図鑑』（共著・KKベストセラーズ刊）。今回の企画に関連した調査で思わぬ発見があり喜んでいる最近。

●**横山信義**（よこやま・のぶよし）
1958年、長野県出身。作家。文芸界の大艦巨砲主義者。今年（2008年）4月より、新シリーズ『鋼鉄の海嘯』がスタートします。筆者にしては珍しく（?）陸上戦の場面が多くなっています。また夏には、上下2巻構成の単発作品も出す予定です。乞御期待。

●**吉岡平**（よしおか・ひとし）
1960年、岡山県笠岡市出身。中学時代は『丸』少年で、戦時派世代の老教師には受けがいい反面、戦後派世代の教師にはメチャクチャ嫌われてました。音楽の時間に軍歌を歌って殴られましたw

●**吉田親司**（よしだ・ちかし）
仮想戦記兼ライトノベルズ作家。近刊に『空母三国志』（学習研究社）などがある。上京するたびに台風に遭遇する「嵐を呼ぶ男」。現在、新作ライトノベルズを絶賛執筆中。

別冊宝島スペシャル
第二次世界大戦秘録 世界・秘密兵器大全
2008年 6月 8日 発行

創刊人 蓮見清一
共同発行人 井上裕務・藤澤英一
編集長 佐藤文昭
編集 薗部真一
松田孝宏(オールマイティー)
橋本あづさ
大場慎
販売責任者 江澤隆志
制作責任者 伊藤俊之
発行所 株式会社宝島社
〒102-8388 東京都千代田区一番町25番地
電話(営業)03-3234-4621
(編集)03-3234-3692
郵便振替=00170-1-170829 (株)宝島社
印刷・製本 株式会社廣済堂

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

本書は2006年11月に小社より発行された『別冊宝島1356 第二次世界大戦秘録 激烈！ 秘密兵器大全』を改題改訂したものです。